浦添市文化財調査研究報告書 第30集

内間西原（イリバル）古墓群Ⅱ

ー浦添市消防署内間出張所および都市計画道路
勢理客線造成工事に伴う緊急発掘調査ー

１９９９年３月

沖縄県浦添市教育委員会

序

内間西原古墓群の発掘調査は、平成４～５年度の調査に続いて今回で二度目を数えます。

今調査は、浦添市消防署内間出張所の建設に伴う緊急発掘調査として実施したもので、同予定地にかかる掘込墓４基を調査しました。

これらの墓は長い年月の間に厚い土砂によって埋もれていましたが、発掘調査によって墓本来の姿を検出し、それぞれの規模や構造等を明らかにすることができました。また、出土した人骨については、人類学の分野から形質学的な分析を試み、近世琉球人の形質や、個々の特徴などの一端を浮かび上がらせることができました。

今後、この調査成果が沖縄の葬制・墓制および琉球人の形質学的研究の前進に寄与できれば幸いと思います。

最後に、今調査を実施するにあたり指導・助言を賜りました諸先生方に対し、厚く御礼申し上げます。

平成11年３月

教育長　福 山 朝 秀

例　　言

1　本報告書は浦添市字内間に所在する内間西原古墓群の発掘調査成果をまとめたものである。

2　発掘調査は浦添市消防署内間出張所及び都市計画道路（勢理客線）建設工事に伴うもので、浦添市教育委員会が浦添市消防本部から依頼を受けて実施した。

3　本報告書に掲載した地形図は浦添市建設部都市計画課所収の25,000分の１図、2,500分の１図、300分の１図を複製した。

4　本報告書の執筆は下記のメンバーで担当し、編集は宮里が行った。

下地安広　第Ⅰ章

安和吉則　第Ⅱ章

宮里信勇　第Ⅲ章／第Ⅳ章第１節のうち各墓の構造／第Ⅴ章

安里　進･廣木ゆかり　第Ⅳ章第１節のうち各墓出土の蔵骨器／第Ⅴ章の蔵骨器年表

北條真子　第Ⅳ章第１節のうち各墓の出土遺物

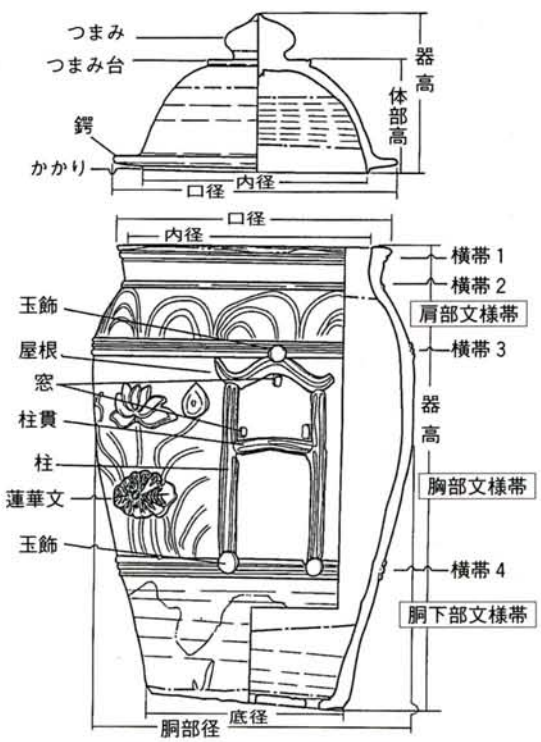
土肥直美･佐宗亜衣子　第Ⅳ章第２節

5　発掘調査および本報告書の作成にあたっては、次の方々から指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げます。また、土肥直美・佐宗亜衣子の両氏には原稿も執筆していただき、重ねてお礼申し上げます。

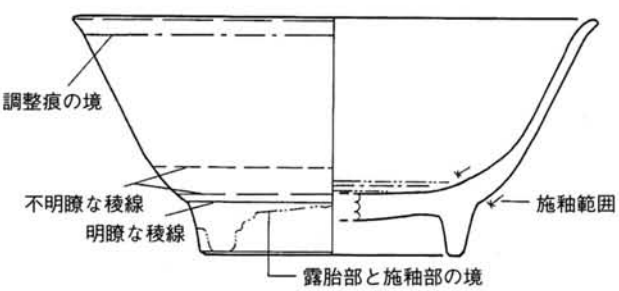
土肥直美・佐宗亜衣子（以上、琉球大学医学部）、長間安彦・徳元 剛（以上、浦添市立図書館沖縄学研究室）、家田淳一・藤原友子（以上、佐賀県立九州陶磁文化館）、仲宗根 求（読谷村立歴史民俗資料館）

6　出土した資料は浦添市教育委員会教育部文化課で保管している。

凡　　例



甕形厨子甕の各部名称と計測位置



遺物実測図の表現

報 告 書 抄 録

ふりがな	うちま いりばる こ ぼぐん
書名	内間西原古墓群Ⅱ
副書名	浦添市消防署内間出張所及び都市計画道路建設工事に伴う緊急発掘調査
巻次	
シリーズ名	浦添市文化財調査研究報告書
シリーズ番号	第30集
編著者名	安里 進・下地安広・宮里信勇・安和吉則・北條真子・廣木ゆかり・土肥直美／佐宗亜衣子
編集機関	沖縄県浦添市教育委員会文化課
所在地	〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶1丁目1番1号　　TEL：098－876－1234
発行年月日	1999年（平成11年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちまいりばるこぼぐん 内間西原古墓群	おきなわけん 沖縄県 うらそえしあざうちま 浦添市字内間	47208		26° 14′ 20″	127° 42′ 00″	1998.4.16 ～ 1998.7.17	200	消防出張所及び都市計画道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内間西原古墓群	古墓	近世～近代	掘込墓 4基	陶磁器 蔵骨器 花瓶 碗 など 人骨	

もくじ

序（教育長あいさつ）
例言・凡例
報告書抄録

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1

第Ⅱ章　位置と環境 …… 2

第Ⅲ章　調査の経過 …… 6

第Ⅳ章　調査の成果 …… 7
　第１節　発掘調査成果 …… 7
　　1.12号墓 …… 7
　　2.13号墓 …… 14
　　3.14号墓 …… 18
　　4.15号墓 …… 25
　　5.近代以降の墓 …… 32
　　6.墓道・表採の蔵骨器 …… 32

　第２節 内間西原古墓群出土の人骨について …… 34

第Ⅴ章　まとめ …… 47

写真図版 …… 50

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

この内間西原古墓群の発掘調査は、浦添市消防署内間出張所および都市計画街路勢理客線の造成工事に先立つものである。経緯は次のとおりである。

1）平成９年10月27日付け、浦添市消防本部消防長から浦添市教育委員会教育長あて、内間出張所建築予定地内の文化財の有無について照会があった。

2）同年の11･12月に文化課職員が二度踏査を行い、古墓が少なくとも３基あることを確認した。

3）踏査の結果を踏まえ、平成10年１月12日付け浦教文第87号で、教育長から消防長あて、文化財があること、開発行為の前に文化財保護法の手続きと発掘調査が必要であること、発掘調査の予算措置が必要となることを回答した。

4）平成10年２月に双方調整を行い、４月中頃から６月中頃まで約２ケ月間の発掘調査を実施し、平成10年度内で調査報告書まで刊行することとした。

5）平成10年４月２日に本件に関する協定と、履行期限が平成10年４月２日～平成11年３月31日、委託金額4,577千円の契約を締結した。

6）平成10年４月10日付け浦教文第５号で、文化庁長官あて、埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、発掘調査が始まった。

7）平成10年４月22日付け、沖縄県教育委員会教育長から工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合は保存等に別途協議することの通知があった。

第２節　調査体制

本件に関する契約事務および発掘調査等は受託者の浦添市教育委員会が行い、予算に係る予算管理・伝票処理は委託者の浦添市消防本部が対応した。調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会	教育長	福山朝秀
事業所管	教育部文化課	課長	比嘉秀安
事務総括	〃	主幹	安里　進
事業調整	〃	文化財係長	下地安広
調査員	〃	文化財係	宮里信勇
調査補助員	〃	臨時職員	北條真子
発掘作業員	浦添市シルバー人材センターから派遣		
整理作業員	長山里枝、木下秋海、楚南清美、廣木ゆかり、金田いぶき		
調査協力者	松川　章、安和吉則、渡久地政嗣（以上、文化課文化財係）		

指導・協力者　例言に記載した。

第Ⅱ章　位置と環境

内間西原古墓群の所在する字内間は、浦添市の南西部に位置し、北は字仲西、字宮城、東は字沢岻、西は字勢理客と接し、南は西流する安謝川を境にして那覇市安謝と接している。かつては那覇市安謝を前安謝、内間を後安謝と称していたといわれ、「琉球国由来記」には、内間村にある拝所として安謝森・安謝之大ヒヤノ殿が記載されている（註１）。字内間は四つの小字からなり、集落の中心である大嶺原を囲むかたちで、後原、東原、西原がある。内間西原古墓群のある小字西原は字内間の西端に位置し、現在は大半が住宅地となっているが、戦前は安謝川沿いに畑地と原野が広がり、サチバルマーチューと呼ばれる小丘は、カヤ地帯で松林となっていた（註２）。

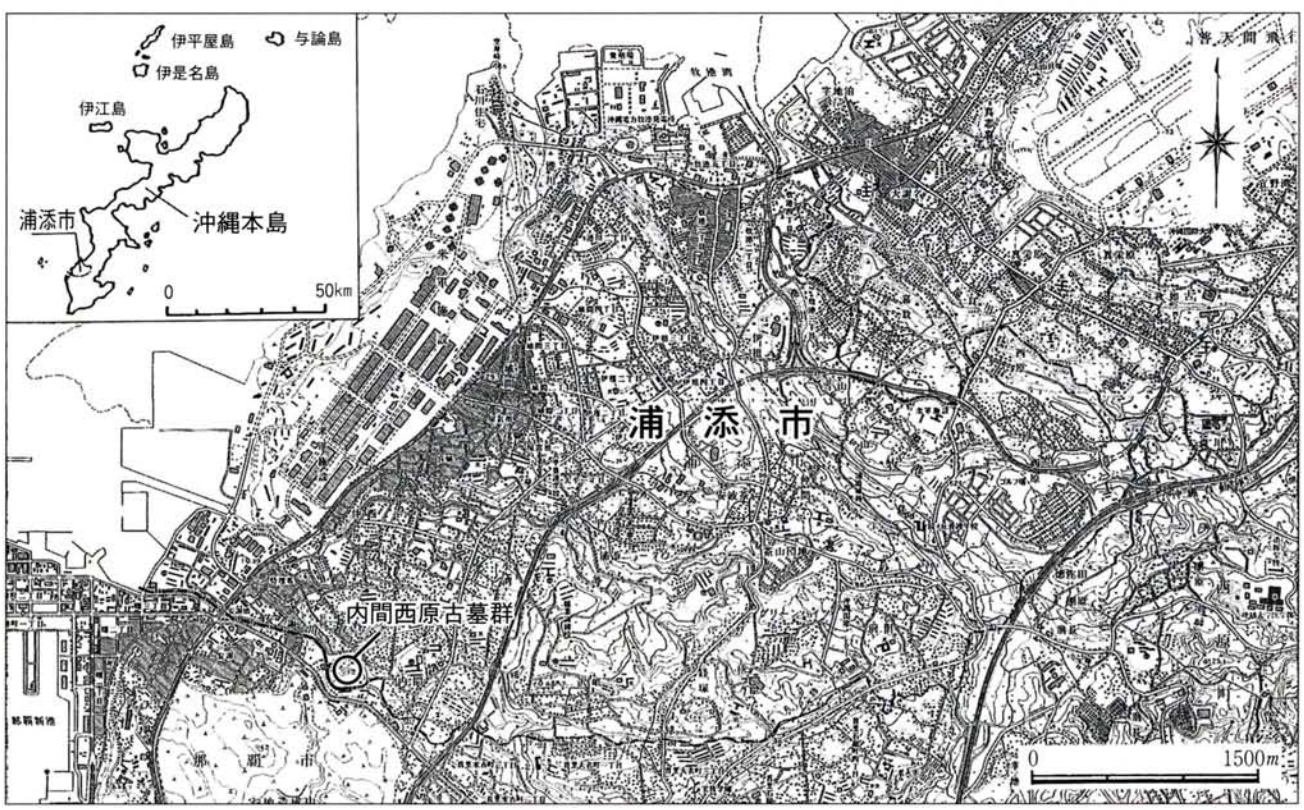
内間西原古墓群はこの小丘を中心に分布している。小丘は琉球石灰岩を基盤とした独立丘で、平面形が北を頂点とした三角形状をなし、標高は最高部15m程である。古墓は主として標高５～10mの斜面地に造られており、丘陵上の平坦部には、コンクリート造りの家形墓など近年の墓が散在している。

現在、この小丘の北西裾に沿うように都市計画道路・宮仲線が走り、小丘の南半部は内間西公園として整備され、人々の憩いの場所となっている。平成４・５年度には、この都計道路および公園建設に伴い、古墓15基の緊急調査が実施された（註３）。今回調査した古墓４基は、小丘の北半部に所在するもので、３基は北西斜面に、残る１基は東斜面に位置するものである。

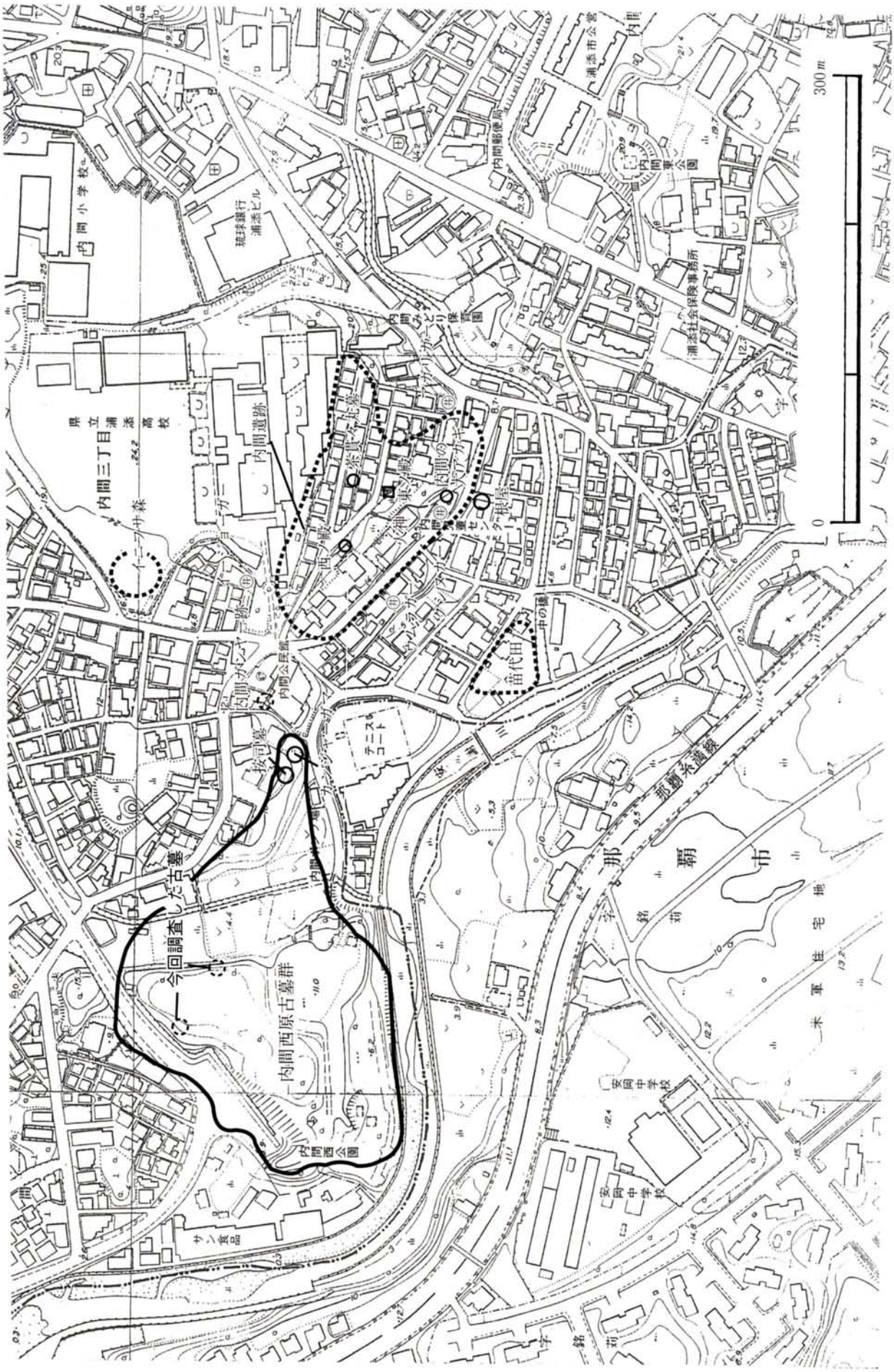
註１：『浦添市史第６巻』資料編５　自然・考古・産業・歌謡 1986.3 浦添市史編集委員会（浦添市教育委員会）

註２：『内間字誌』 昭和56年12月３日 内間字誌編集委員会（内間自治会）

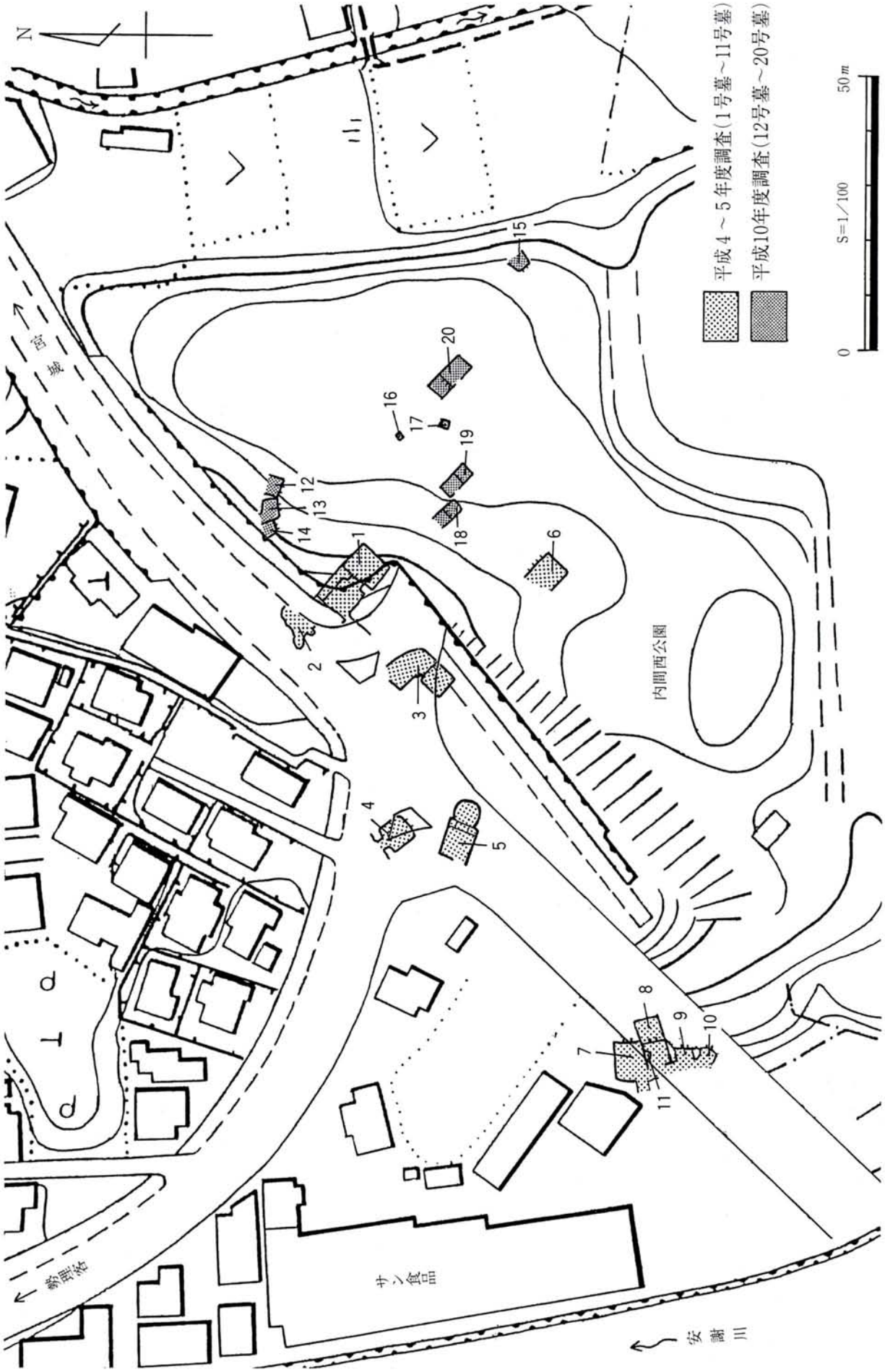
註３：『内間西原古墓群』 1994.3 －都市計画道路建設工事に伴う緊急発掘調査－（浦添市教育委員会）



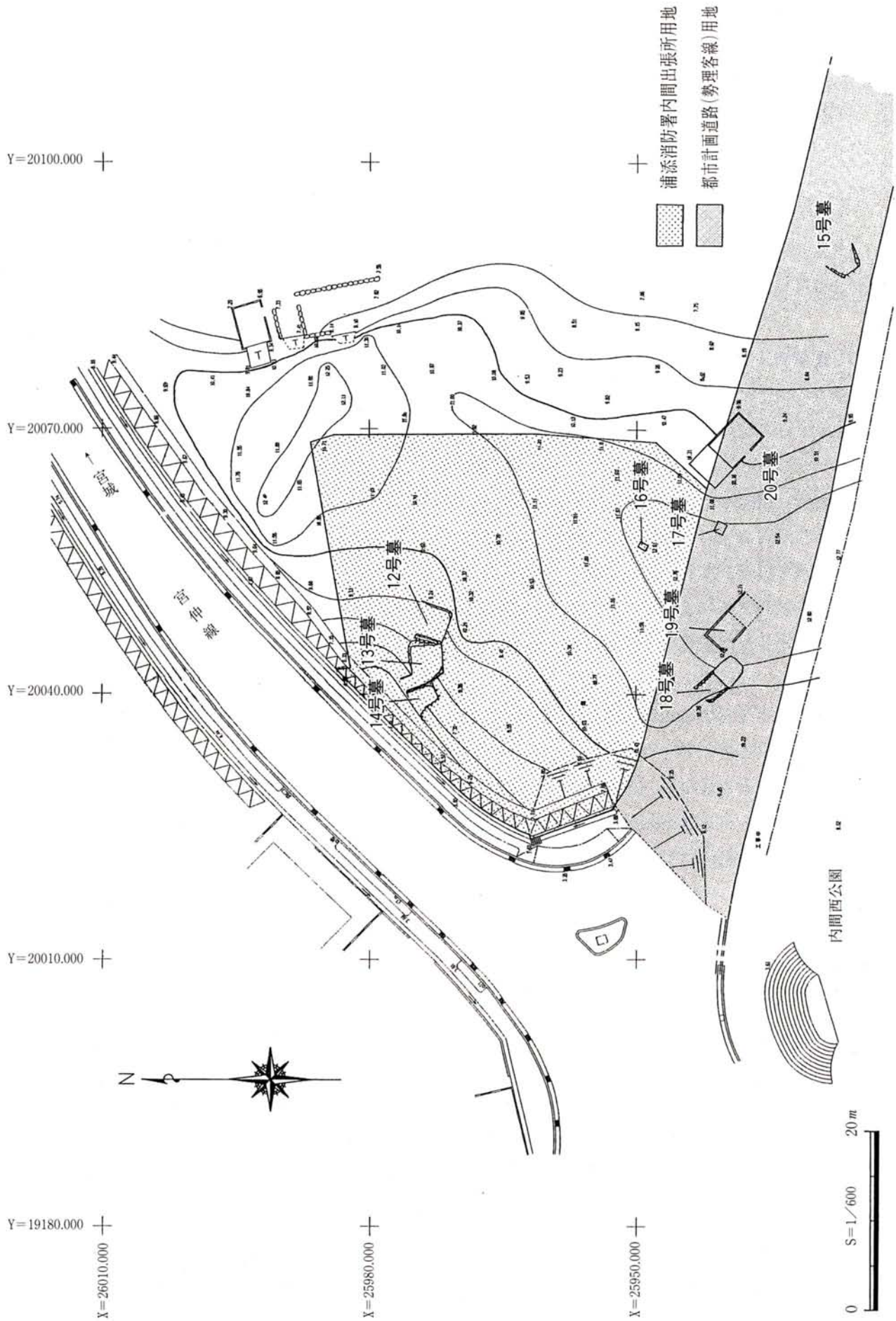
第１図　内間西原古墓群の位置



第２図　内間西原古墓群と周辺の文化財


N
平成4～5年度調査(1号墓～11号墓)
平成10年度調査(12号墓～20号墓)
0
S=1/100
50m
宮崎
内間西公園
サン食品
安謝川
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

第3図　各墓の位置



第4図　調査した古墓と浦添市消防署内間出張所及び都市計画道路用地の位置関係

第Ⅲ章　調 査 の 経 過

浦添市消防署内間出張所及び都市計画道路勢理客線の工事予定地には、堀込墓４基のほか、ブロック造りの破風墓や仮墓など総数９基の墓が所在していた。これらの墓には平成４・５年度に調査を実施した１～11号墓（註）に後続させ、それぞれに12号～20号の番号を付した。

今回、埋蔵文化財として発掘調査の対象としたのは、確認された９基のうち堀込墓４基（12号～15号）である。他の５基（16号～20号）については、いずれも近代～現代に造られたものと考えられたため、調査は写真撮影と略測、平板による地形図へのプロット等で済ませた。

発掘調査は平成10年４月16日から同年７月17日の期間で実施した。

調査は消防出張所用地に所在する３基（12～14号墓）から手掛けた。まず現況の写真撮影を済ませ、墓庭および周辺の低草木、倒木などの除去作業から着手した。一帯にはハゼノキを中心にオオバギ、ヤブニッケイなどの高木等も生育していたが、調査に差し支えのあるものについては伐採した。

伐採後の清掃が完了したのち、各墓の割付を行った。割付は墓口を二等分するかたちで縦軸を設け、これと直角に墓庭および墓室で横軸を設定した。

発掘は墓庭及び墓室の二次堆積土を除去し、使用されていた当時の面を検出する作業が主となった。

12号墓は墓庭から墓室にかけて、この丘陵の地山となっている赤色土（マージ）が厚く堆積していた。この二次堆積土は墓庭では厚さ１ｍほどもあり、墓口は2／3ほど埋まっていた。

14号墓も二次堆積土によって大部分が埋まった状態にあったが、この堆積土は12号墓とは異なり、礫混じりの土が主体であった。12･14号墓はこうした堆積土を発掘し、墓本来の面を検出するのに多くの時間を費やす結果となった。13号墓については、墓室内で天井や壁の崩落土、外部から放り込まれたゴミなどが多くみられたが、墓庭への二次堆積土は薄く、墓の検出は比較的容易であった。

上記の12号～14号墓がある程度姿を現した段階で、都市計画道路用地に所在する15号墓に着手した。15号墓の墓庭中央にはアカギの大木が生育し、さらに12・14号墓と同様、墓庭から墓室にかけて二次堆積土が厚く堆積していたため、15号墓についても検出作業には手間取った。

実測は各墓の発掘の進捗に合わせて行った。墓室の実測は墓庭発掘と並行したが、墓庭については発掘完了後に行った。

ところで、発掘調査を実施した４基のうち12号墓では、墓庭の南東隅に厨子甕が集められていた。中には人骨が納められていたため、新聞広告を行い、縁故者からの連絡を待つことになった。これらの人骨は厨子甕とともに、預かり期日まで現場保管していたが、結局、関係者は現れず、厨子甕は教育委員会へ、人骨については形質人類学的な分析を行うため琉球大学医学部へ運搬した。

今調査では、墓造成の状況まで詳細に調べる予定であったが、先述のように、墓の検出に手間取ってしまったことや、雨天により調査を中止した日が多かったことなどが影響し、調査日数に不足が生じてしまった。調査期限の都合上、予定していた造成状況の調査は断念し、現場を引き渡すことになった。

註：『内間西原古墓群』 1994.3 －都市計画道路工事に伴う緊急発掘調査－（浦添市教育委員会）

第Ⅳ章　調 査 の 成 果

第１節 発掘調査成果

今回、発掘調査を実施した古墓４基は、いずれも琉球石灰岩の岩盤に横穴をあけて墓室とする掘込墓である。12号～14号墓は古墓群の所在する丘陵の北斜面、標高７～８ｍに隣接して造られている。一方、15号墓はこれらの３基とは別地点の丘陵東斜面、標高約６ｍに位置している。調査時には、いずれも空墓となっていた。

以下に各墓の構造と出土遺物について記述するが、16号墓～20号墓の５基については「近代以降の墓」として、本節第５項で墓の概略のみを紹介することにした。

１．12号墓

調査前の状況は前章で記したように墓庭、墓室とも厚い二次堆積土に覆われ、墓口上部のみがわずかに確認できる程度であった。調査を進めていく中で、墓口の東側から仮墓とみられる遺構が新たにみつかり、これを「12号墓仮墓」とした。

調査前、墓庭の南東隅に、人骨が納められたままの厨子甕が集められていた。これらは横倒しの状態にあって、内部には土が入り込んでいた。１個は完全な形を保っていたが、他は破損し、周囲に破片が散乱していた。

⑴　墓の構造

まず、墓室についてみると、平面観は四角形に近い形状だが、四隅は角を造らず、ルーズである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、天井は墓口近くに自然のフィッシャーがみられるものの、全体的にはほぼ水平。床面は石灰岩の石粉を混ぜた粘質土で仕上げている。タナはない。床面積は約 1.8㎡。墓室右奥の床面直上から、第８図12-4の厨子甕の底部と同図12-6の蓋が出土した。

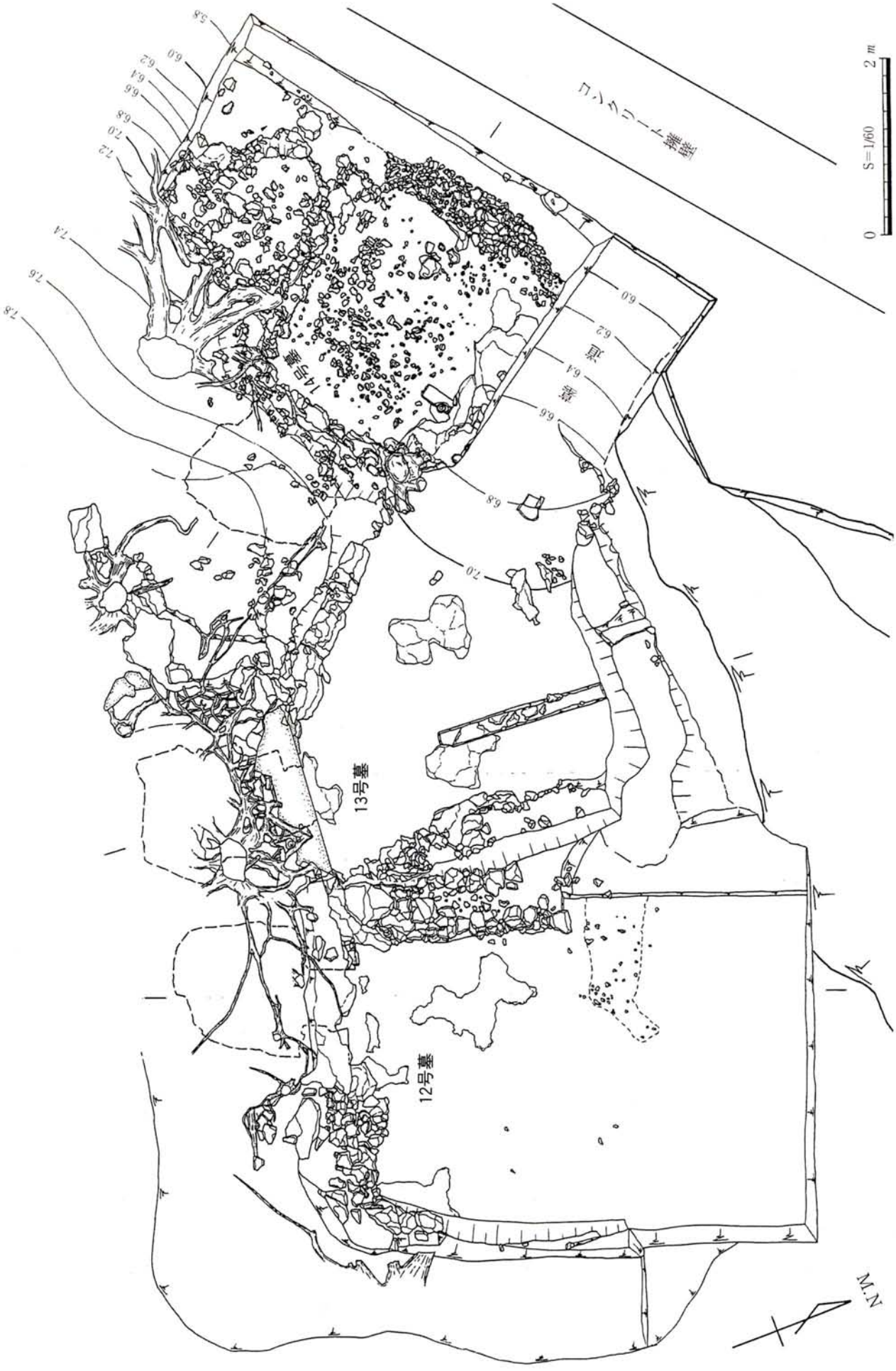
墓の正面は石灰岩の石積みで、墓口だけは四角形の切石を使用し、他は野面積みを行っている。墓口のサイズは縦80㎝×横60㎝で、蓋石は切石を積み上げる方法である。墓口は北北東に向いている（N21°E)。墓口下端の標高は約7.8ｍ。

庭囲いについてみると、墓に向かって右側（西側）は、高さ60㎝程の野面の石積みを行っている。同石垣の先端部は長方形の大型切石を縦位に据えて留めており、これを境に北側が墓庭への入口と考えられた。一方、対面する左側（東側）の庭囲いは、大部分が礫混じりの土手となっている。

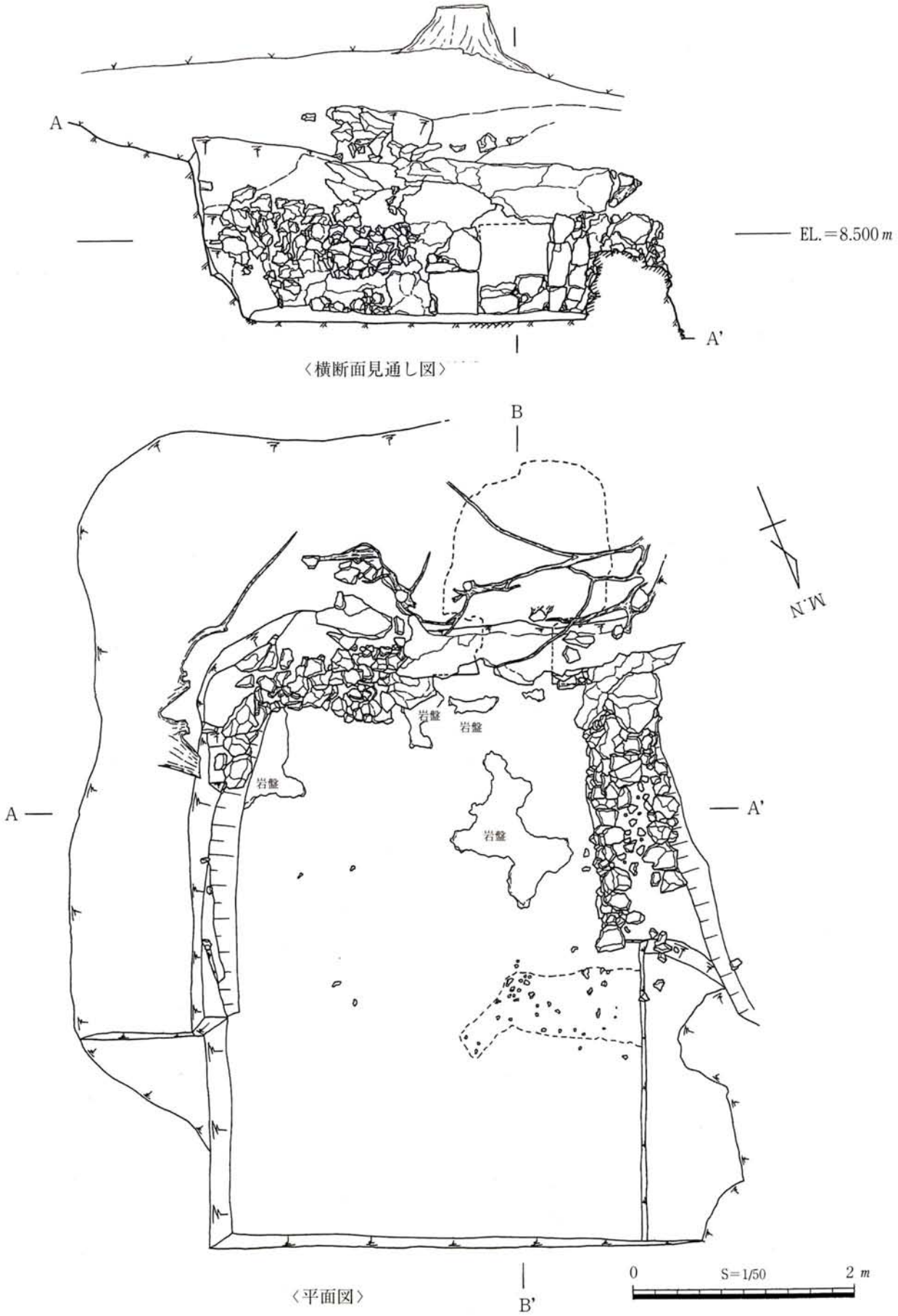
墓庭面は平坦に削られた岩盤が部分的にみられるものの、大方は地山の赤土面で占められている。ただし、墓庭入口と考えられる箇所については混礫土で仕上げている。

⑵　12号墓仮墓

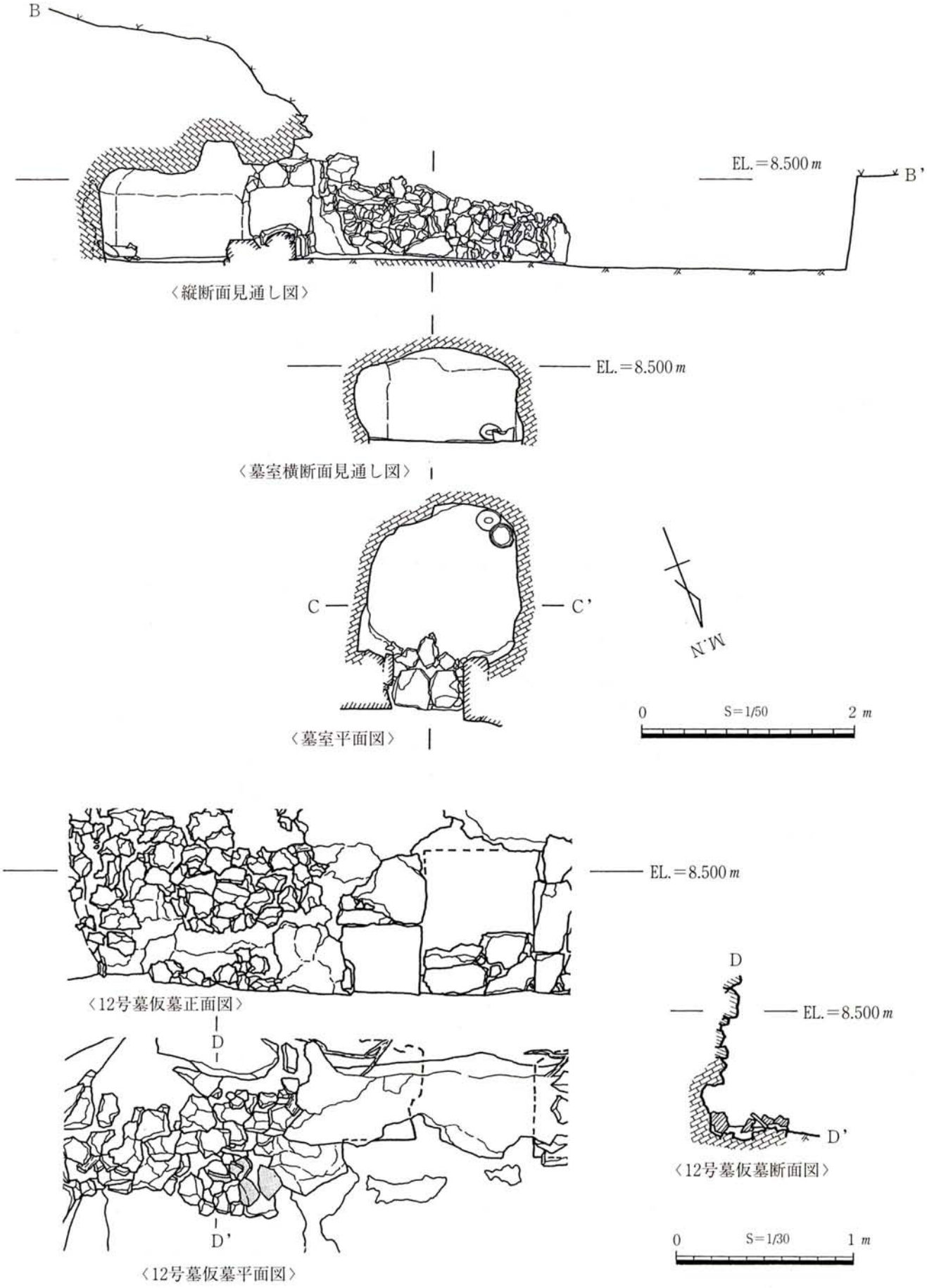
墓口の東約１ｍの地点で、仮墓とみられる遺構が出土した。岩盤が浅く掘りくぼめられ、その縁辺には自然礫が並んでいた。遺構内部からも自然礫が出土したことから、本来は前面に野面の石積みが行われていたと考えられた。遺構の平面形は楕円に近く、長径約60㎝、深さ10㎝弱である。遺構内部からは蔵骨器に転用したとみられる陶器片（第８図12仮－1・2）と寛永通宝（第９図１）が一括出土した。人骨の出土はみなかったが、これらの遺物から本遺構を仮墓と判断した。



第５図　12号墓・13号墓・14号墓の位置関係平面図



第6図　12号墓



第７図　12号墓／12号墓仮墓

(3) 出土遺物

遺物は墓室、墓庭、12号墓仮墓から出土した。出土遺物は第１表の通り。他にも、ガラス瓶や砲弾の破片など、戦中以降の遺物が出土したが、今回は、これらの記述は見送り、蔵骨器、陶磁器、古銭について記すことにした。

なお、記述は①蔵骨器、②12号墓仮墓出土遺物、③墓庭出土遺物に分けて行う。ただし、蔵骨器については一括した。

出土遺物 / 出土地点		沖縄産陶器												染付碗	寛永通寶
		蔵骨器				施釉陶器					無釉焼締め		アカムヌー		
		ボージャー厨子		転用品		碗	小碗	鍋	火入	急須	不明	摺鉢	不明	蓋？		
		蓋	身	蓋	身											
墓室	二次堆積土								1						
墓室	床面着	1	1												
墓庭	表土	3	3												
墓庭	二次堆積土					3	1	2		1	5	7	1	1	1	
12号墓仮墓内				1	1											1

第１表　12号墓出土遺物一覧

①蔵骨器（第２・３表、第８図、写真図版６・７上段）

墓庭から厨子甕４基が出土した。身と蓋が別々に出土しているためセット関係は不明。４基の厨子甕の身（N0.12-1･2･3･4）は、いずれもボージャー厨子の新式（1730年代～1790年頃）である。蓋（N0.12-5･6･7･8）も、つまみのない無釉笠形でボージャー厨子の新式の蓋に対応する。

N0.12仮-1･2は12号墓仮墓から出土した蔵骨器である。

N0.12仮-2の土器壷転用蔵骨器は、ロクロ使用の宮古二式土器の小型壷の口縁部を打ち欠き、底部に穿孔している。N0.12仮-1は、小型の喜名焼壷の胴部を打ち欠いたもので、N0.12仮-2の宮古二式土器壷転用蔵骨器の蓋に使用したと考えられる。喜名焼の蓋の年代から17世紀後半と推定できる。

なお、本書で使用している厨子甕の型式分類と編年は、上江洲均の『沖縄の暮らしと民具』（註１）と安里進の『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』（註２）に依拠した。

註１：上江洲均　1972年『沖縄の暮らしと民具』（慶友社）

註２：安里　進　1998年『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』（浦添市教育委員会）

No	身形式	型式	口外径	口内径	胴径	器高	底径	器面調整・装飾
12－1	ボージャー厨子	新	22.0	16.7	29.3	41.9	19.0	頸部横帯は凹線３条、肩部横帯は凹線２本。家形庇（屋門）。底面に穿孔６。無釉。外面：口縁部回転ヨコナデ、胴部回転ヨコナデ後不定方向ナデ、底部～底面静止ヘラケズリ。内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部ミズビキ後回転板ナデ、底面ナデ。
		人骨 1♀/海産貝 287コ、陸産貝 2コ						
12－2	ボージャー厨子	新	36.0	31.3	41.9	58.6	25.5	頸部横帯は凹線３条、肩部横帯は凹線２本。家形庇（屋門）。底面に穿孔６。無釉。口縁部に重ね焼きの痕有り。外面：口縁部回転ヨコナデ、胴部回転ヨコナデ後不定方向ナデ、底部～底面静止ヘラケズリ。内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部ミズビキ後回転板ナデ、底面ナデ。
		人骨 1♂1♀/海産貝 2コ						
12－3	無釉甕形	Ⅰ	30.8	26.2	34.8	47.5	22.5	横帯１凹線２条、横帯２突帯、肩部凹線２本。家形庇（屋門）。底面に穿孔４。外面無釉、内面マンガン釉か？。外面：口縁部は横帯１凹線施文後回転ヨコナデ、胴部回転ヨコナデ後不定方向ナデ、底部～底面静止ヘラケズリ。内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部ミズビキ、底面ナデ。
		人骨 1♀/海産貝 1コ						
12－4	ボージャー厨子	新	21.2	17.6	26.1	38.4	17.2	頸部横帯は３～４条の沈線、肩部横帯は沈線２本。家形庇（屋門）。底面に穿孔５。無釉。外面：口縁部～胴部回転ヨコナデ、胴部の一部に不定方向ナデ、底部～底面静止ヘラケズリ、内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部ミズビキ、底面ナデ。
		人骨 1未成人						

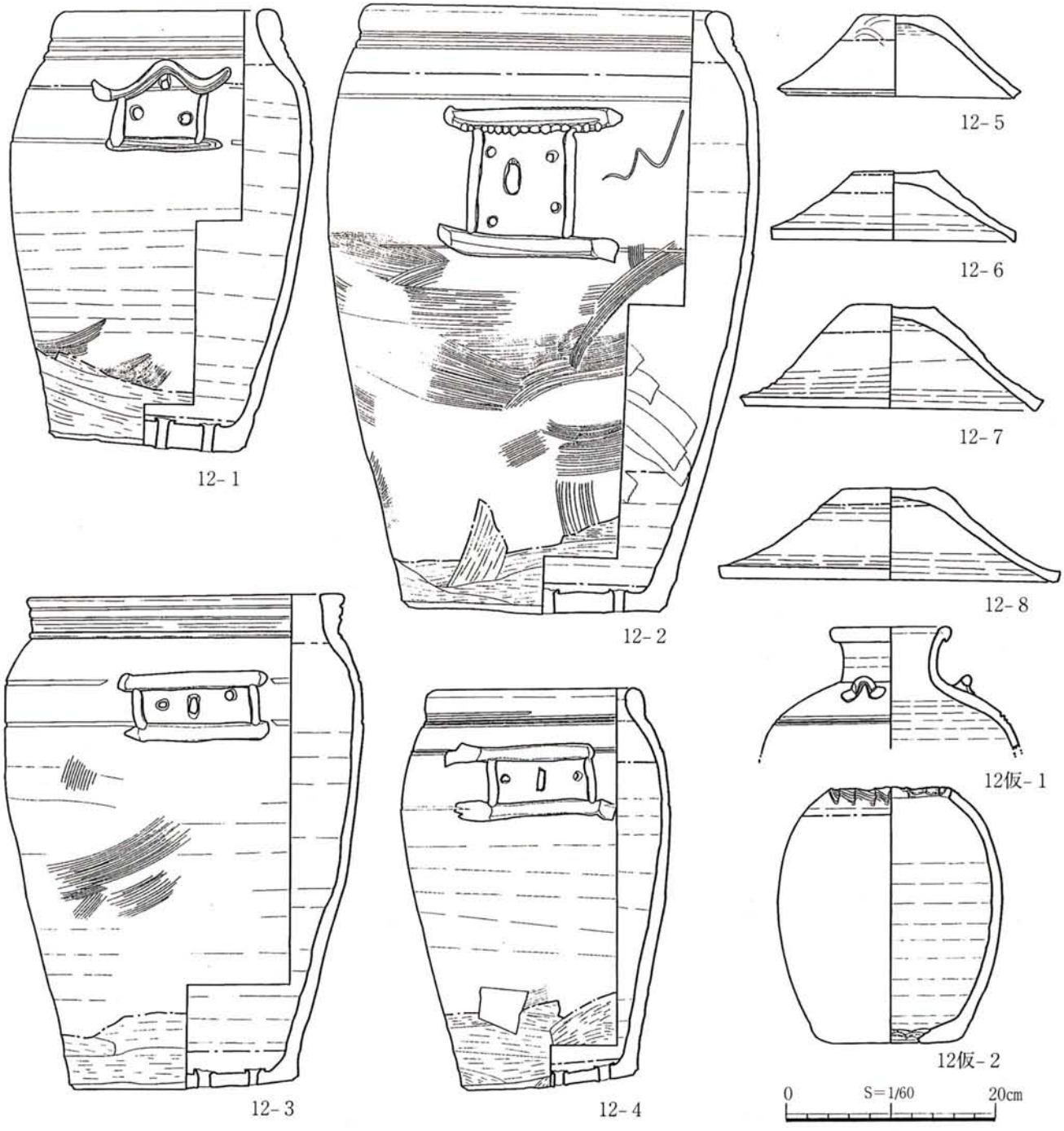
No	蓋形式	外径	内径	器高	体部高	器面調整・装飾
12－5	無釉笠形	23.4	21.8	8.0	－	つまみなし。無釉。外面：上面無調整、体部ミズビキ後回転ヘラケズリ、下半部回転ヨコナデ。内面：ミズビキ後、天井部を残して回転ヨコナデ。
12－6	無釉笠形	23.2	23.0	6.5	－	つまみなし。無釉。外面：上面無調整、体部ミズビキ後、上半部回転ヘラケズリ、下半部回転ヨコナデ。内面：ミズビキ後、天井部を残して回転ヨコナデ。
12－7	無釉笠形	29.0	27.5	9.8	－	つまみなし。無釉。外面：上面無調整、体部ミズビキ後、上半部回転ヘラケズリ、下半部回転ヨコナデ。内面：全面的に回転ヨコナデ。
12－8	無釉笠形	32.8	32.0	9.4	－	つまみなし。無釉。外面：上面無調整、体部ミズビキ後、上半部回転ヘラケズリ、下半部回転ヨコナデ。内面：全面的に回転ヨコナデ。

第２表 12号墓 蔵骨器観察表　　＊法量の単位はcm

	種　類	口径	胴径	底径	器高	器面調整・装飾
12号墓仮墓-1	喜名焼　壺	11.8	—	—	—	壺口縁部。胴部を打ち欠く。玉縁口縁。肩に小さな耳1個残る。肩部に4条の沈線横帯。外面：回転ヨコナデ。内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部ミズビキ。
12号墓仮墓-2	宮古式土器（壺）	11.4	21.6	14.0	24.5	口縁部を打ち欠く。頸部に櫛描き波状文。底面に焼成後の穿孔。胎土中に白砂少量混和。外面：頸部回転板ナデ、胴部～底部回転ヨコナデ、底面無調整。内面：胴部ミズビキ、底面回転ヘラケズリ。内外面褐色。

第3表 12号墓仮墓 蔵骨器観察表

＊法量の単位はcm



第8図　12号墓（12—1～8）及び12号墓仮墓（12仮—1・2）　蔵骨器

②12号墓仮墓出土遺物（第9図1、写真図版7上段ー3）

第９図１は寛永通宝で直径2.5cm、厚さ0.1cm、重さ約2.8gを測る。裏面に文字は見られない。第８図12仮ー１・2の転用蔵骨器とともに出土した。

③墓庭出土遺物（第9図2～6、写真図版7下段）

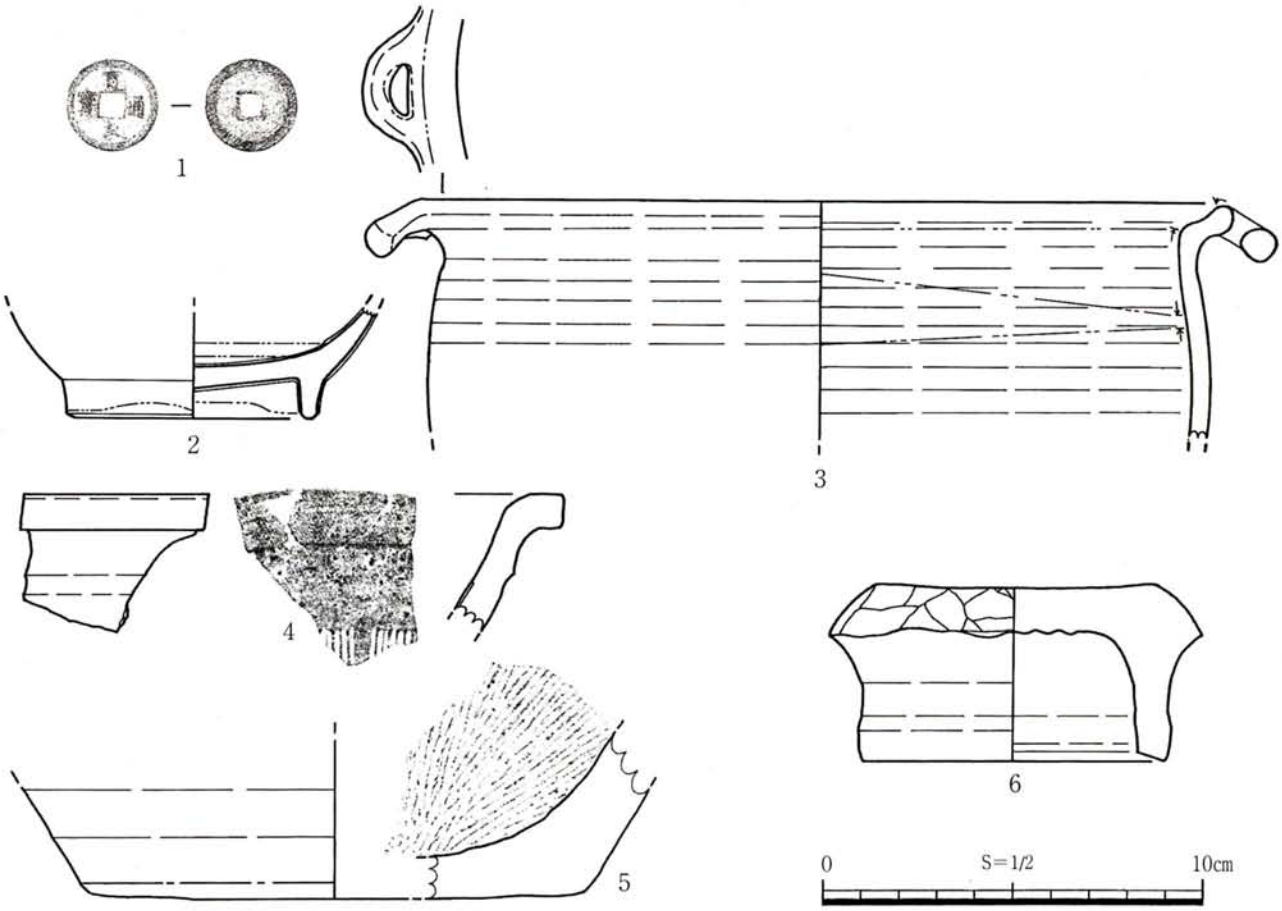
墓庭の二次堆積土中から出土した遺物のうち、沖縄産の施釉陶器２点、無釉焼締め陶器２点、アカムヌー１点を掲載した。

第９図２・３は施釉陶器である。２は掛け分けの碗で、外面は全面に鉄釉を掛けた後、畳付部のみ釉を掻き取っている。内面は白化粧土と透明釉を施した後、見込みに蛇の目釉剥ぎを施している。高台及び見込みの蛇の目釉剥ぎ部分には白土の熔着が見られる。３は鍋の口縁部破片である。推算口径は約22cmで、口縁部を屈曲させ蓋受けを作っている。胎土は淡灰色で、外面から内面までに鉄釉を施し、口唇部は釉を掻き取っている。外面には回転横ナデ痕、内面には水挽き痕が明瞭に残る。

４・５は無釉焼締め摺鉢である。４は口縁部の資料で、屈曲部が突帯に整形されている事から17Ｃ頃のものと思われる(註3)。胎土は茶褐色で、器面は自然釉により黒褐色を呈している。５は底部の破片資料である。器面にはうっすらと回転横ナデ痕が観察できる。外底面は無調整のままである。

６は蓋と思われるアカムヌーである。厚手の資料で、頭部の周囲は故意に打ち欠かれている。上面は平坦。色は明橙褐色で、胎土に多くの赤色粒が見られる。水挽き後、回転横ナデにより調整している。

註3：安里 進・上原政昌・家田淳一 1987.3「摺鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじまあ』 名護博物館紀要・３（名護博物館）



1：古銭　2・3：沖縄産施釉陶器　4・5：沖縄産無釉焼締め陶器　6：アカムヌー

第９図　12号墓出土遺物（１：12号墓仮墓出土　２～６：墓庭二次堆積土中出土）

2．13号墓

13号墓では、12号墓や後述の14号墓のような厚い二次堆積土はみられなかった。表土の腐植土と周辺からの崩壊土がわずかに堆積する程度であったため、近年まで使用されていた可能性が考えられた。

墓室には、墓移転の際に打割し遺棄されたと考えられる厨子甕の破片が散乱し、その上には近年に放り込まれたゴミが大量に被さっていた。

(1) 墓の構造

13号墓は前記12号墓の西側に隣接している。12号墓より若干低い位置に構築されており、両墓庭面の比高は約50cmである。墓口下端の標高は約7.2m。

墓室は五角形に近い形状を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。墓室に入って右側の壁では、岩盤のへこみに自然石を積み上げて壁面を整えた部分もみられる。天井は本来水平に削られていたようだが、岩盤の剥落や、自然のフィッシャーなどで凹凸している。床面は、石粉や土を敷き詰め、平坦に仕上げている。タナはない。墓室床面積は約 1.6㎡。

墓の正面はコンクリートブロックを積んでいる。ブロックの目地や墓口の上部などは、さらにセメントを上塗りして仕上げている。墓口の蓋もブロックを使用。墓口のサイズは縦85cm×横60cmで、ほぼ北向き（N4°E)。屋根は自然表土のままだが、ハマイヌビワの巨木が生育し、木根が屋根全体を被覆している。

墓庭は、削平された岩盤が部分的に露出しているが、他は混礫土面。庭囲いについてみると、左右（東西）とも土手で、下部は墓庭掘削時の岩盤が露出したままである。石積みはみられない。墓口に対面する北側は混礫土を土塁状に盛って庭囲いとしている。盛り土は縦軸上で幅80cm前後、高さは約30cm。

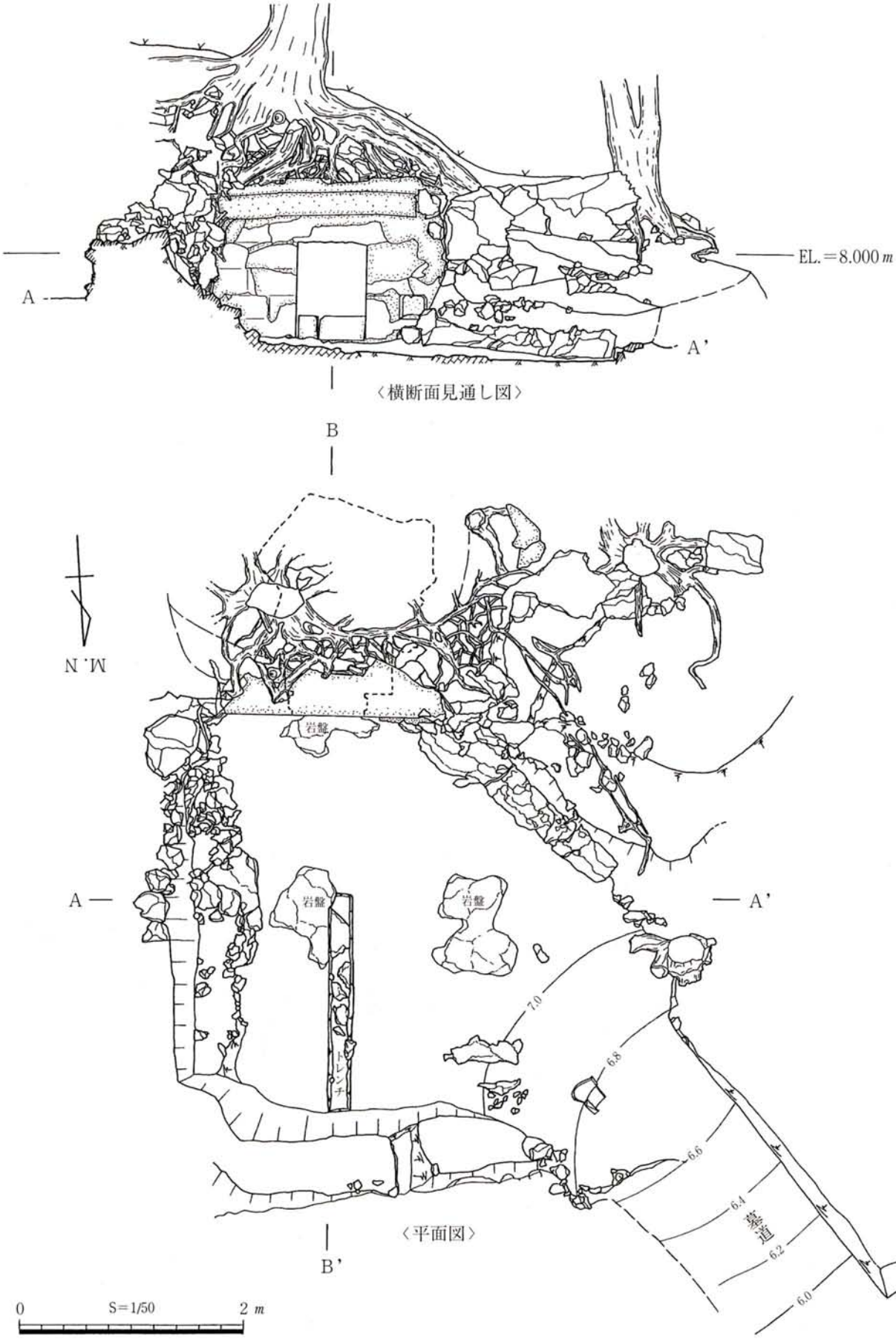
墓庭入口は北西部にあり、外部から墓庭入口への墓道は緩やかな上りになっている。本墓の西側に隣接する14号墓の墓庭は、この墓道造成の際に埋められたことが、後の14号墓の発掘で明らかになった。

(2) 出土遺物

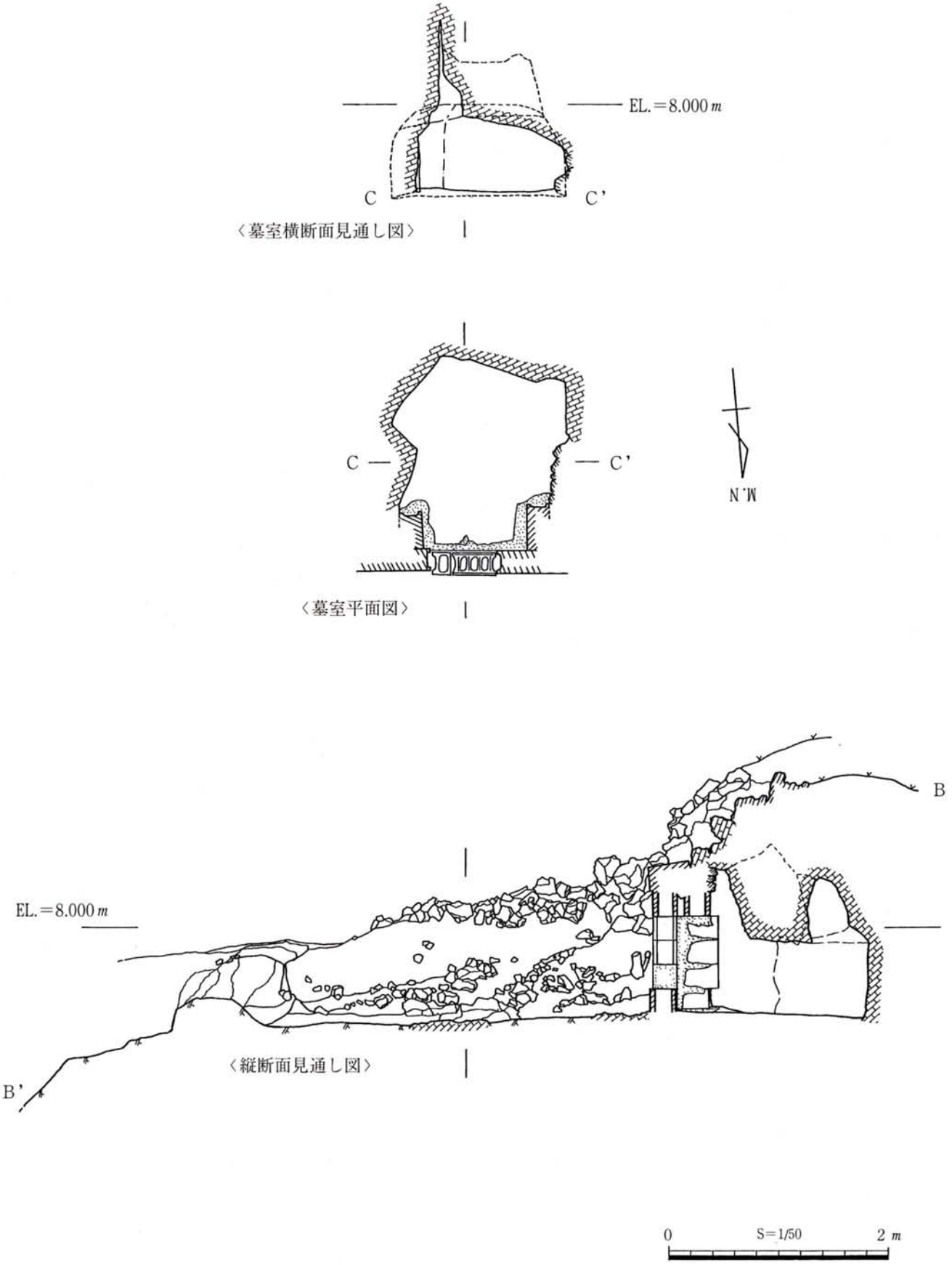
遺物は主に墓室から出土した。出土遺物は第４表の通りであるが、この他に明らかに近年紛れ込んだものも多く、これらについては記述を省いた。ここでは、墓室出土の蔵骨器についてのみ記述する。

出土遺物／出土地点	沖縄産陶器							本土産磁器	かんざし
	蔵骨器						無釉締め焼		
	マンガン掛け		現代甕型		上焼御殿型				
	蓋	身	蓋	身	蓋	身	壷	猪口	
墓室表採	1	1	2	2	1	1			
墓庭表採							1	1	
庭囲い表採									1

第４表　13号墓出土遺物一覧


EL.＝8.000 m
A
A'
〈横断面見通し図〉
B
M. N
岩盤
岩盤
岩盤
トレンチ
7.0
6.8
6.6
6.4
6.2
6.0
墓道
〈平面図〉
B'
0
S=1/50
2 m

第10図　13号墓


EL.＝8.000 m
C
C'
〈墓室横断面見通し図〉
C
C'
N.W
〈墓室平面図〉
B
EL.＝8.000 m
〈縦断面見通し図〉
B'
0
S＝1/50
2 m

第11図　13号墓

蔵骨器（第12図、第５表、写真図版９）

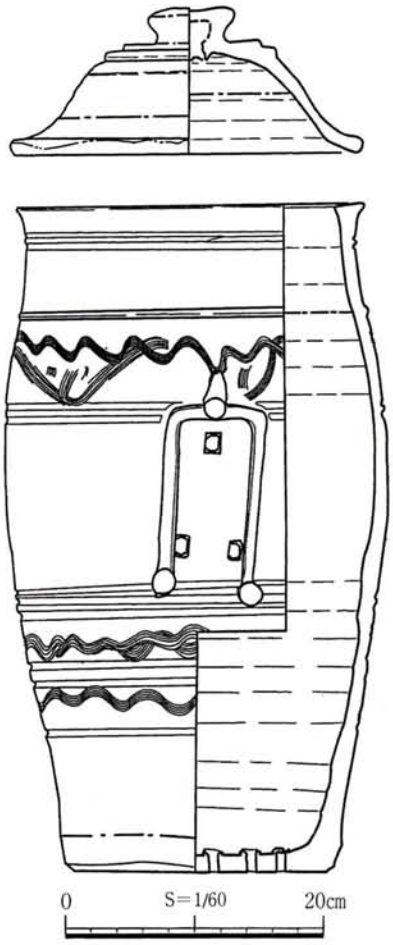
墓室から採集した蔵骨器は厨子甕４基である。すべて破片の状態で散乱しており、墓移転の際に遺棄されたものと考えられた。４基のうち、マンガン釉甕形１基については実測図を掲載したが、他は写真のみ（写真図版9）で示した。

第12図のNO.13-1は、マンガン釉甕形のⅣD式（1850～1890年代）である。蓋には昭和十八年死亡と一九四五年死亡の銘書がある。

沖縄戦直後の一九四五年の銘書があるNO.13-2は、焼成後に水性絵の具で彩色されている。

NO.13-3は昭和三四年の銘書があり、焼成後に油性塗料で彩色されている。

NO.13-4は、上焼御殿形で、白化粧後コバルト釉、緑釉、鉄釉が施されている。



第12図　13号墓 蔵骨器（NO.13―1）

No	身形式	型式	口外径	口内径	胴径	器高	底径	器面調整・装飾
13－1	マンガン釉甕形	ⅣD	27.3	22.5	30.0	52.5	21.3	横帯１凹線、横帯２突帯、横帯３凹線２条、横帯４凹線３条。屋門アーチ形玉飾り付。底面の穿孔16。肩部文様帯と胴下部文様帯に櫛描波状文。外面：マンガン釉、底部～底面は静止ヘラケズリ。内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部回転板ナデ、底面ナデ。
13－2	庇付甕形	Ⅵ	26.4	21.6	27.2	49.1	21.1	横帯１凹線。屋門唐破風形玉飾り付。底面穿孔７。肩部文様帯と胴部文様帯に型抜の獅子頭、龍、蓮華葉、法師座像を張付。油性塗料で着彩。外面：底部静止ヘラケズリ、底部に小孔を巡らす。内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部回転板ナデ、底面ナデ。
		銘書：昭和三四年旧五月一日死亡　新垣節子　当年十才　父三郎長女						
13－3	庇付甕形	Ⅵ	25.8	22.3	26.9	44.2	17.8	横帯１凹線、横帯２・横帯４縄目突帯。屋門唐破風形玉飾り付。底面穿孔19。庇は沈線で瓦葺表現。肩部、胴部文様帯に型抜の獅子、蓮華文、法師座像を張付。水性塗料で着彩。外面：底部回転ヘラケズリ。内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部回転板ナデ。
		銘書：一九四五年　新……						
13－4	上焼御殿形	?	26.5×34.0	18.6×26.0	－	42.0	18.8×27.0	屋門を中心として左右対称に、型抜の蓮華文、蓮華葉文、法師座像を張付、茎は粘土紐張付。屋門アーチ形玉飾り付。底面四隅に鍵形の足有り。底面の穿孔２。胎土に多量の籾殻を混和。

No	蓋形式	外径	内径	器高	体部高	器面調整・装飾
13－1	マンガン釉つまみ付笠形	27.7	26.3	11.5	8.7	扁平つまみ。つまみ台２段。外面マンガン釉。外面：つまみ回転ヨコナデ、つまみ台～体部回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。内面：天井部ミズビキ、体部下半部回転ヨコナデ。
		銘書：昭和一八年三月一八日死亡　新垣 亀　一九四五年四月死亡　妻				
13－2	庇付鍔形	25.8	20.4	11.8	8.9	宝珠形つまみ。外面：油性塗料で着彩。型抜の獅子頭を張付。庇は沈線で瓦を表現。内外面回転ヨコナデ。
		銘書：昭和三四年旧五月一日死亡　新垣節子　当年十歳　父三郎長女				
13－3	庇付鍔形	25.6	21.2	10.6	7.0	宝珠形つまみ、つまみ台１段。型抜の獅子頭、蓮華文を張付。庇は沈線で瓦を表現、庇の下に沈線で幾何学文様。水性塗料で着色。内外面、回転ヨコナデ。
		銘書：一九四五年　新□……　新……				
13－4	上焼御殿形	28.5×35.5	16.0×23.8			２層形瓦屋根、蓮華文張付、左右に格子張付。下り棟に３つ又のツノ形突起、棟両端に鯱が張り付いていたと思われる。庇部に重ね焼きによる熔着痕。

第５表　13号墓 蔵骨器 観察表

＊法量の単位はcm

3．14号墓

14号墓は墓庭から墓室にかけて厚い二次堆積土に覆われていた。発掘の結果、この二次堆積土は、隣接する13号墓の墓道造成土であることが判明し、13号墓と14号墓の先後関係が明らかとなった。

(1) 墓の構造

14号墓は13号墓の西側に隣接している。13号墓より低い位置に構築されており、墓庭面での比高は約1.4mある。墓口下端の標高は約5.6m。

墓室についてみると、平面観は横長の長方形に近い形状を呈し、壁面はほぼ垂直で、天井は水平に削られている。しかし、岩盤の剥落や自然のフィッシャーなどで凸凹も目立つ。

墓室床面には、蔵骨器を置くためと考えられる円形状の石台が、3基設けられている。サイズはそれぞれ直径30～40cm、高さ10cm弱で、拳大の自然礫で組まれている。中央の石台上から、第16図1の鉄釉瓶が倒れた状態で出土した。墓室の奥壁には、床面から約30cmの部位に、棚状の凹部が掘り込まれている。大きさは横35cm、縦40cm、奥行き20cmほどで、掘削面は雑で凸凹している。墓室床面は、石灰岩の石粉を敷き詰めているが、壁際では岩盤面もみられる。床面積は約1.8㎡。

墓の正面は大部分が崩壊していたが、墓口の下端部はわずかに残っていた。残存部でみると墓口のみ切石積みが行われ、他は岩盤面となっている。墓口のサイズは横約65cm、縦は上部崩壊のため不明。北西向きに開いている（N34°W）。蓋石は、数個の切石を積み上げる方法と考えられる。

墓庭は、拳大の礫を中心とした混礫土で造成している。庭囲いをみると、西側は人頭大の自然礫が雑に積まれている。裏込めには大小の礫混じり土砂を使用している。墓造営の際に掘削した土砂を、そのまま使用したのだろう。東側は、墓口から続く岩盤がほぼ直角に折れ、庭囲いとなっている。現況はこの岩盤上に隣接の13号墓墓道の造成土が被っている。墓口に対面する北側には、庭囲いはみられない。ただし、墓道面から墓庭面の高さまで土留め状の野面積みが行われており、これによって墓の内外が区切られた格好となっている。

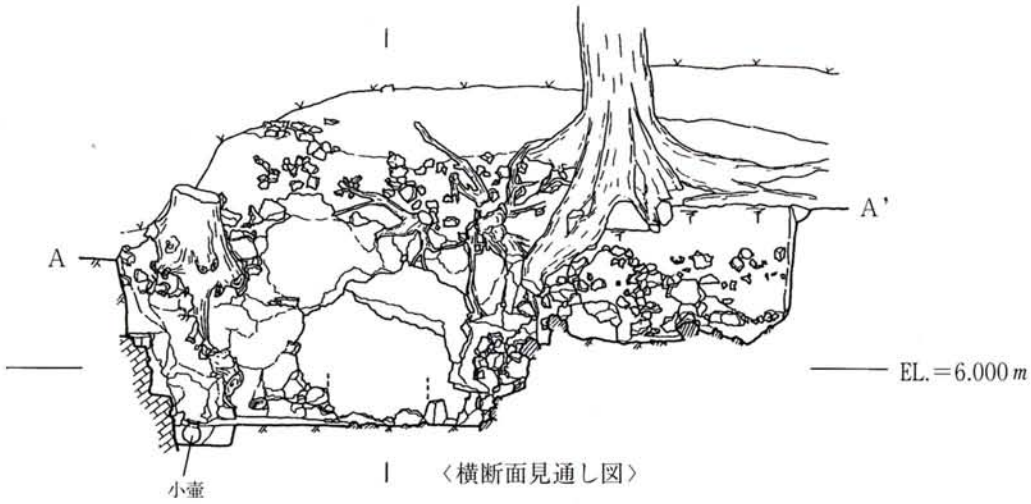
墓庭の東端部に第16図2の小壷が埋納されていた。立位の状態で、口縁部がわずかに地表に出るように埋められ、腰部を打ち欠いた染付碗の底部（第16図3）で蓋がされていた。

(2) 出土遺物

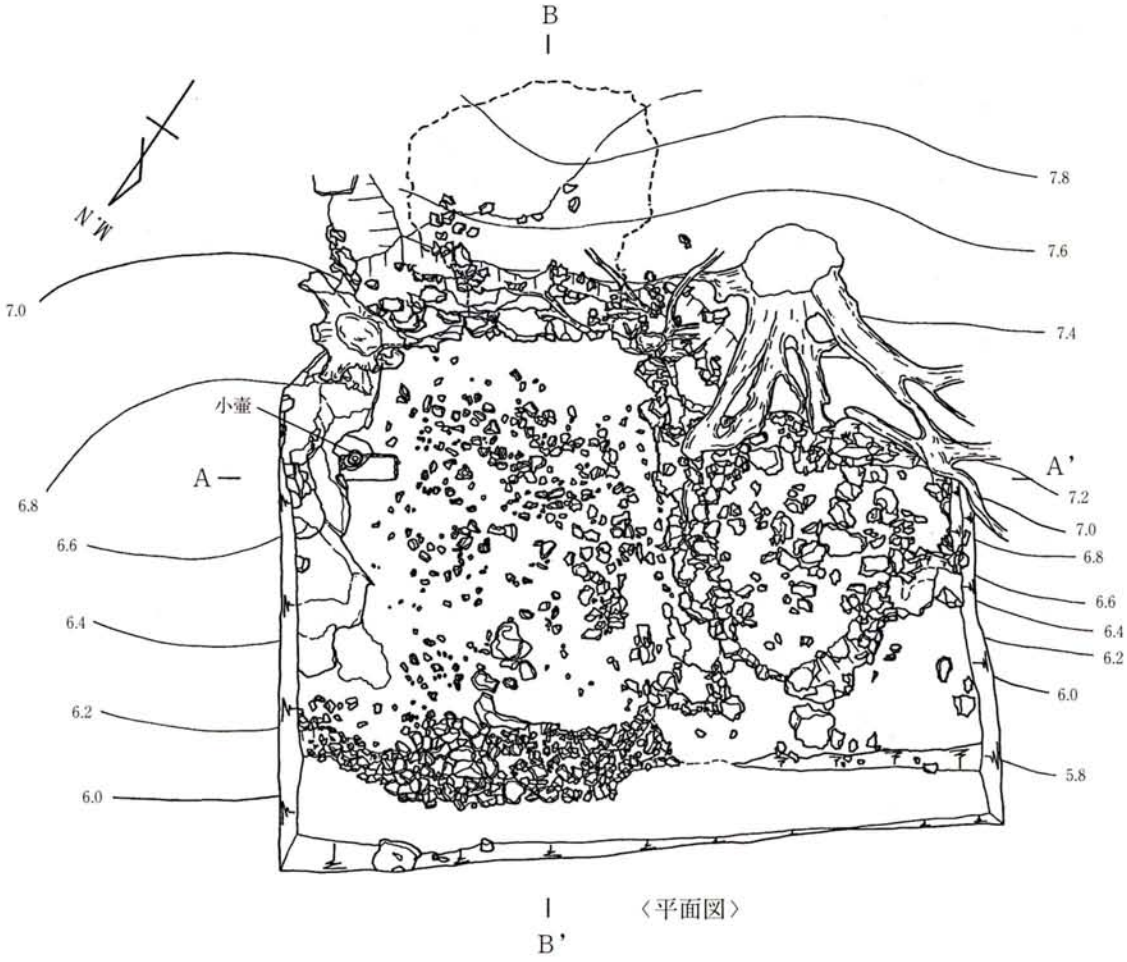
14号墓の出土遺物は第6表に示したが、戦中以降の遺物についての報告は見送り、蔵骨器と陶磁器、金属製品について記す。記述は①蔵骨器、②墓室出土遺物、③墓庭出土遺物の順に行う。

出土遺物 / 出土地点		沖縄産陶器																	磁器							かんざし	キセル
		蔵骨器		施釉陶器								無釉焼き締め				アカムヌー			本土産近代				染付		青磁		
		ボージャー厨子		碗	小碗	瓶	蓋	小皿	猪口	香炉	不明	摺鉢	壷	円盤状	不明	蓋	火炉	不明	小碗	猪口	皿	不明	碗	小碗	碗		
		蓋	身																								
墓室	二次堆積土		1			1																					
墓庭	二次堆積土	1		14	1	4	1	2	1	1	5	3	4	2	5	5	2	23	2	1	1	3	2	1	1		
墓庭	床面着			1																						1	1
墓庭	埋納												1										1				

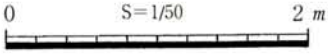
第6表　14号墓出土遺物一覧



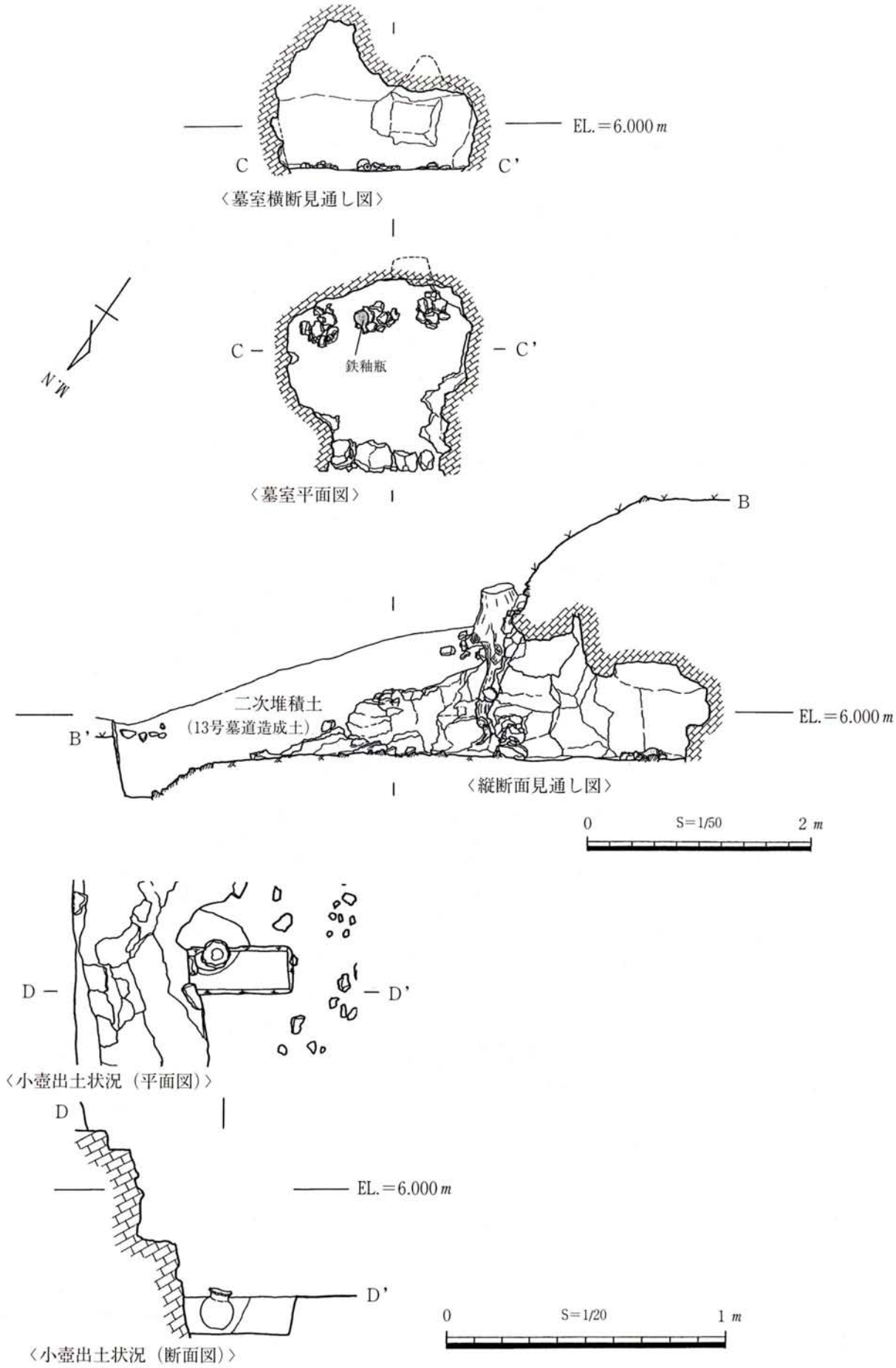
〈横断面見通し図〉



〈平面図〉



第13図　14号墓


EL.＝6.000 m
C
C'
〈墓室横断見通し図〉
N
W
C
C'
鉄釉瓶
〈墓室平面図〉
B
B'
二次堆積土
（13号墓道造成土）
EL.＝6.000 m
〈縦断面見通し図〉
0
S＝1/50
2 m
D
D'
〈小壺出土状況（平面図）〉
D
D'
EL.＝6.000 m
〈小壺出土状況（断面図）〉
0
S＝1/20
1 m

第14図　14号墓

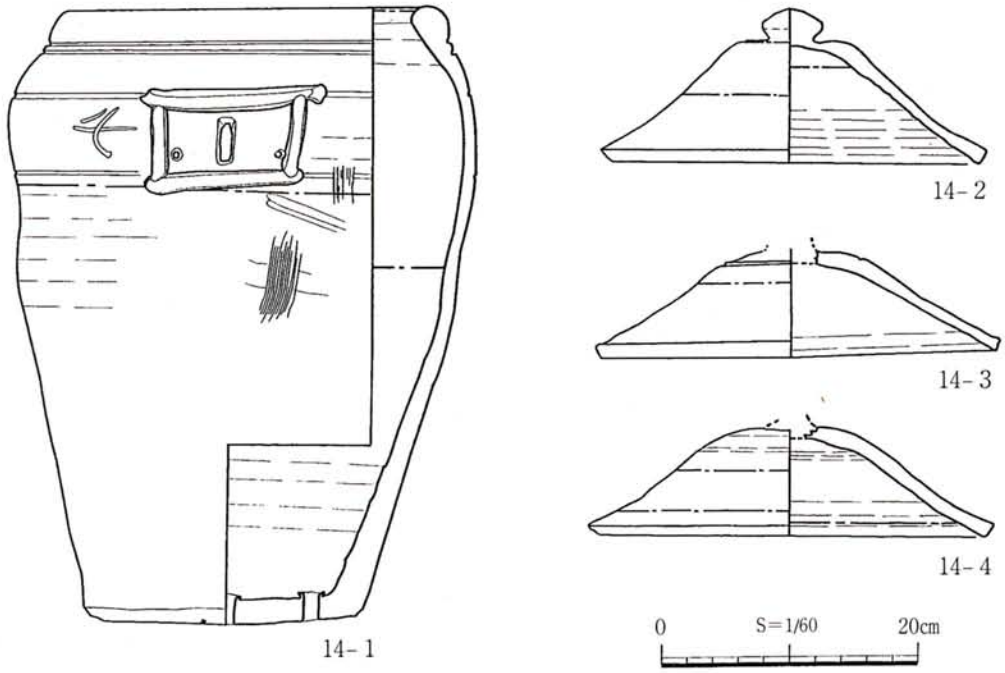
①蔵骨器（第15図、第７表、写真図版12上段）

墓庭から厨子甕身１基、蓋３基が出土した。身（第15図14－1）は、ボージャー厨子の新式である。人為的に打ち割られた状態で墓庭から出土したが、一部は墓室から出土している。蓋（第15図14－2･3･4）は、いずれもボージャー厨子に伴う無釉つまみ付笠形である。身と蓋の対応関係は不明。

No	身形式	型式	口外径	口内径	胴径	器高	底径	器面調整・装飾
14－1	ボージャー厨子	新	31.5	25.7	37.0	49.9	22.0	頸部横帯は凹線２条、肩部横帯は凹線２本。家形庇（屋門）。底面穿孔５。ヘラ記号有り。無釉。外面：口縁部回転ヨコナデ、胴部回転ヨコナデ後不定方向ナデ、底部～底面静止ヘラケズリ。内面：口縁部～胴部上半回転ヨコナデ、胴部下半ミズビキ後板ナデ、底面ナデ。

No	蓋形式	外径	内径	器高	体部高	器面調整・装飾
14－2	つまみ付笠形	30.6	29.0	12.0	9.5	宝珠形つまみ。無釉。外面：上面つまみ調整の回転ヨコナデ、体部上半回転ヘラケズリ、体部下半回転ヨコナデ。内面：天井部ミズビキ、体部回転ヨコナデ。
14－3	つまみ付笠形	32.3	31.4	－	8.3	つまみは基部から欠落。無釉。外面：頂部から体部上半回転ヘラケズリ、上面と体部境に凹線１条巡る、体部下半回転ヨコナデ。内面：全面回転ヨコナデ。
14－4	つまみ付笠形	32.3	30.7	－	8.4	つまみは基部から欠落。無釉。外面：頂部は回転ヘラケズリ後つまみ調整の回転ヨコナデ、体部上半回転ヘラケズリ、体部下半回転ヘラケズリ後回転ヨコナデ、口縁部回転ヨコナデ。内面：全面回転ヨコナデ。

第７表　14号墓 蔵骨器 観察表　　＊法量の単位はcm



第15図　14号墓 蔵骨器

②墓室出土遺物（第16図１、写真図版12下段左）

第16図１は墓室の円形石台上から出土した沖縄産鉄釉長頸瓶である。最大径は胴下半部にあり頸部へ向かって次第にすぼまり、口縁部はラッパ状に開く。口縁内面から外面腰下部までを施釉対象とし、釉薬は茶褐色に発色している。ただし、厚みによって発色に濃淡があり、肩部から口縁部にかけては濃くなっている。露胎部はクリーム色。胴上部から頸部にかけての変形は焼成によるものと思われる。

③墓庭出土遺物（第16図2・3、写真図版12下段右）

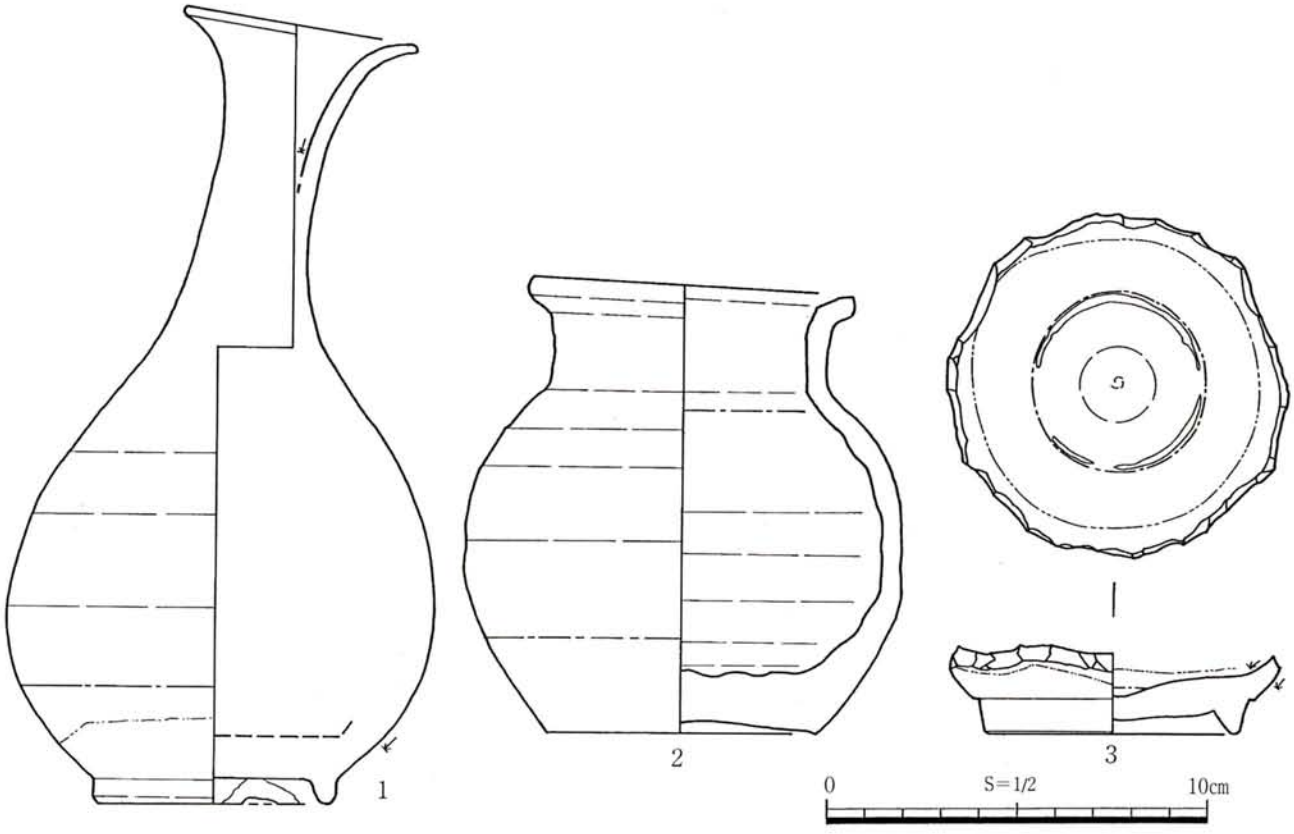
墓庭から出土した遺物は、墓庭に埋納されていたもの、床面直上からのもの、二次堆積土中からのものに分けて紹介する。

墓庭埋納遺物（第16図2･3、写真図版12下段右）

第16図２は、墓庭の東端部に埋納されていた沖縄産の無釉小壷で、同図３で蓋がされていた。器形は球体状の胴部に直立の頸部がつき、口縁上端部は外側へ折れている。水挽き後、回転横ナデを行っているが、胴部では徹底せず凸凹が残っている。腰部以下はヘラ削り。器色は黒褐色を基調としているが、焼成により、橙褐色を帯びる部分も見られる。また、器面がはじけて白色鉱物が露出している部分もある。出土時には、中に泥水が溜まり、微量の炭粒が検出された。

３は２の蓋に使用されていたもので、碗の底部を二次利用している。高台脇を丁寧に打割・調整して円形に作っている。本資料は中国産染付碗（註）で、見込みの中央部が円形状にくぼんでいる点が特徴的である。釉の発色は白に近い明緑灰色で、内外面とも高台脇までを施釉し、外底面及び、見込みは露胎している。胎土は白色で緻密。見込みの露胎部縁辺には焼成の際の熔着物が見られる。

註：家田純一・藤原友子（佐賀県立九州陶磁文化館）の御教示による。



1：沖縄産施釉陶器　2：沖縄産無釉焼き締め陶器　3：中国産染付碗

第16図　14号墓出土遺物（１：墓室内出土　２・３：墓庭埋納）

墓庭床面直上出土遺物（第17図1～3、写真図版13―1～3）

第17図１～３は墓庭の床面直上から出土した資料である。

１は沖縄産の鉄釉掛け碗の破片である。内外面とも高台脇までを施釉し、濃淡のある茶褐色に発色している。見込みには鉄釉で丸型と圏線を描き、蛇の目を表現している。蛇の目の中央部には焼成の

際に付いたと思われる熔着痕が見られる。胎土は黄褐色。回転横ナデによる調整後、腰部以下にはヘラ削りを行っている。

2は金属製のかんざしである。錆により青銅色を呈している。首部は本来、六角形だが、錆で丸みを帯びている。頭部は花部を差し込んだ後、叩いて溶接したようである。男性用。重量は約6.4g

3は金属製キセルのがん首である。錆による青銅色を呈している。羅宇接続部から首部にかけては一枚の薄い金属板を管状にして成形している。重量は約10g。

墓庭二次堆積土出土遺物（第17図4～15、写真図版13－4～15）

第17図4～15は、墓庭の二次堆積土より出土の全資料の中から比較的良好なものを選び出した。

4～11は沖縄産施釉陶器である。

4・5は灰釉碗の腰部から底部にかけての破片で、いずれも腰下部までを施釉対象としている。4は高台が高く、高台脇から口縁部へストレートに伸びる腰部を持つ。内面には回転横ナデによる調整痕が明瞭に残っているが、外面及び見込みは静止横ナデによりナデ消されている。見込み及び畳付には砂粒が付着している。胎土は灰色。5は高台は低く、見込みを浅く窪ませる。内外面とも回転横ナデにより調整されているが、外底や高台外面は削り出しの際の引き擦り痕がきつく残っている。胎土は灰白色。

6は鉄釉掛け碗の破片である。器形は4と同じで、口縁部から腰部までを施釉している。釉は茶褐色に発色しているが、所々に濃淡が見られる。回転横ナデによる調整後、胴下半部にはヘラ削りを、見込みには蛇の目ナデを行っている。

7は全面に白化粧土と透明釉を掛けた碗である。外面胴部及び口縁内面に呉須で草花文を描き、絵付け部分は濃紺色に発色している。総釉後、見込みと畳付には釉の掻き取りを行い、見込みは蛇の目状となっている。回転横ナデによる調整後、外面腰部にはヘラ削りを行っている。

8は全形のうかがえる灰釉の小皿である。口縁部は直口している。内外面ともに口縁部から腰部までを施釉。貫入が入っている。回転横ナデによる調整後、器外面は胴上部にヘラ削りを行っている。

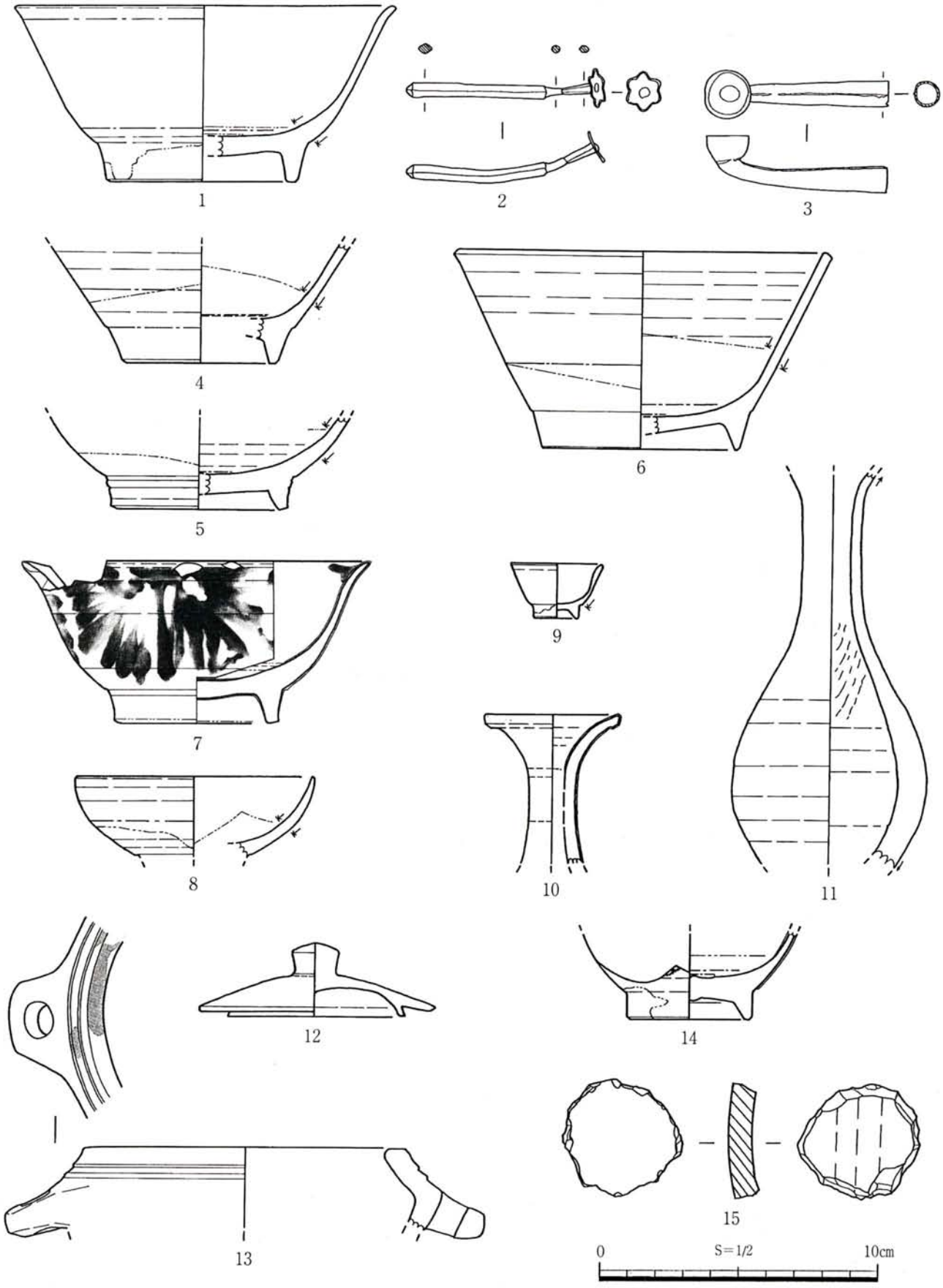
9の猪口は墓庭囲いの表土から出土した。高台脇から口縁部へストレートに伸び、口縁上端で微弱に外反している。内面は全体に、外面は高台脇までを施釉し、灰緑色に発色している。全体に粗い貫入が入っている。

10・11は瓶の破片資料である。10は頸部から口縁部の資料で、口縁部はラッパ状に開く。白化粧土を施した後、口唇部と頸部に呉須で圏線を描き、透明釉を掛けている。素地は黄白色。表面はやや凸凹しており、成形時についた指の痕だと思われる。11は鉄釉を施すもので、なで肩で、頸部は長く、上端からすると口縁部は外反すると思われる。釉の発色は緑色に近いが、全体に濃淡がある。素地は灰色で、内面には水挽き痕と絞り痕、外面には回転横ナデ痕が明瞭に残っている。

12・13はアカムヌーである。ろくろ成形により仕上げられた橙褐色のもので、精選された胎土が使われている。12は宝珠状のつまみを持つことや、器形・サイズから急須の蓋と考えられる。外面は煤が付いたためか少し黒ずんでいる。13は火炉の口縁部破片で、上端部は内側へ屈曲している。外面には有孔の把手がつき、その上面には二本の凹線が巡っている。上端部は一部煤けている。

14は中国産染付碗の底部資料である。内外面とも腰部までを施釉対象とし、釉薬は灰青色に発色している。絵付け部分は破片のため文様種は不明。呉須はやや鈍い青色に発色している。回転横ナデによる調整後、見込みには蛇の目ナデ、外面には回転ヘラ削りを行っている。

15は円盤状製品である。無釉焼き締め陶器の胴部を利用したものと思われる。重量は22.8g。



1·4～11:沖縄産施釉陶器　2:かんざし　3:キセル　12·13:アカムヌー　14:中国産染付　15:円盤状製品

第17図　14号墓 墓庭出土遺物（1～3：床面直上出土　4～15：二次堆積土中出土）

4．15号墓

15号墓は、古墓群の所在する丘陵の東斜面にあり、前述の12号墓から南東約60mに位置している。

本墓も12・14号墓と同様、墓庭および墓室の二次堆積土が厚く、調査前は墓口だけがわずかに見えていた。墓の前庭部には蔵骨器の破片が散乱していた。本市都市計画課によると、3年ほど前に墓移転が行われたようである。

(1) 墓の構造

墓室は、平面観が台形状を呈し、墓口側から奥へ狭まっている。墓室壁面は全体的にほぼ垂直だが、左側壁は天井部へやや開き気味に立ち上がっている。天井は崩落により凹凸がみられる。墓室床面は、石粉の混ざった粘質土で平坦に仕上げており、タナはない。墓室の床面積は約1.7㎡。

墓室のほぼ中央部で、円形のくぼみが出土した。くぼみの直径は約30㎝、深さ約5㎝で、蔵骨器を安定させるためのものと考えられた。また、壁際からは第20図15－3に示す壷が出土した。壷は10㎝前後の自然礫で支えられるように囲まれていたが、その場でつぶれ、破片の状態にあった。壷の破片とともにアカムヌーの蓋も出土している。蔵骨器への転用品と思われるが、人骨はみられなかった。

墓の正面は上部が崩壊し、墓口の下半部だけが原形をとどめていた。墓口の向かって右側では、四角形の切石を使用しているが、左側は岩盤削り出しとなっている。墓口のサイズは横約55㎝で、縦は崩壊のため計測不能だが、90㎝前後と推察される。墓口は北東向き（N63°E）。蓋石は粗加工の切石を数段積み上げるもので、調査時には二段残っていた。墓口下端部の標高は約5.6m。

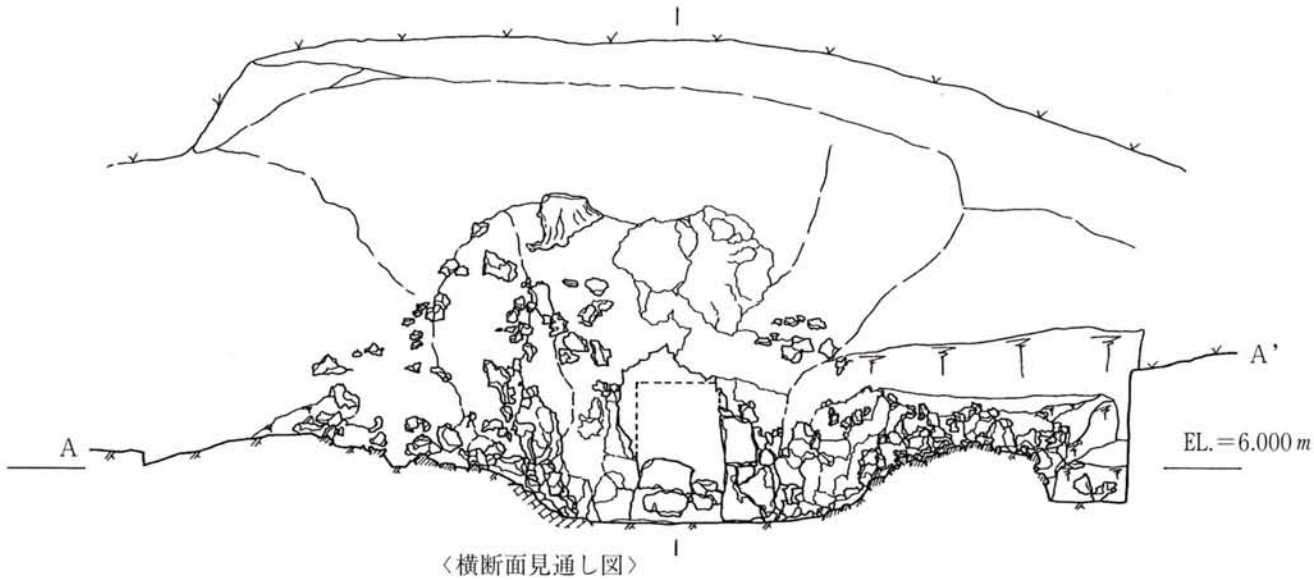
墓庭の庭囲いは、左右両側とも石灰岩礫や石粉を雑に積み上げ、盛り土状にしただけのものである。墓造営の際に掘り出された礫や土砂を使用したと考えられた。墓口に対面する北東側は、石垣等の積み上げはない。平坦な墓庭から北東側（外部）へ傾斜面となっている。墓庭と斜面下の比高は1.2mある。この斜面は、一見、自然礫が積まれたようにみえるが、2～3㎝ほどの小礫も多く、土の部分も目立つ。下から積み上げたというより、庭囲いと同様、墓造営時に出た石灰岩や土砂を墓庭造成土として使用し、その際に斜面を造り出したと考えられた。墓庭面については小礫まじりの土で仕上げている。墓庭入口の床面直上から、第21図1の徳利と同図2の猪口がセットで出土している。

(2) 出土遺物

遺物は墓室及び墓庭から出土した。出土状況は第8表の通りであるが、近代遺物については割愛した。以下に①蔵骨器、②墓庭出土遺物の順で記述する。

出土遺物 / 出土地点		沖縄産陶器																		磁器						かんざし	寛永通寶
		蔵骨器				施釉陶器								無釉焼き締め				アカムヌー		本土産近代				染付			
		マンガン掛け		転用品		碗	小碗	火炉	香炉	猪口	徳利	浅鉢	火入	摺鉢	壷	円盤状	不明	蓋	不明	小碗	皿	鉢	不明	碗	皿		
		蓋	身	蓋	身																						
墓室	表採	2																									
	二次堆積土														1												
	床面着			1	1																						
墓庭	表採		2																								
	二次堆積土	1				23	3	2	1	1		1	1	2	6	2	28	2	2	3	2	1	1	4	1	2	1
	床面着									1	1																

第8表　15号墓出土遺物一覧

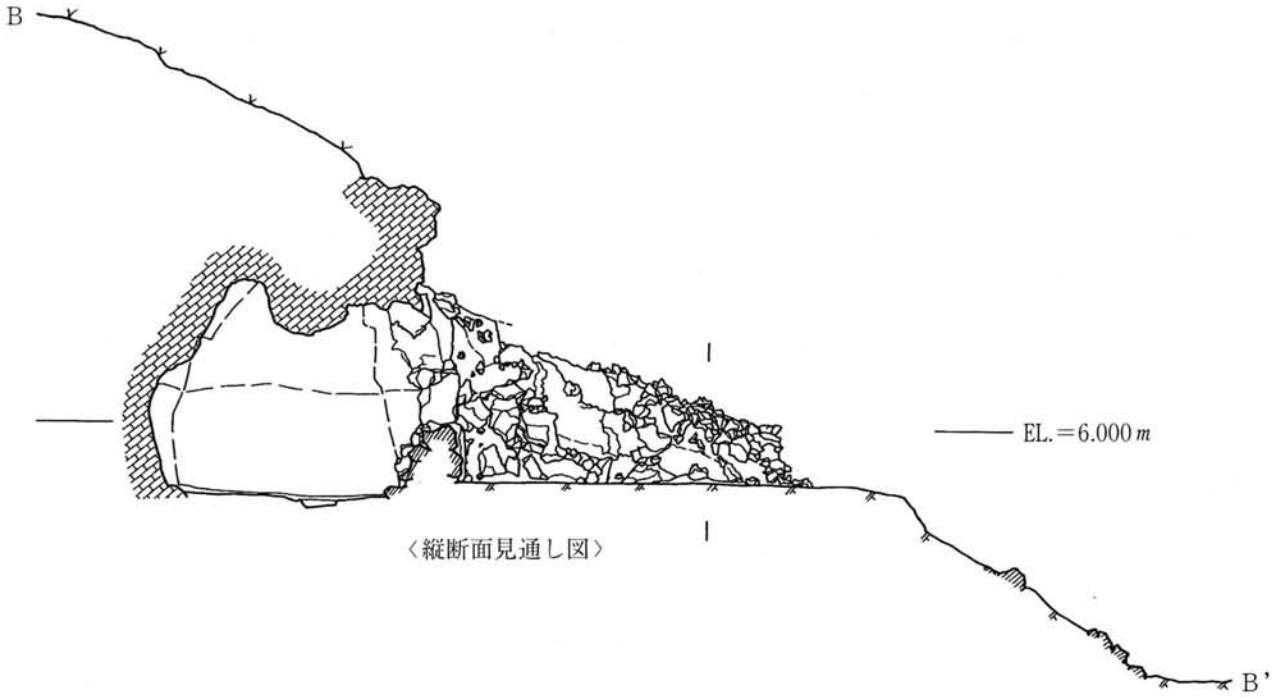


〈横断面見通し図〉

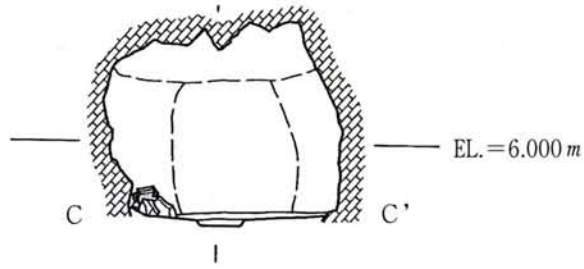
〈平面図〉

0　S＝1/50　2 m

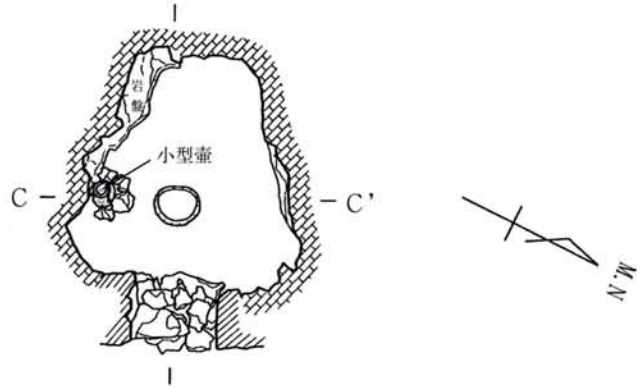
第18図　15号墓



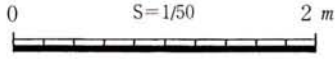
〈縦断面見通し図〉



〈墓室横断見通し図〉



〈墓室平面図〉



第19図　15号墓

①蔵骨器（第20図・第9表・写真図版16上段）

墓室から１基の沖縄製陶器の塩壷転用の蔵骨器と、厨子甕の蓋２個、墓庭から２基の厨子甕と蓋１個が出土した。

N0.15-1は、マンガン釉甕形のⅢＢ式（1810～1850年代）で、背面にヘラ記号がある。

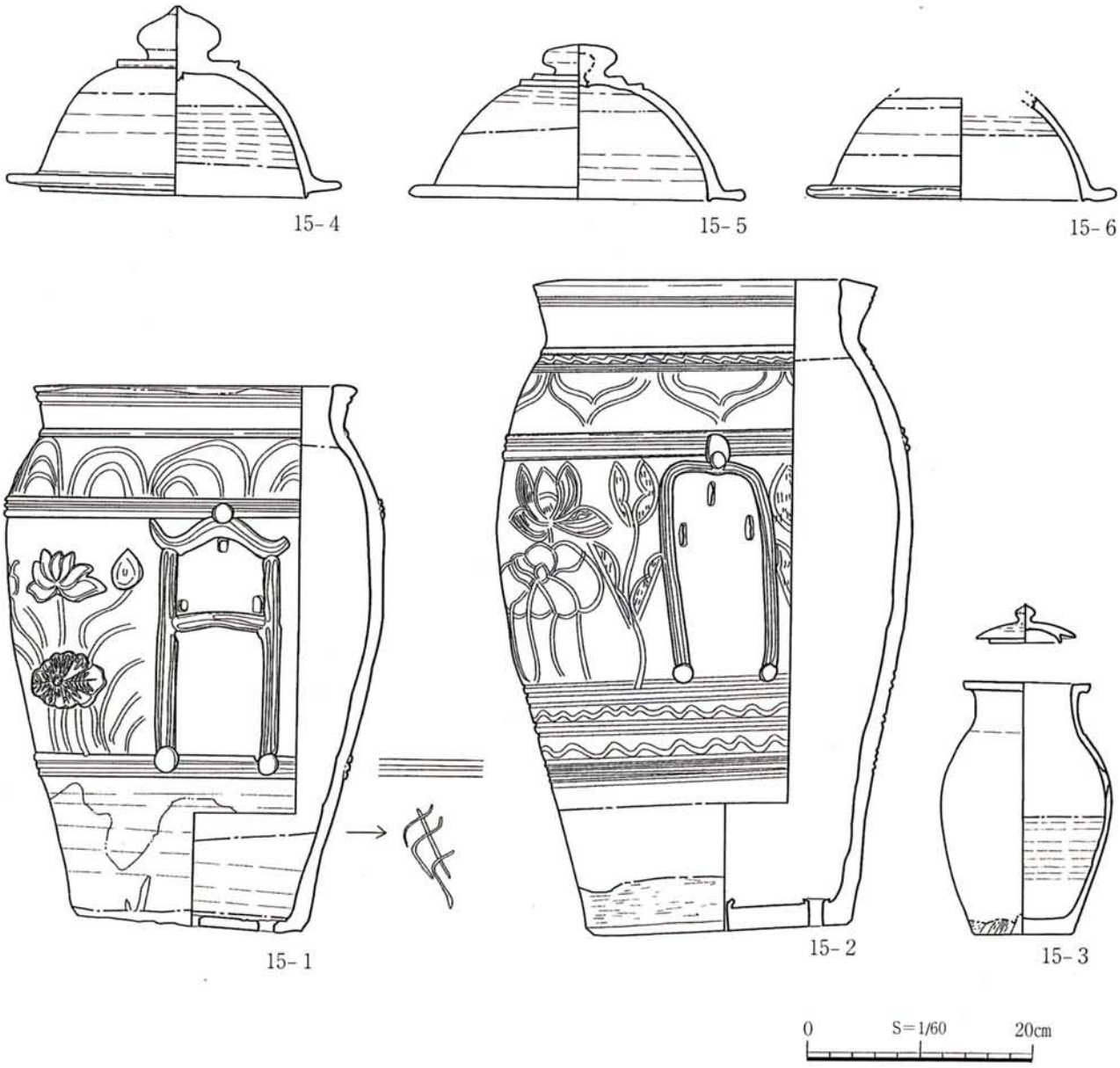
N0.15-2は、マンガン釉甕形でⅣＤ式（1850～1890年代）。

N0.15-3は、沖縄製陶器の小型壷を蔵骨器に転用している。その蓋は、素焼きのアカムヌーである。

N0.15-4の蓋はつまみ付きのマンガン釉鍔形で、咸豊三年（1853）洗骨の銘書がある。厨子甕の型式年代との対応からみて15-1の身の蓋と考えられる。

N0.15-5の蓋は、つまみ付きのマンガン釉鍔形で、光緒二年（1876）洗骨の銘書がある。厨子甕の身の型式年代から、N0.15-2の身の蓋と考えられる。

N0.15-6の蓋は、マンガン釉鍔形で破損のためつまみの有無は不明。



第20図　15号墓 蔵骨器

No	身形式	型式	口外径	口内径	胴径	器高	底径	器面調整・装飾
15－1	マンガン釉甕形	ⅢB	29.0	23.8	33.7	48.8	21.3	横帯1凹線2条、横帯2突帯、横帯3突帯、横帯4突帯。屋門唐破風形玉飾付。肩部文様帯連続同心円重弧文、胴部蓮華文を張付。底部穿孔6。底部背面にヘラ記号。外面：マンガン釉、口縁部～胴下半部回転ヨコナデ、底部～底面マンガン施釉後静止ヘラケズリ。
15－2	マンガン釉甕形	ⅣD	30.7	24.5	37.2	58.6	23.7	横帯1凹線2条、横帯2突帯、横帯3突帯凹線2、横帯4凹線3条。肩部文様帯に波状文、横線、ラマ風蓮弁。胴部蓮華文沈線。胴下部文様帯は波状沈線と凹線。屋門アーチ形玉飾付。底面穿孔7。外面：マンガン釉、口縁部～胴下半部回転ヨコナデ、底部～底面マンガン施釉後ヘラケズリ。
15－3	沖縄製無釉陶器 壺		11.4	7.8	15.3	22.5	9.0	口縁部断面方形。外面：回転ヨコナデ、底部静止ヘラケズリ、底面未調整。内面：ミズビキ後、上半部回転ヨコナデ。無釉。

No	蓋形式	外径	内径	器高	体部高	器面調整・装飾
15－3	アカムヌー急須の蓋	8.9	6.4	3.5	－	宝珠形つまみ。内、外面回転ヨコナデ。かえり有り。
15－4	マンガン釉鍔形	30.0	23.0	16.7	12.0	宝珠形つまみ。つまみ台1段、段縁に凹線1条巡る。外面：頂部はつまみ接合の回転ヨコナデ、体部上半回転ヘラケズリ、下半～鍔回転ヨコナデ。内面：天井部回転ヨコナデ、体部ミズビキ、口縁部回転ヨコナデ。つまみ～鍔上面マンガン釉。
		銘書：女子うし洗骨咸豊三年（1853年）癸丑七月八日洗骨　父　嶋袋□親雲上　女子				
15－5	マンガン釉鍔形	29.9	22.7	13.5	10.9	扁平つまみ。つまみ台2段ケズリ出し。外面：体部上半回転ヘラケズリ、体部下半～鍔回転ヨコナデ。内面：天井部ミズビキ、体部～鍔回転ヨコナデ。つまみ～鍔上面マンガン釉。
		銘書：光緒二年（1876年）丙子七月廿九日　内間小　婿男島袋筑（登之親雲上洗？）骨				
15－6	マンガン釉鍔形	28.0	22.0	－	－	上部破損。つまみ有無不明。外面：体部回転板ナデ、鍔回転ヨコナデ。内面体部上半ミズビキ、口縁部回転ヨコナデ。外面鍔上面までマンガン釉。

第9表 15号墓 蔵骨器 観察表　　＊法量の単位はcm

②墓庭出土遺物

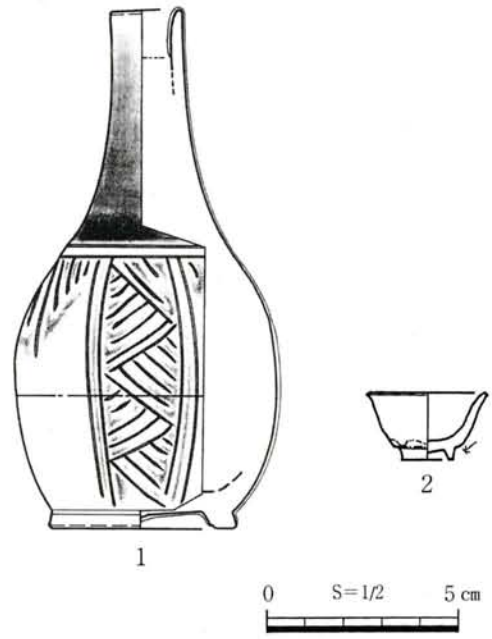
墓庭出土の遺物は、床面直上から出土したものと、二次堆積土中からのものがある。

墓庭床面直上出土遺物（第21図、写真図版16下段）

第21図1の徳利と2の猪口は、墓庭入口の床面からセットで出土した。いずれも沖縄産。

1は線彫りによる幾何学文様を施した徳利である。白化粧粧後、施文し、頸部と施文部を緑釉で彩色した後、全面に透明釉を掛けている。頸部と文様部分は暗緑色に、肩部の一部は青紫色に発色している。畳付には釉の掻き取りが行なわれ、掻き取り部には砂粒の付着が見られる。回転横ナデでの調整後、胴下半部にはヘラ削りを行っている。胎土は淡灰色。

2の猪口は焼成が非常に良好で磁器に近い仕上がりとなっている。釉は淡灰色に発色。ヘラを使って高台部分を削り出している。



1･2：沖縄産施釉陶器

第21図　15号墓 墓庭床面直上出土

墓庭二次堆積土出土遺物（第22図、写真図版17）

第22図１～14に二次堆積土中から出土した遺物のうち、比較的良好な資料を図示した。

１～７は沖縄産施釉陶器である。

１・２は灰釉碗の破片である。１は口縁部資料で、鉄釉による文様がわずかに認められる。施釉は内外面とも腰部までを対象としている。胎土は黄白色。回転横ナデによる調整後、胴下半部には回転ヘラ削りを行っている。２は底部資料で、高台は低く、腰部は丸味を帯びて、見込みは浅く窪ませている。胎土は灰白色。高台部分はヘラで削り出している。内面露胎部には回転横ナデ痕が明瞭に残る。

３は鉄釉碗の底部資料である。見込みに鉄釉で丸文と圏線を蛇の目状に描いた後、高台脇まで鉄釉を直掛けしている。見込みの蛇の目は光沢がなく、茶褐色。胎土は肌色。胴下半部には回転ヘラ削りが行われ、高台側面には削り出しの際に付いたと思われる砂粒の引きずり痕が見られる。

４・５は掛け分けの碗の底部資料で、どちらも外面には鉄釉を掛けている。４は見込みに鉄釉で丸文を描いた後、灰釉を施し、蛇の目釉剥ぎを行っている。外面は黒色、内面は緑灰色に発色し、両面に粗い貫入が入っている。蛇の目部分には熔着痕が見られる。胎土は橙白色。外面には回転ヘラ削りを行い、高台も削り出しによるものである。５の内面には厚い白化粧土と透明釉を施し、見込みは蛇の目釉剥ぎを行っている。外面は畳付部のみ釉の掻き取りを行っている。器表面は茶色を基調としているが、発色は鈍い。全体的にみられる斑のみが黒く光沢を帯びている。外底面は茶色で無光沢。

６は全面に白化粧土と透明釉を施した小碗である。外面胴部に呉須で草花文を描き、絵付け部分は濃紺色に発色している。畳付部は釉の掻き取りを行っている。胎土は淡黄褐色。

７は火入れの底部資料である。全体に白化粧土を施し、外面胴部には透明釉を掛けている。施釉部分には細かい貫入が入っている。胎土は橙褐色。胴内面には回転横ナデ痕と釉垂れが見える。

８は沖縄産の無釉壷である。胴下部に最大径があり、頸部で締まり、口縁部は外反する。肩部には渦巻文を施している。胎土はこげ茶色。器外面の約半分に自然釉が見られる。また、器面がはじけて白色鉱物が露出している部分もある。回転横ナデによる調整後、胴下半部にはヘラ削りを行っているが、底面はヘラ起こしのままである。口縁部に人為的な欠損が見られる。

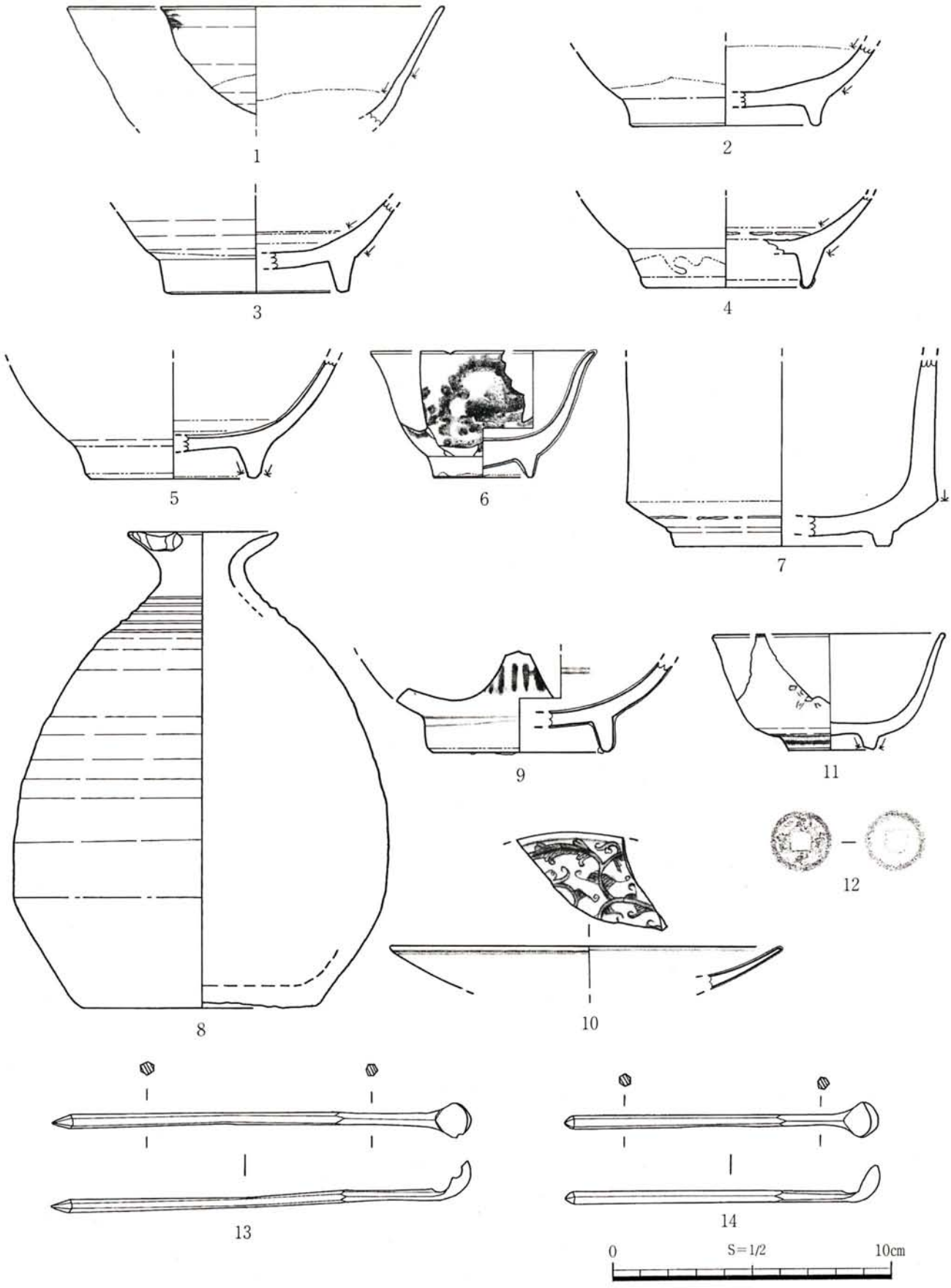
９・10は中国産染付である。９は碗の底部資料で、呉須で文様と圏線を描き、総釉後、畳付部のみ釉を掻き取っている。外底面には二本の圏線を引く。内底面にも何らかの文様が見られるが、破片のため詳細は不明。畳付には熔着痕がある。10は皿の破片で、推算口径は約14cm。型による成形後、呉須で文様を描き、透明釉を掛けている。口縁部付近の釉は薄い。絵付け部分は薄めの発色で、透明釉が厚いためか、ややぼやけている。清代の所産（註）。

11は本土産近代磁器の小碗である。呉須による印文と圏線を描いた後、釉掛けし、畳付部のみ釉の掻き取りを行っている。器表面は所々に呉須の付着による汚れが見られる。外底面にも二本の圏線を引く。

12は寛永通宝で、直径2.2cm、厚さ0.1cm、重さ約2.5gを測る。錆のために文字が見づらくなっている。裏面に文字は見られない。

13・14は女性用かんざしである。頭部は丸いスプーン状を呈し、竿は面取り加工され、断面は六角形となるが、首部との境で面をずらしている。竿の先端は角錘状だが、14は摩耗により丸味を帯びている。どちらも錆により青銅色を呈している。13は全長15.2cm、重量は約17.3ｇ。14は全長11.3cm、重量は約13.6ｇ。

註：家田純一・藤原友子（佐賀県立九州陶磁文化館）の御教示による。



1～7:沖縄産施釉陶器 8:沖縄産無釉焼き締め陶器 9･10中国産染付 11:本土産近代磁器 12:古銭 13･14かんざし

第22図　15号墓 墓庭出土遺物（二次堆積土中出土）

5．近代以降の墓（写真図版18）

本項では、コンクリート造りの破風墓や仮墓など、築造年が近代以降とみなされる５基（16号墓～20号墓）について簡単に記す。調査は写真撮影や略測等で済ませた。

前記した12号墓～15号墓の掘込墓が丘陵斜面に立地しているのに対し、これらは標高10～12mの丘陵平坦部に構築されている。調査時にはすべて空墓となっていた。

(1) 16号墓

コンクリート造りの小型仮墓。墓本体とその土台となる基礎部分から成る。墓本体は四角形の箱形で、屋根は切妻風。墓の正面は北西を向いている。大きさは横53cm、奥行き40cm、高さ47cm。

(2) 17号墓

コンクリート造りの小型仮墓。墓本体と基礎部分から成る。墓本体は四角形の箱形で、屋根は板状。墓の正面は南東を向いている。大きさは横60cm、奥行き54cm、高さ約70cm。

(3) 18号墓

自然の地形を１mほど掘りくぼめ、石垣やブロック積みで墓室及び墓庭を造りだした墓である。

墓室は長方形状で、左右側壁や奥壁は粗加工の切石積みが行われている。天井はトタンでアーチ形に仕上げている。タナはない。墓室の床面積は約2.7㎡。

正面はブロック積みで、墓口は北西を向いている。墓口のサイズは60cm×80cm。屋根はコンクリートによって、亀甲状に仕上げている。

墓庭囲いは墓室と同様、粗加工の切石積みが行われている。墓庭面積は約6.1㎡。

(4) 19号墓

一部進行している街路工事によって、墓本体はすでに撤去され、ブロックの庭垣のみが残っていた。

庭の規模からすると、墓本体はコンクリート造りの破風墓または平葺墓であったことが推察される。墓庭入口の位置からみて、北西向きに造られていたことが窺えた。

(5) 20号墓

コンクリート造りの平地式破風墓で、表札に「金城家の墓 六男」とある。

墓室内には、正面に三段、左右に一段のタナが造られている。シルヒラシは、サンゴ砂利を敷き詰めて仕上げているが、下層には白砂を用いていることが確認できた。墓室の面積は約3.8㎡。墓口は南東向きで、サイズは63cm×95cm。

墓庭はブロックで囲われ、床面は南隅に土面の植栽部分を残したほかはコンクリートで覆われている。墓庭面積は約19㎡。墓庭への出入口は南西側に設けている。

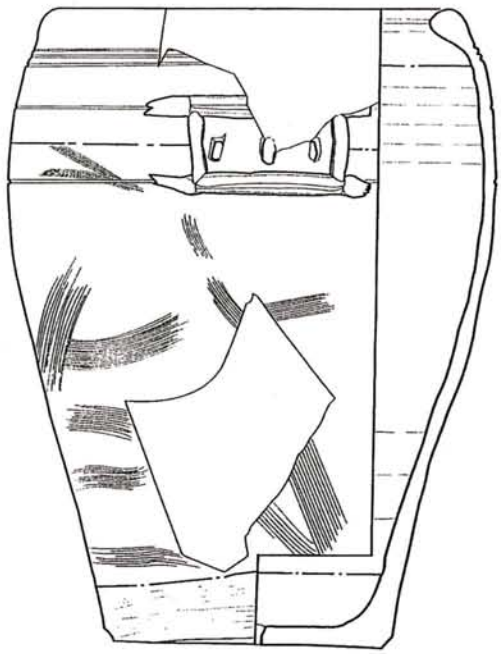
6．墓道・表採の蔵骨器（第23図、第10表、写真図版19）

墓道から３基の厨子甕が出土したほか、調査終了後の造成工事中にも厨子甕１基を採集した。第23図の墓道１と墓道２は、新式のボージャー厨子で、人為的に打ち割られた状態で出土した。墓道３は、破片であるが、線彫りの蓮華文が描かれており、古式のボージャー厨子と考えられる。墓道出土厨子甕はいずれも所属墓は不明。表採の小型の厨子甕の中から、銅製ジーファー１点が検出された。

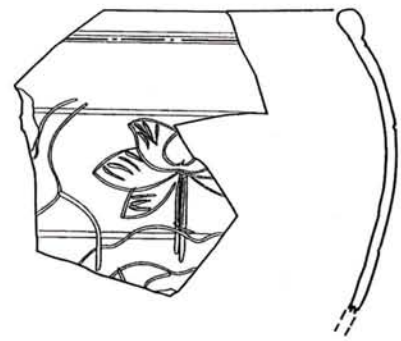
No	身形式	型式	口外径	口内径	胴径	器高	底径	器面調整・装飾
墓道1	ボージャー厨子	新	31.5	27.8	38.4	49.7	22.7	頸部横帯は凹線3条、肩部横帯は凹線2本。家形庇（屋門）。底面穿孔は破損のため不明。へら記号有。無釉。外面：口縁部回転ヨコナデ、胴部回転ヨコナデ後に不定方向ナデ、底部静止ヘラケズリか？底面静止ヘラケズリ。内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部ミズビキ後回転板ナデ、底面静止ナデ。
墓道2	ボージャー厨子	新	29.2	25.5	37.8	49.3	23.0	頸部横帯は凹線3条、肩部横帯は凹線2本。家形庇（屋門）。底面穿孔1。無釉。外面：口縁部回転ヨコナデ、胴部回転ヨコナデ後不定方向ナデ、底部～底面静止ヘラケズリ。内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部～底部板ナデ（ミズビキ痕残る）、底面静止ナデ。
墓道3	ボージャー厨子(破片)	古	—	—	—	—	—	頸部横帯は突帯状。肩部横帯は凹線2本。胴部に蓮華文沈線。無釉。外面：口縁部～胴部上半回転ヨコナデ。内面：口縁部回転ヨコナデ、胴部回転板ナデ。
表採	ボージャー厨子	新	19.0	17.3	26.3	27.8	15.4	頸部横帯は横線3条、肩部横帯は凹線2本。家形庇付。底面穿孔3。無釉。外面：口縁部回転ヨコナデ、胴部回転ヨコナデ後不定方向ナデ、底部静止ヘラケズリ。内面：ミズビキ後、上部回転ヨコナデ、胴部～底部板ナデ。
		人骨2 未成人/海産貝 38コ/かんざし 頭部はスプーン状。首と竿の境はない。断面は六角形で先端は丸く摩耗している。全体に青銅色の錆付着。全長13.8cm、重量6.42g。						

第10表　墓道・表採　蔵骨器　観察表

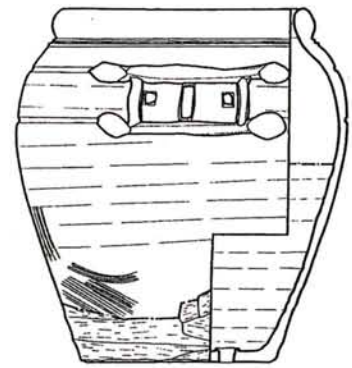
＊法量の単位はcm



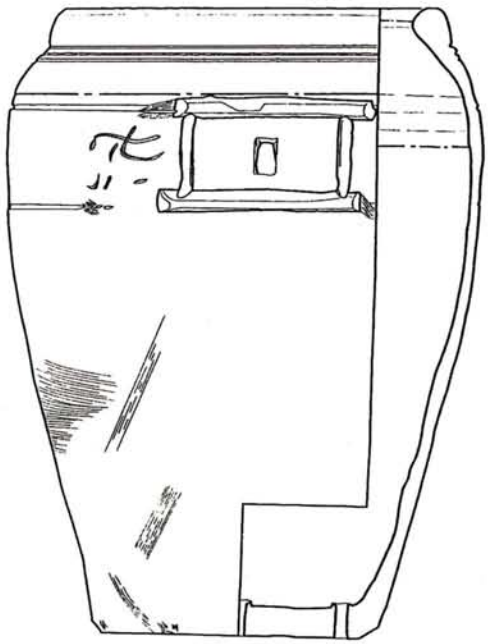
墓道1



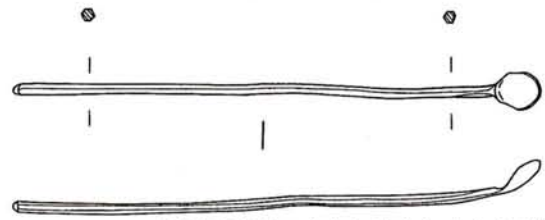
墓道3



表採



墓道2



表採厨子甕の中から出土したかんざし

0　S=1/2　5cm

0　S=1/60　20cm

第23図　墓道・表採 蔵骨器

第２節　内間西原古墓群出土の人骨について

佐宗亜衣子・土肥直美
（琉球大学医学部解剖学第一講座）

沖縄県浦添市内間西原古墓群12～15号墓の調査において、近世人骨が複数発掘された。出土人骨は表１に示すとおり、男性３、女性３、乳幼児３、の計９個体である。以下にそれぞれの人類学的所見を報告する。

表１　内間西原古墓群出土人骨一覧（個体）

	男性	女性	未成人	計
12号墓１号厨子甕		1		1
12号墓２号厨子甕	1	1		2
12号墓３号厨子甕		1		1
12号墓４号厨子甕			1	1
13号墓墓道	1			1
15号墓墓室	1			1
表採厨子甕			2	2
	3	3	3	9

1 人骨所見

12号墓

１号厨子甕出土人骨（女性・成年）

ほぼ全身の骨が認められた。残存部位（図1.1）は上顎骨を含む頭蓋骨片、右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、および、右鎖骨骨幹遠位1／2、右肩甲骨関節窩付近、左右寛骨大坐骨切痕付近、椎骨片、指骨等である。なお、四肢長管骨は右大腿骨近位端及び右腓骨遠位端以外は、いずれも骨幹部のみ残存し、遠位近位端とも損失している。

寛骨の形態から本人骨の性別は女性であると推定した。上下顎とも左右第三大臼歯が完全に萌出していること、残存する歯牙の咬耗度（Broca 1 度）から、年齢は成年と推定した。残存歯の歯式は以下の通りである。

$\dot{M}^3$	$\dot{M}^2$	$\dot{M}^1$	$\dot{P}^2$	$\dot{P}^1$	$\dot{C}$	$\dot{I}^2$	$\dot{I}^1$	／	／	$\dot{C}$	$\dot{P}^1$	$\dot{P}^2$	$\dot{M}^1$	$\dot{M}^2$	$\dot{M}^3$
$\dot{M}_3$	$\dot{M}_2$	$\dot{M}_1$	$\dot{P}_2$	$\dot{P}_1$	$\dot{C}$	$\dot{I}_2$	$\dot{I}_1$	$\dot{I}_1$	$\dot{I}_2$	$\dot{C}$	$\dot{P}_1$	$\underset{\triangle}{\dot{P}_2}$	$\dot{M}_1$	$\dot{M}_2$	$\dot{M}_3$

／ 破損　　・遊離歯　　△歯根のみ

2号厨子甕出土人骨（女性・成人、男性・成人）

少なくとも2個体分の人骨が認められた。遺存部位は頭蓋骨、左右上腕骨、左右不明の橈骨、右尺骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、右鎖骨、右肩甲骨、右寛骨大坐骨切痕付近、椎骨片、肋骨片、指骨片等である。四肢長管骨はいずれも骨幹部のみが残存し、遠位近位端を欠く。このうち重複が認められる部位は右寛骨、左右大腿骨、左脛骨、右腓骨、右中足骨である。

性別については寛骨の形態及び、大柄で頑丈な個体と小柄で華奢な個体とが見受けられることから、一方の個体は男性、他方は女性であると推定する。両個体とも成人であると推定されるが、保存された部位が少ないため、より詳細な年齢推定は行えなかった。歯牙は上顎左右犬歯、上顎左側切歯、下顎左中切歯、下顎左第1小臼歯が残存しているが、個体識別は困難である。

3号厨子甕出土人骨（女性・成年）

保存状態は良好ではないが、ほぼ全身の骨が認められる。残存している部位（図1.1）は頭蓋骨片、下顎骨片、右上腕骨、左上腕骨遠位、右橈尺骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右鎖骨、右寛骨片、椎骨片、肋骨片、指骨片等である。四肢長管骨はいずれも骨幹部のみが残存し、遠位近位端を欠く。性別については明確に判別しうる部位が欠損しており、保存状態がよくないため断定できないが、頭蓋骨、四肢骨等の筋付着部の発達が比較的弱く、骨全体の印象が華奢であることなどからは女性と思われる。年齢は、頭蓋骨の縫合および歯の咬耗状態（Broca 1 度）から成年と推定される。残存歯を以下に示す。

M^3			P^1					I^1	I^2	C			M^1	M^2	
M_3		P_2	P_1	C	I_2			I_1 ?		C		P_2		M_2 ?	

すべて遊離歯

4号厨子甕出土人骨（幼児）

残存部位（図1.1）は左右後頭顆を含む後頭骨、下顎骨右半部、左右上腕骨、左橈骨、右尺骨、左右大腿骨、左右脛骨、および、左右鎖骨、左肩甲骨関節窩付近、左右腸骨、椎骨片、肋骨片である。四肢長管骨はいずれも遠位近位端ともに損失している。乳歯及び四肢骨の状態より幼児（2～3才頃）と推定される。残存歯の歯式は以下の通りである。

・															・
(M^1)			・	・	・					・					(M^1)
			m^1	c	i^2					c					
	m_2	m_1	c			i_1		i_1				m_1	m_2		
(M_1)			・			・		(I_1)				・	・		(M_1)
・								・							・

・遊離歯　　（　）未萌出歯

13号墓

墓道出土人骨（男性・成人）

残存部位（図1.2）は、左右上腕骨遠位、左右橈骨近位端、左尺骨遠位端、右大腿骨恥骨筋線付近の骨片、左大腿骨骨幹内側の恥骨筋線付近から約2／3及び頭骨片、右鎖骨遠位骨幹、肋骨片、指骨片等である。性別については明確に判別しうる部位が欠損しているが、四肢骨等の骨端部が大柄であることなどから男性と思われる。年齢については四肢骨の骨端がすでに癒合しているので成人に達していることは確かであるが、詳細は不明である。

15号墓

墓室内出土人骨（男性・熟年）

きわめて保存状態がわるく、ほとんどの部位が消失している。残存している部位は頭骨片、下顎骨片、尺骨片、左右不明の大腿骨頭片、右脛骨下端部、右寛骨の耳状面から大坐骨切痕にかけて、仙骨片、および肋骨片、指骨等である。

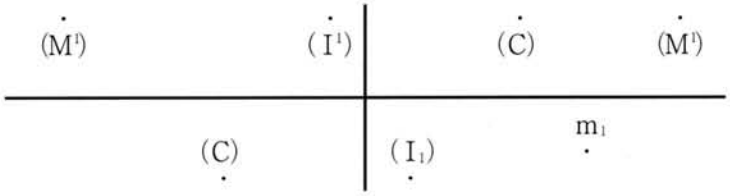
性別は寛骨の形状、骨の全体的な印象等から男性と推定される。年齢については、残存する下顎左犬歯の咬耗がかなり進んでいる（Broca 2度）ことや、関節面等の状態から熟年と思われる。

表採厨子甕出土人骨（乳児、幼児）

二体分の人骨が認められた。大きさの違いから個体識別が可能であったので、それぞれ乳児とみられる個体を①、幼児とみられる個体を②として以下に記述した。

① 残存部位（図1.2）は頭蓋骨片、右上腕骨遠位端、左上腕骨遠位1／2、左右不明の大腿骨骨幹部遠位1／3、左右不明の腓骨及び脛骨骨幹部、椎体片、肋骨片、指骨片等である。残存する未萌出乳歯（下顎左右第1乳臼歯）の歯冠形成がまだ不完全であることから乳児（出生時～6ヶ月頃）と推定される。

② 残存部位（図1.2）は岩様部を含む頭骨片、左右大腿骨骨幹部、左右不明の肩甲骨肩峰片、肋骨片、指骨片等である。形成段階の永久歯及び未萌出歯の状態から幼児（3～5歳頃）と推定される。残存歯の歯式は以下の通りである。



・遊離歯　　（　）未萌出歯

2　形質

全体的に保存状態が悪く、計測できたものは少なかった。主な計測値は表2と表3に示した。なお、計測法はMartin und Saller（1957）、馬場悠男（1991）に従った。

成人ではどの個体も四肢骨の筋付着部が明瞭であり、筋肉がよく発達していたことがうかがわれる。

3　人為的損傷

本人骨の中で２片に人為的と思われる直線的創痕が認められた（図版６）。骨片の残存囲と切痕の部位は図2に示した。以下にその詳細を述べる。

12号墓1号厨子甕出土人骨（左鎖骨）

左鎖骨肩峰端前縁で菱形靱帯線の遠位に切痕が認められる。鎖骨肩峰端は肩甲骨烏口突起と鎖骨下面に張る強い靱帯で結ばれている。また、切痕の見られる付近は三角筋が起始する。

12号墓2号厨子甕出土人骨（右大腿骨）

右大腿骨前面で転子間線を横切り、下外側方へ走る線創が認められる。傷は中央部ではとぎれており、外側は幅が広くなり下方へ向かって次第に消失する。転子間線は大腿骨の関節包前面と上面を補強する腸骨大腿靱帯の付着部であり、大腿骨前面からは大腿四頭筋の一部が起始する。

上述のとおり、損傷が見られたのはいずれも関節の近くであり、靱帯や筋肉が強く付着する部分である。またいずれの創痕も溝の近縁が鋭く角張り、横断面を観察すると鋭利な楔形を呈している。この様な創痕の形状からみると、刃物による傷であることが推測される。

近世人骨における人為的損傷の報告はあまり為されていないが、古人骨に於いては様々な事例が報告されている（鈴木1938、 Brothwell 1963、White 1991)。古人骨では本人骨に見られたような線創の成因の一つとして、洗骨や再埋葬を行う際、骨をきれいにするために残っている筋肉や靱帯を除去する作業によって、骨に線創が付くと考えられている。洗骨・再埋葬によって出来た線創の特徴として、横走または交叉する細かい線が一カ所に集中してみらること、その溝は骨の湾曲に沿って付くこと等がいわれている（Russell 1987)。

しかし、本人骨に見られる傷は溝の底が骨の湾曲に関係なく一直線である。また、いずれも周囲に他の線創が認められず、単独である。これらの特徴は上述の洗骨や再埋葬に伴う傷の特徴とは一致しない。従って、洗骨以外の他の要因によって付けられた傷である可能性を完全に否定できないが、沖縄には洗骨の習慣があることを考慮すると、本人骨に見られた線創も洗骨の際に付けられたものであると考えるのが最も妥当性があると思われる。

【参考文献】
馬場悠男1991『人骨計測法』 人類学講座　別巻1　雄山閣
Brothwell D. R. 1963 Digging up Bones. Cornell University Press.
Martin und Saller 1957 Lehebuch der Anthropologie. Bd. 1. G. Ficher, Stuttgart.
Russell M. D. 1987 Mortuary Practice at the Krapina Neanderthal Site. Ame. J. Phys. Anthropol. Vol.72.
鈴木尚 1938 「日本石器時代人骨の利器による損傷について」『人類学雑誌』53-7
White T. D. 1991 Human Osteology. Academic Press. INC.

表２　内間西原古墓群人骨の上肢骨計測値（mm）

			12号墓１号厨子甕出土人骨 女　性	12号墓２号厨子甕出土人骨 男　性
上腕骨				
7	骨体最小周	r		65
尺骨				
3	骨体最小周	r	33	
11	前後径（矢状径）	r	12	
12	横径	r	16	
11／12	骨体断面示数	r	74.0	
橈骨				
3	骨体最小周	r	34	
		l	35	
4	骨体横径	r	12	13
		l	12	
5	骨体矢状径	r	10	11
		l	10	
5／4	骨体断面示数	r	83.0	83.1
		l	83.0	

表３　内間西原古墓群人骨の下肢骨計測値（mm）

			12号墓１号厨子甕出土人骨 女　性	12号墓２号厨子甕出土人骨① 男　性	12号墓２号厨子甕出土人骨② 女　性	12号墓３号厨子甕出土人骨 男　性
大腿骨						
6	中央骨体矢状径	r		31		
		l		29		
7	中央骨体横径	r		30	28	
		l		28	28	
8	中央周	r		92		
		l		89		
9	骨体上横径	r	31	35	30	28
		l	31	34	31	27
10	骨体上矢状径	r		25	24	20
		l		25	23	21
6／7	中央断面示数	r		96.0		
		l		96.0		
10／9	上骨体断面示数	r	66.0	71.0	81.4	71.0
		l	65.0	75.0	75.4	79.0
脛骨						
8a	栄養孔位最大径	r	28	32		
		l	28	32		26
9a	栄養孔位横径	r	20	31		
		l	20	27		20
10a	栄養孔位周	r	75	91		
		l	75	93		73
10b	骨体最小周	r		86		
		l		85		
9a／8a	脛（扁平）示数	r	69.6	98.4		
		l	70.9	85.7		75.0

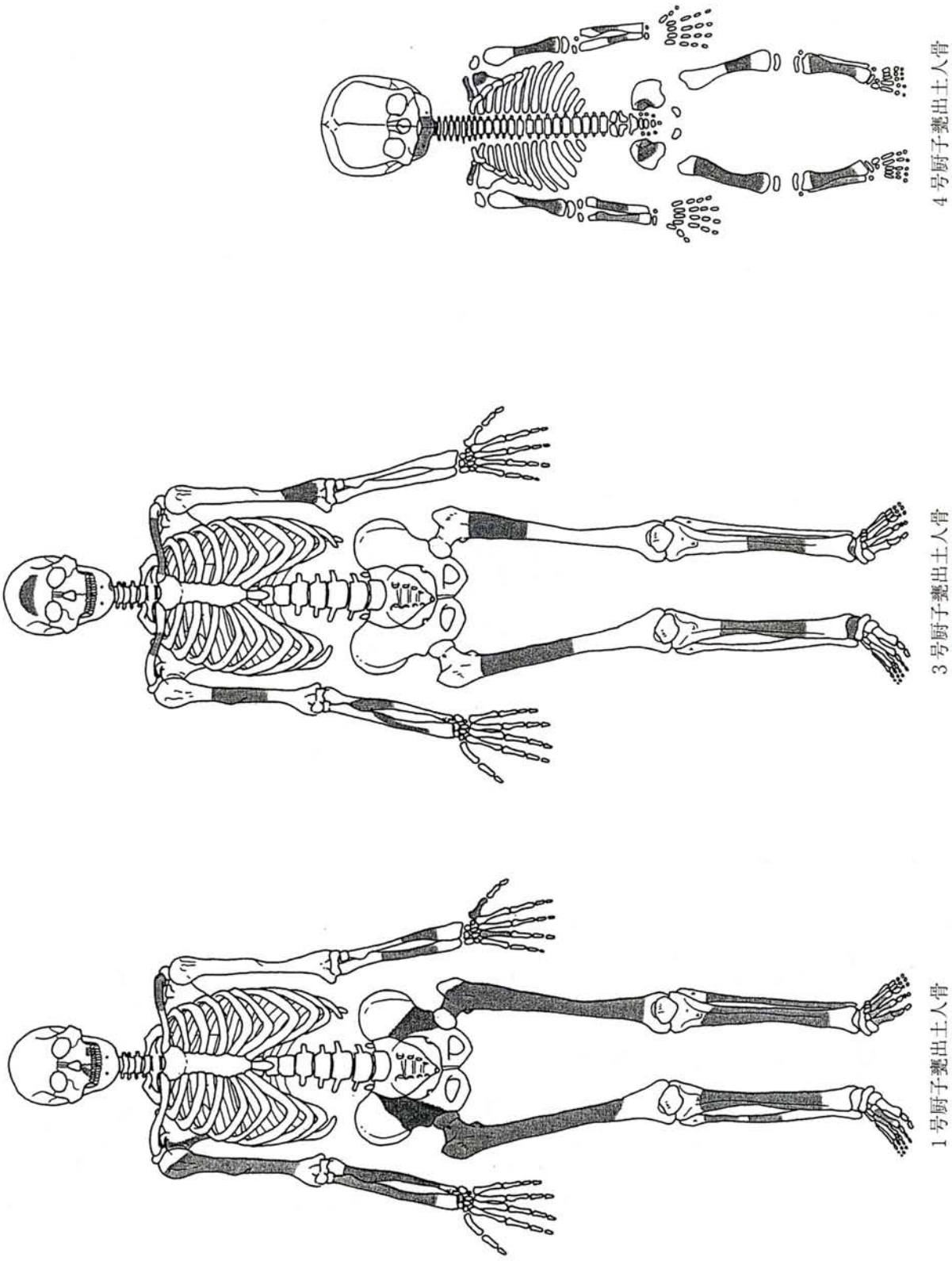


図1．1　主な遺存部位（12号墓1，3，4号厨子甕出土人骨）

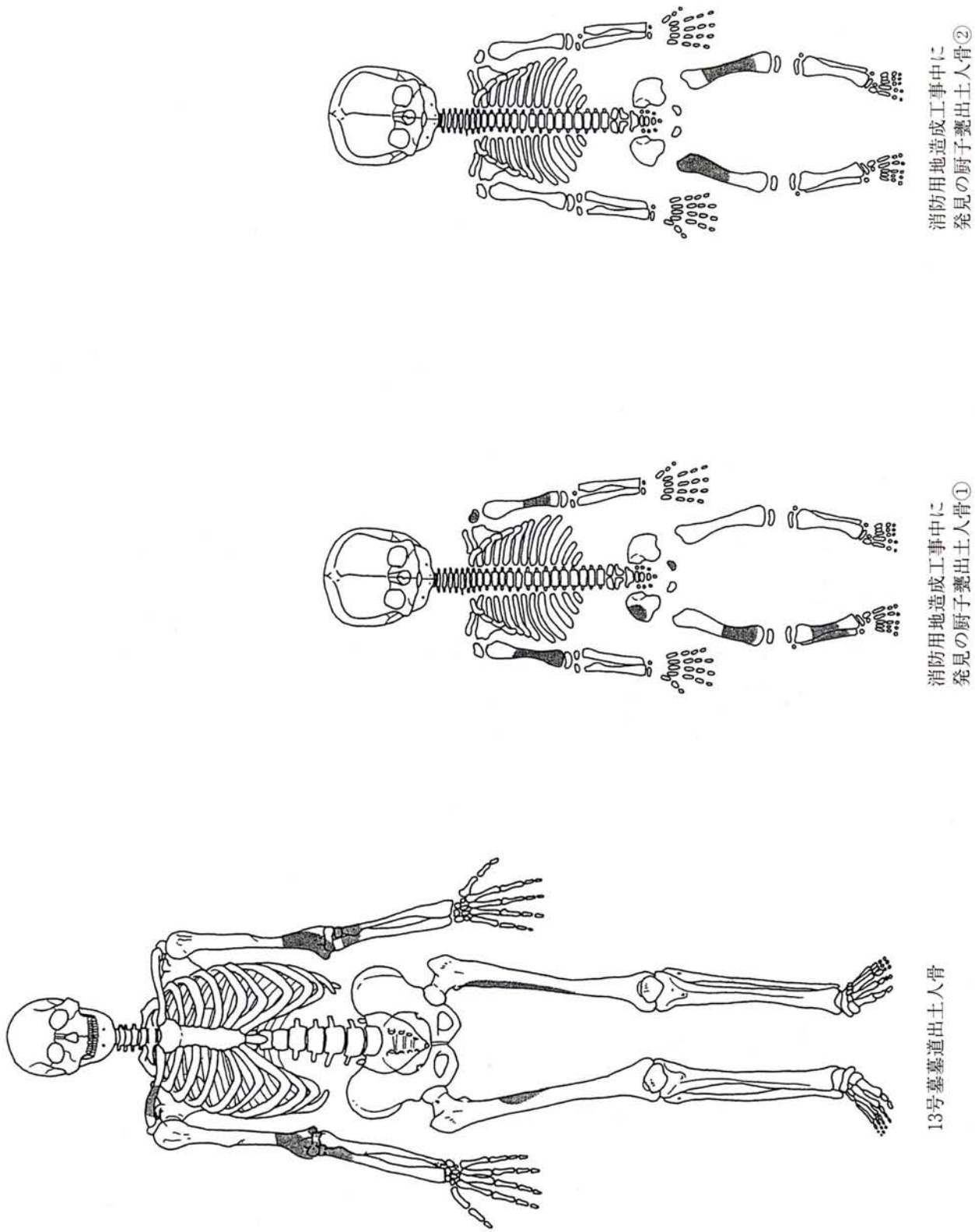


図１．２　主な遺存部位（13号墓墓道、消防用地造成工事中に発見の厨子甕出土人骨）

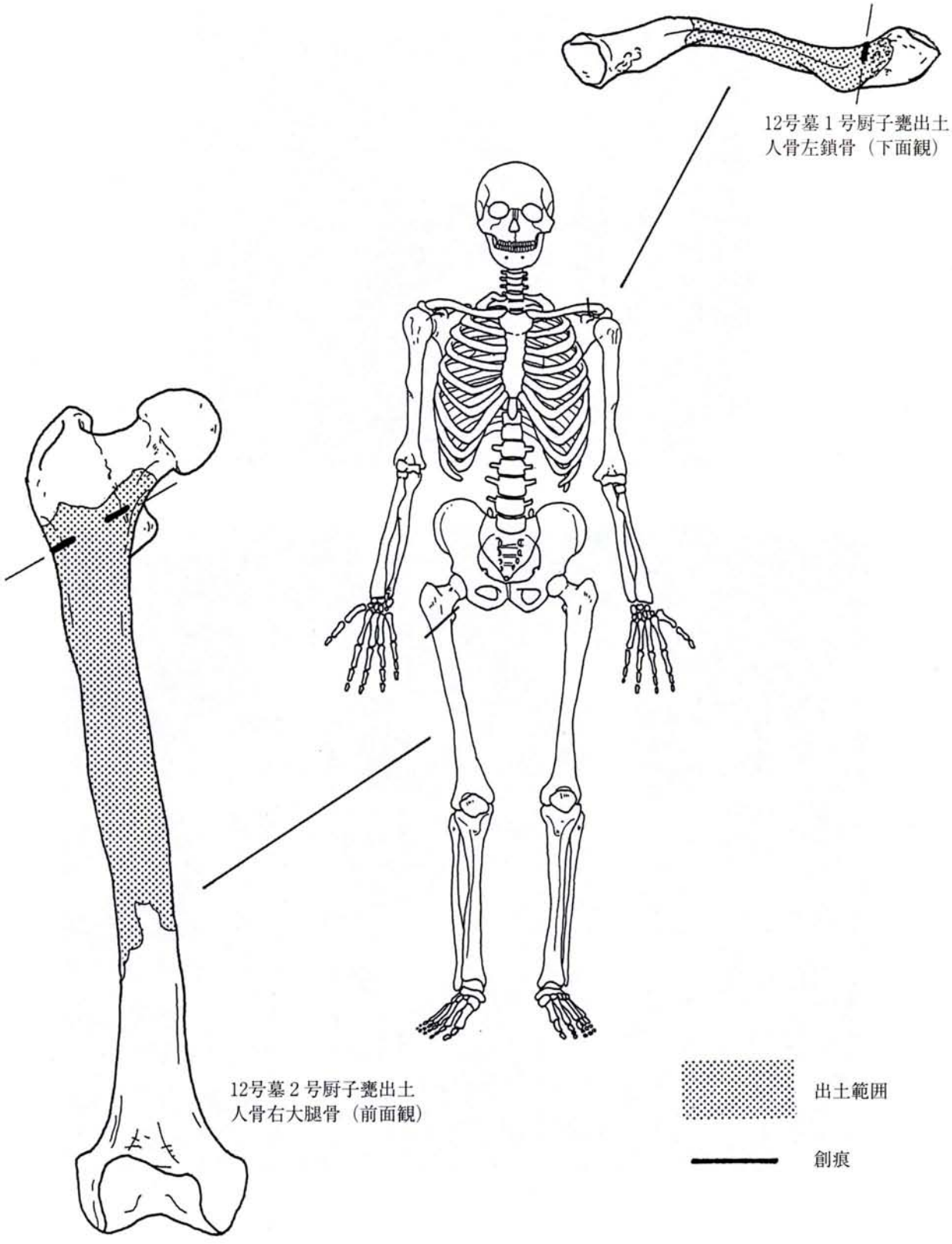
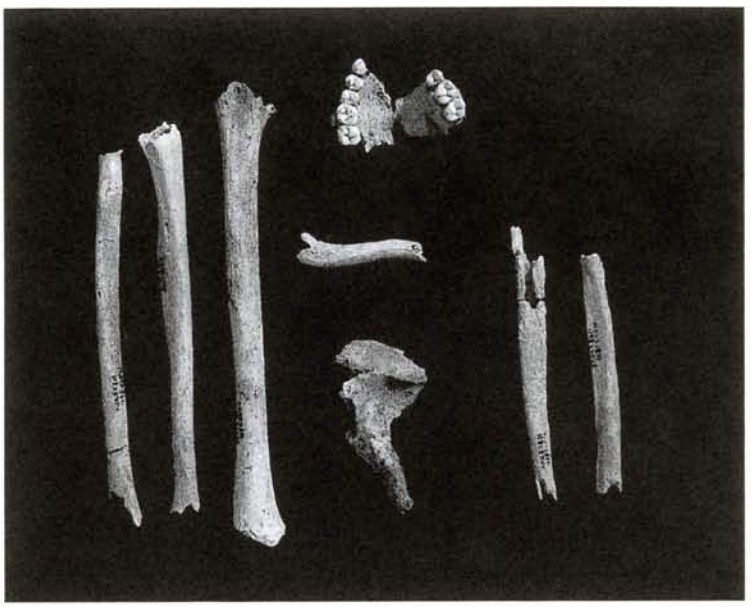
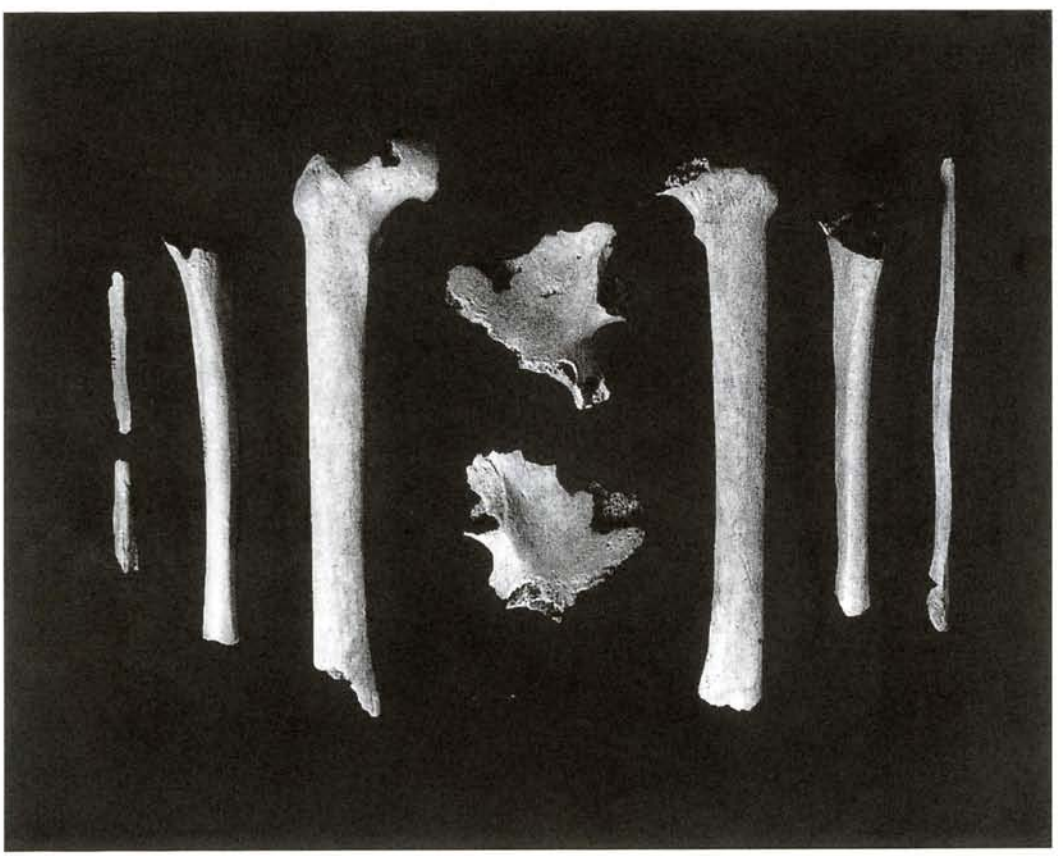


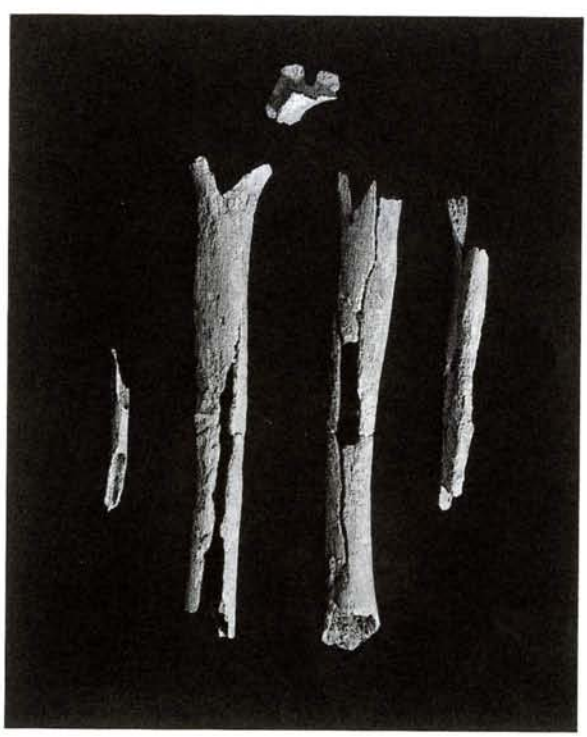
図２　損傷人骨の出土範囲及び損傷部位





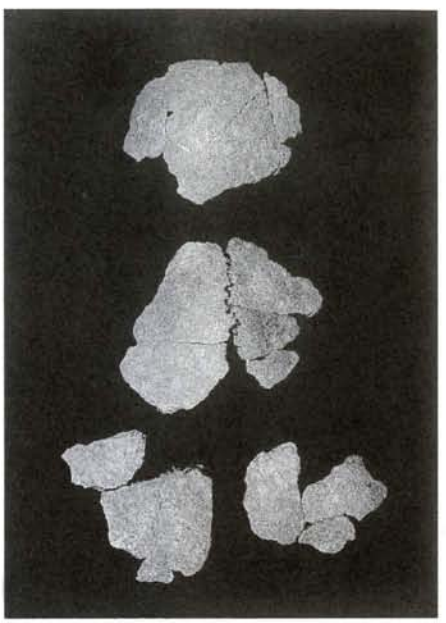
0　　5 cm

図版１　12号墓１号厨子甕人骨



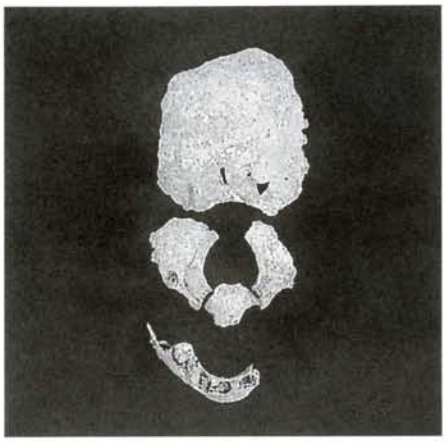
0　　5 cm

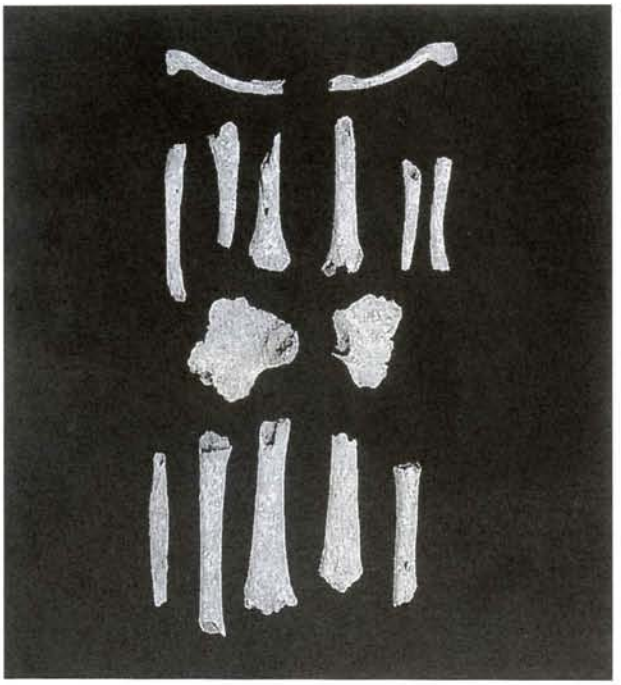
図版２　12号墓２号厨子甕人骨



0　　5 cm

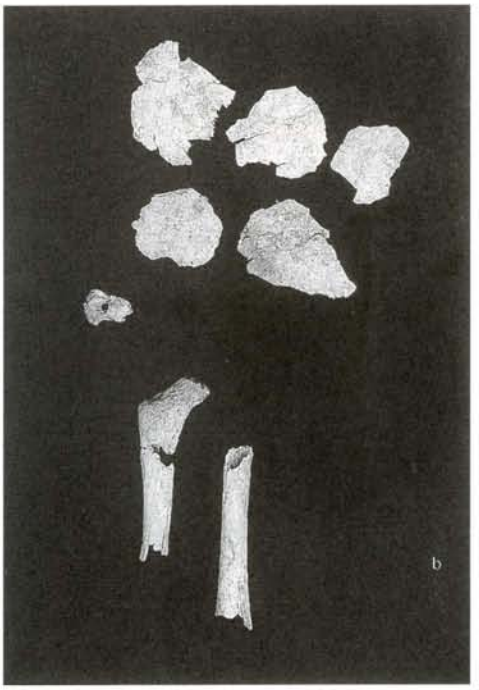
図版 4　12号墓 3 号厨子甕人骨





図版５　12号墓４号厨子甕人骨

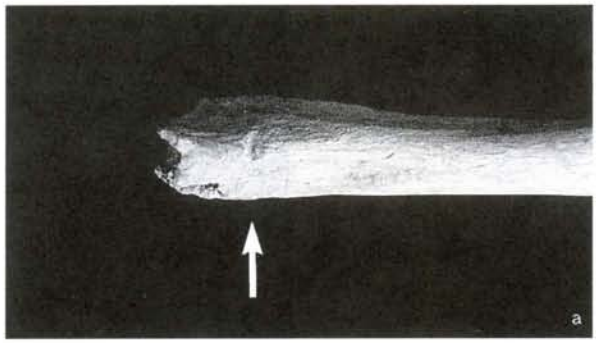
①

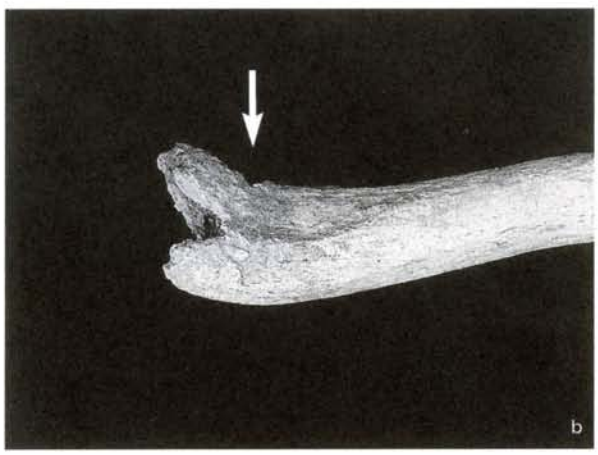


②

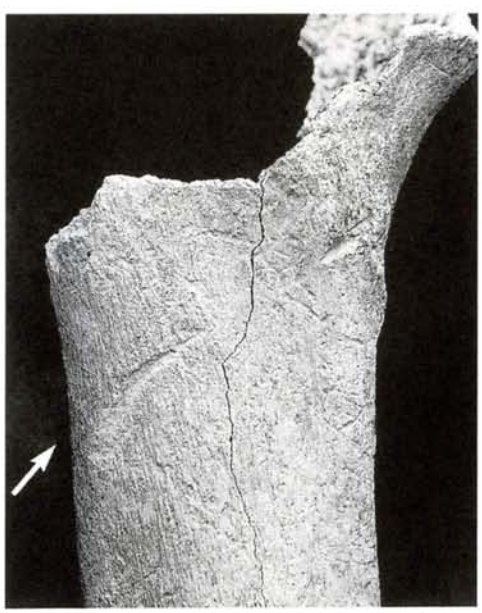
0　5 cm

図版６　表採厨子甕出土人骨（①，②）





12号墓１号厨子甕内人骨　左鎖骨（ａ前面観，ｂ下面観）



12号墓２号厨子甕内人骨　右大腿骨

0　2 cm

図版７　創痕の認められる人骨

第V章　まとめ

内間西原古墓群は、サチバルマーチューと呼ばれる独立した小丘と、この小丘から東側へ約80mいったところの石灰岩崖下に分布しており、昭和62・63年の踏査で総数39基の墓が確認されている（註1）。

同古墓群の本格的調査は、平成4・5年度に実施した都市計画道路建設（宮仲線）に伴う発掘調査が最初で、この時にはサチバルマーチューに所在していた15基が緊急調査された（註2）。今回はこれに次ぐ二度目の発掘調査である。

遺構

今回、発掘調査の対象となった古墓は4基で、いずれも琉球石灰岩の岩盤に横穴を設けて墓室とする掘込墓である。

墓室の床面積は、いずれも2㎡弱の小規模のもので、平面観はいびつであった。4基ともタナは造らず、床面は全体的に平坦に仕上げられていた。ただし、14号墓では墓室奥に、蔵骨器の台と考えられる高さ10cm弱の円形石組が3基造られていた。また、本墓では墓室の奥壁に棚状のくぼみが掘り込まれていたが、掘削面が粗雑であることや、蔵骨器等を置くには奥行きが小さいことなどから、掘削途中で放棄されたものと考えられた。掘削の目的は、タナあるいはイケ（集骨場所）などの施設が想像されたが、戦時中に手掛けられた可能性も否定できず、判然としなかった。

15号墓では墓室床面に円形の浅い凹みが出土しており、蔵骨器を安定させるための掘り込みと考えられた。類事例は平成4年度に調査した6－2号墓でも出土している（註2）。

墓庭の遺構についてみると、12号墓の墓口近くで仮墓1基が出土した。人骨は検出されなかったが、仮墓内部から蔵骨器に転用したとみられる陶器片（第8図12仮－1･2）が出土しており、そのサイズから幼児以下の人骨が納められていたと推察された。第Ⅳ章第2節にあるように、12号墓の墓室出土の厨子甕から2～3才と推察される幼児骨が検出されていることから、仮墓の人骨は、後に墓室に移された可能性が考えられる。

14号墓の墓庭では無釉の小型壷が埋納されていた。小壷は口縁部が地上にはみ出した状態で埋められ、蓋（染付底部）を以て開閉できるように配慮されていることから、一時的な使用ではなく、繰り返し使えるように埋められたものとみられた。小壷の内部からは、微量の炭粒が検出されており、その用途を示唆するものと思われたが、具体的なことは明らかにしえなかった。同遺構については今後、民俗学の分野からの調査も必要と思われる。なお、本墓と同じように、小壷を墓庭に埋めている事例が、浦添市字前田に所在する「玉城朝薫の墓」で知られている（註3）。

遺物

遺物は、墓室や墓庭の床面から出土したものもあったが、多くは表採や二次堆積土中からであった。種類別にみると、陶磁器類が圧倒的に多く、他にかんざしや古銭、キセルなどがみられた。陶磁器は、蔵骨器のほかに瓶や碗、皿などがあった。ところで、小字西原一帯の墓は去る沖縄戦中、地域住民の避難壕として使用されており（註4）、前回の発掘調査では、その痕跡や日本兵が立てこもっていたとみられる墓などもあった（註2）。こうした状況から、今回調査した墓も戦時中に開けられた可能性もあり得ることから、出土遺物については墓に伴うものか、戦中に持ち込まれたものなのか判別が

困難な資料も多かった。

蔵骨器はボージャー厨子、マンガン掛け厨子甕、上焼御殿型厨子甕のほか、日用の壷を転用したものや現代の甕型厨子甕などがみられた。

墓別にみていくと、12号墓と14号墓はボージャー厨子のみで、いずれも銘書は記されてなかったが、器形や文様等の特徴からすると、いずれも1700年代のものと考えられた（註5）。15号墓はマンガン掛け厨子甕のみで、咸豊三年(1853年)と光緒二年(1876年)の銘書が記された蓋が出土している。13号墓はマンガン掛け厨子甕、現代甕型厨子甕、上焼御殿型厨子甕の3種類があり、前二者には昭和18年(1943年)・1945年・昭和34年(1959年)の銘書が記されていた。

こうした厨子甕の年代を墓そのものに直結するのは危険と思われるが、それぞれの墓に過去に移転歴がないと仮定した場合、上記の厨子甕の形態的特徴や銘書等は墓のおおよその年代を窺い知るうえで参考になると考えられる。

人骨は男性3、女性3、乳幼児3の計9個体が出土した。12号墓1号及び2号厨子甕からは、創痕の認められる人骨もあり、このことについて、人骨を分析していただいた土肥、佐宗両氏は洗骨の際に付けられた可能性を指摘している（詳細は第Ⅳ章第2節参照)。近世琉球人の形質的特徴のみならず、当時の洗骨風習を知るうえでも貴重な資料と成り得ると思われる。今後の類似資料の出土に注目したい。

発掘による墓の先後関係

隣接している12号～14号墓の3基うち、13号墓と14号墓の2基については、発掘によって墓造営の先後関係を知ることができた。第Ⅳ章第1節でも記したように、14号墓を厚く覆っていた二次堆積土が、隣接する13号墓の墓道造成土であることが明かになったことによる。この造成土は14号墓の墓室内部にも及んでおり、13号墓造営の際には、14号墓はすでに空墓になっていたことが窺えた。13号墓は、コンクリートブロックが使用され、とくに改・修築等が行われたようすはなかったため、造成の具体的な年代は示し得ないが、採取した厨子甕の種類や銘書の年代なども考え合わせると、昭和以降の造営と推察された。

（註）

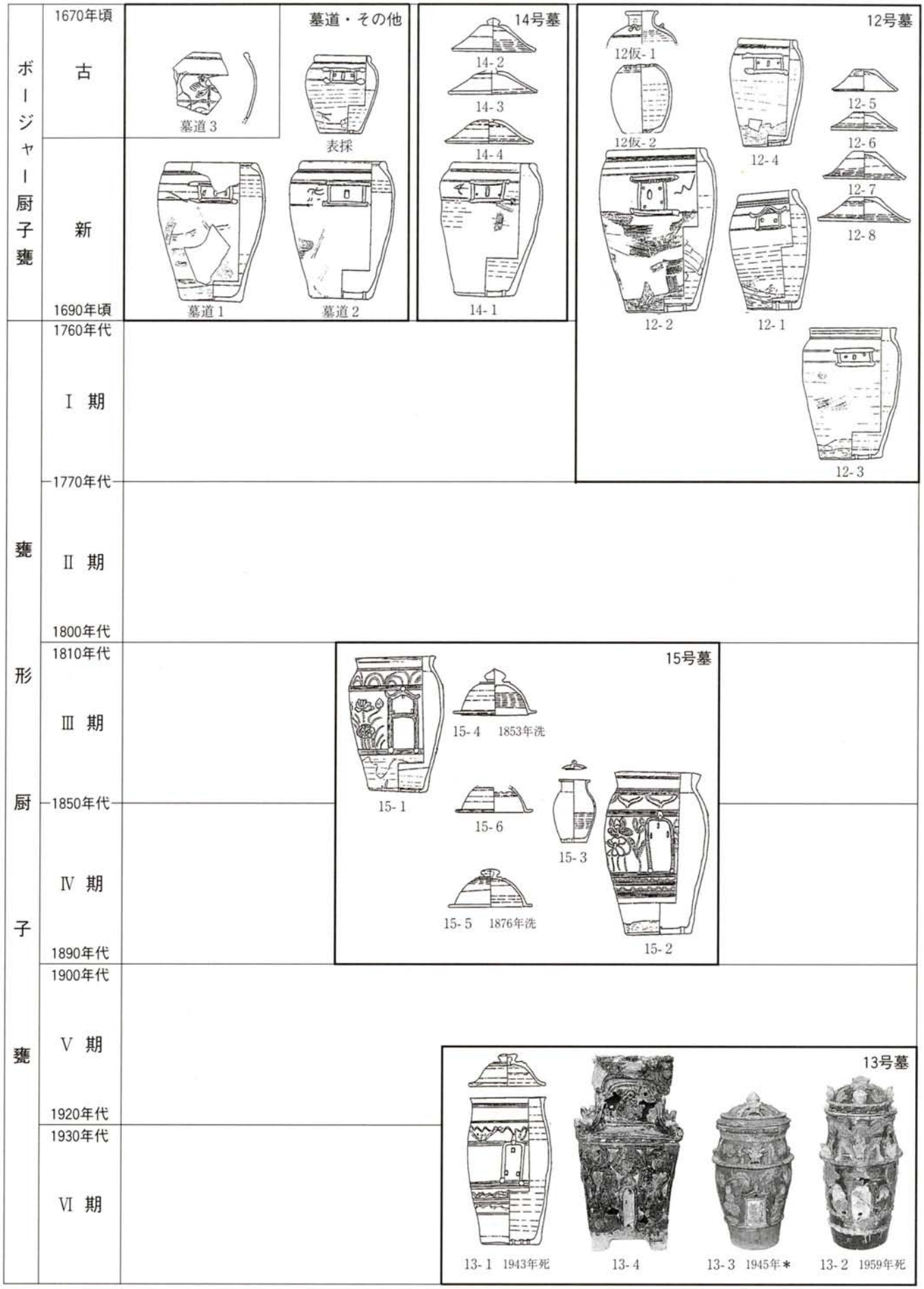
1：『浦添市文化財悉皆調査報告書』 平成2年3月 （浦添市教育委員会）

2：『内間西原古墓群』－都市計画道路建設工事に伴う緊急発掘調査－ 1994.3 （浦添市教育委員会）

3：『玉城朝薫の墓調査報告書』 1989.3（浦添市教育委員会）

4：『内間字誌』 昭和56年12月3日 内間字誌編集委員会（内間自治会）

5：上江洲 均 昭和55年10月1日「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』（国分直一 博士古稀記念論集編纂委員会）

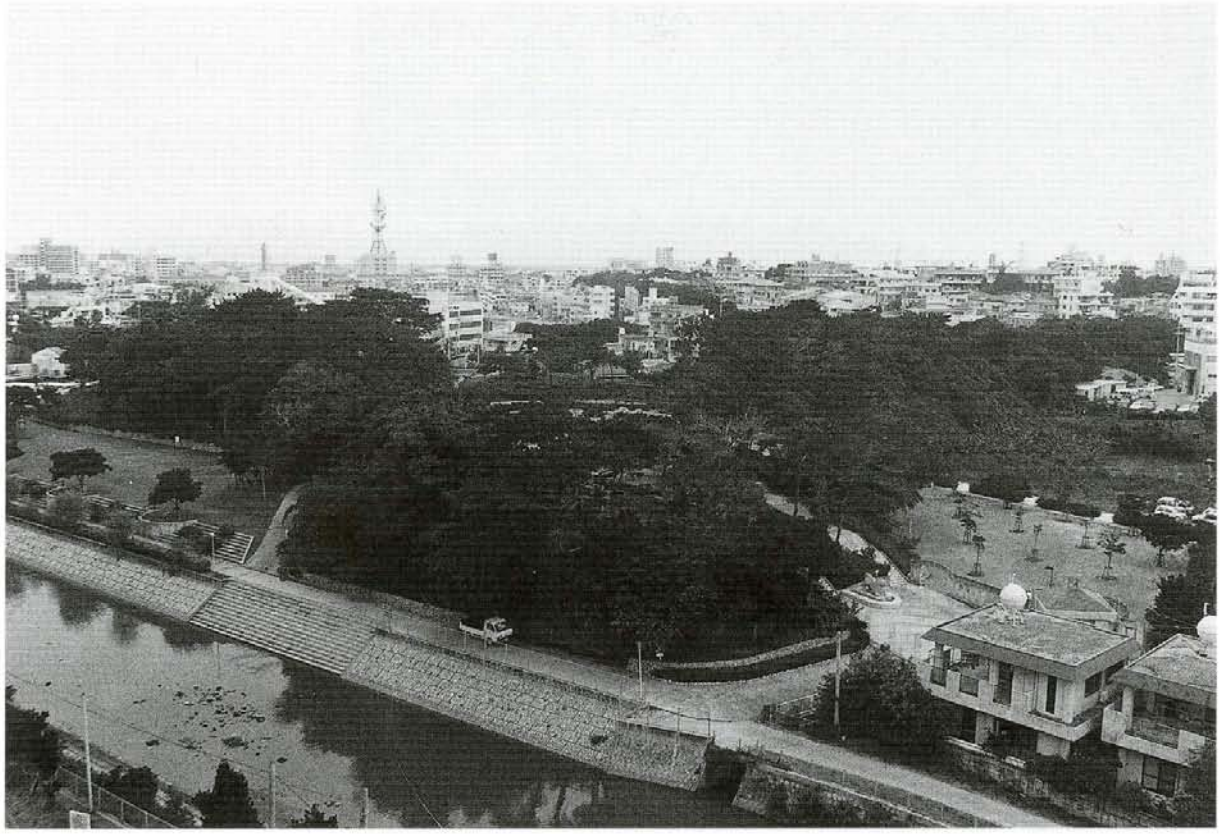


安里 進・廣木ゆかり作成

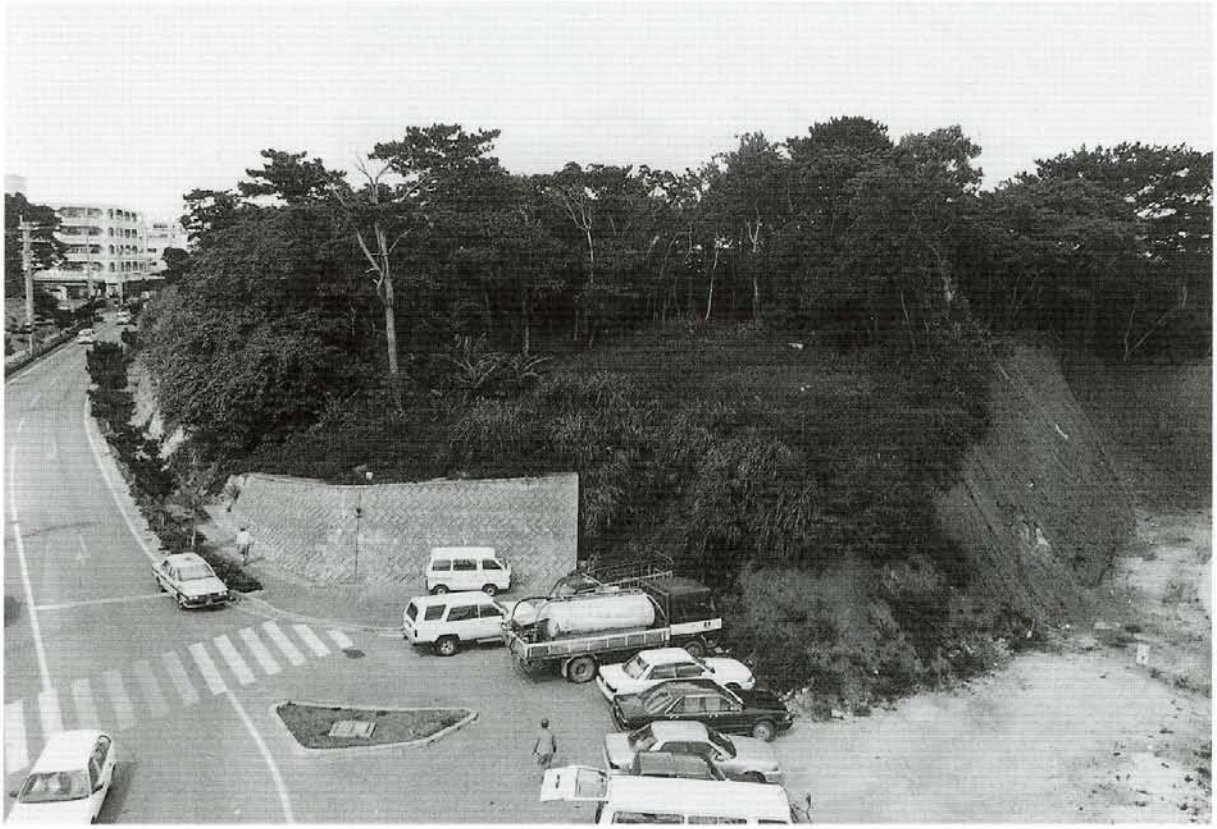
第24図　内間西原古墓群　蔵骨器編年表

年号は銘書による。死は死亡年、洗は洗骨年、＊は不明。

写 真 図 版



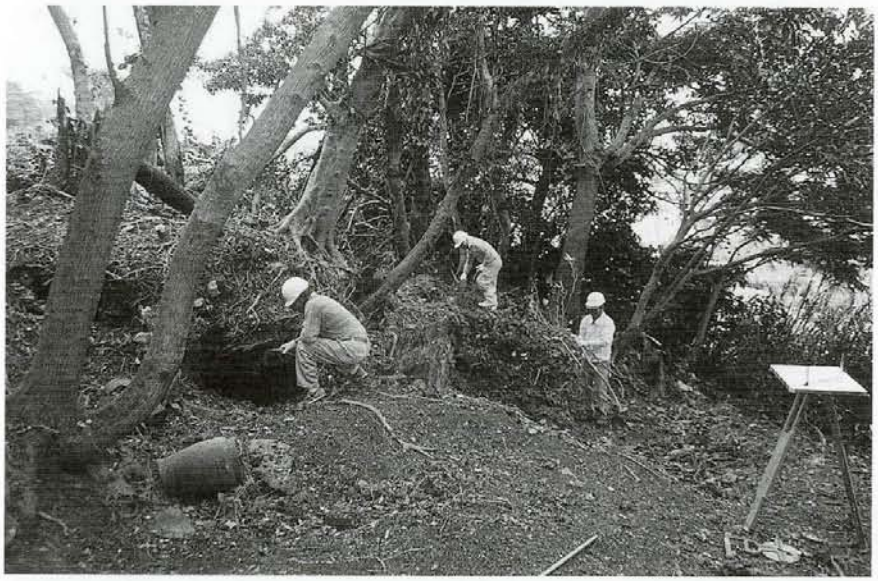
▲ 南から　写真左下は安謝川



▲ 南西から　中央の小丘が消防出張所予定地、右端は市道勢理客線造成工事中、左端は市道宮仲線

図版１　内間西原古墓群遠景

◀ 伐開前

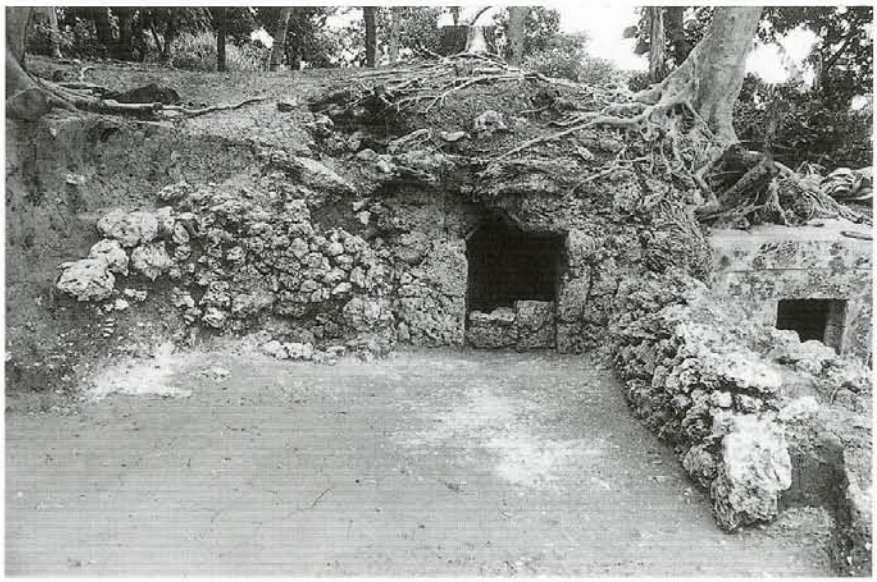


◀ 伐開作業

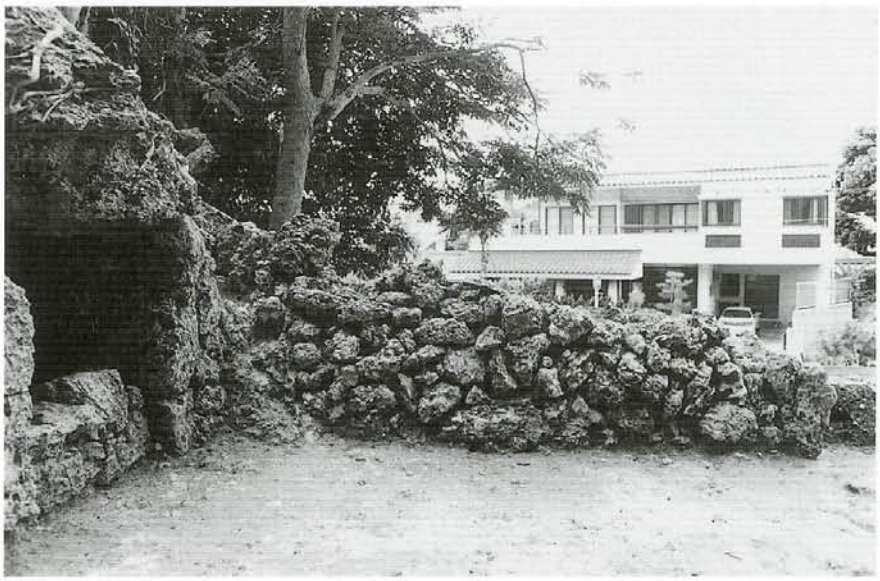
◀ 伐開後

図版２　発掘前の状況（12号～14号墓）

◀ 12～14号墓全景（発掘後）
（写真左から12・13・14号墓）



◀ 正面（写真右端は13号墓）



◀ 西側の墓庭石垣
（写真右端は墓庭入口）

図版３　12号墓

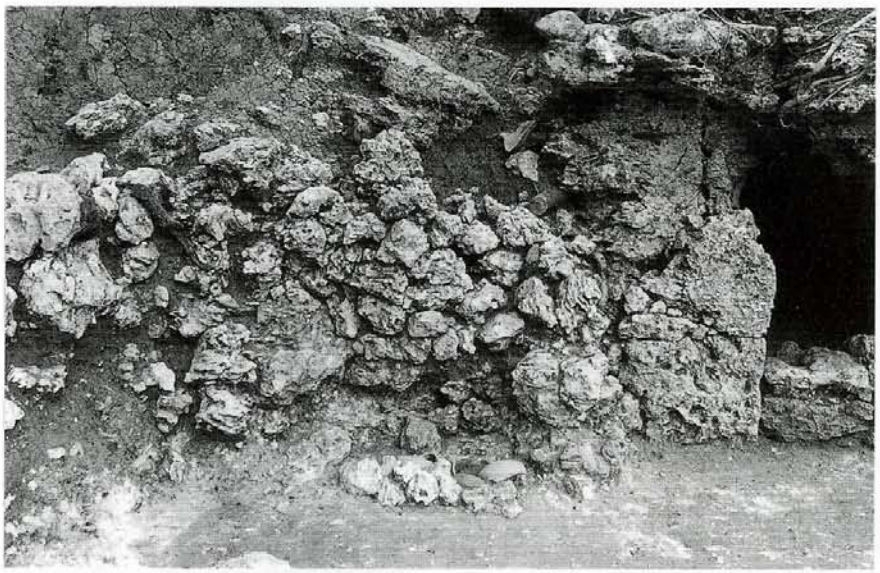
◀ 蔵骨器出土状況（写真右上は墓口）
＊墓庭の南東隅に集められていた

◀ 同上（南東側から撮影）

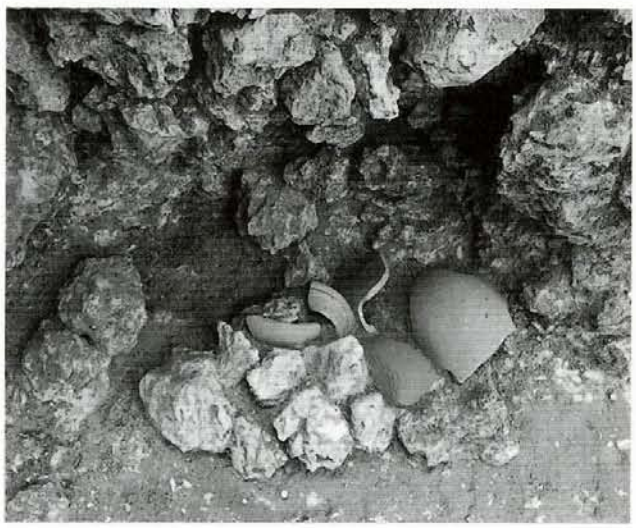
◀ 墓庭の二次堆積土

図版４　12号墓

◀ 墓室内
（蔵骨器底部と蓋の出土状況）



◀ 12号墓仮墓正面（写真中央下）

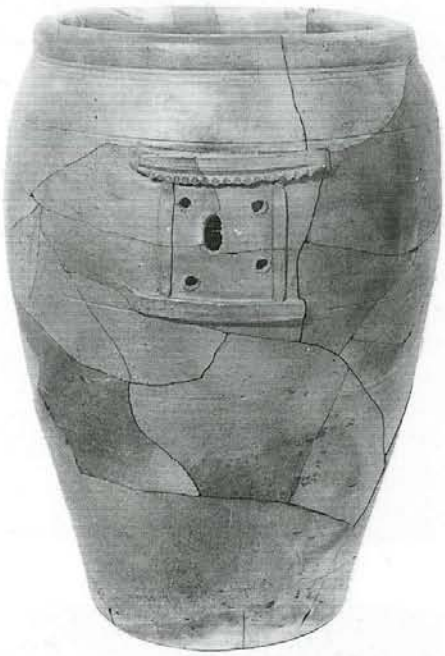


▲ 12号墓仮墓（蔵骨器出土状況）

▲ 12号墓仮墓（完掘状況）

図版５　12号墓

12-1



12-2

12-3

12-4

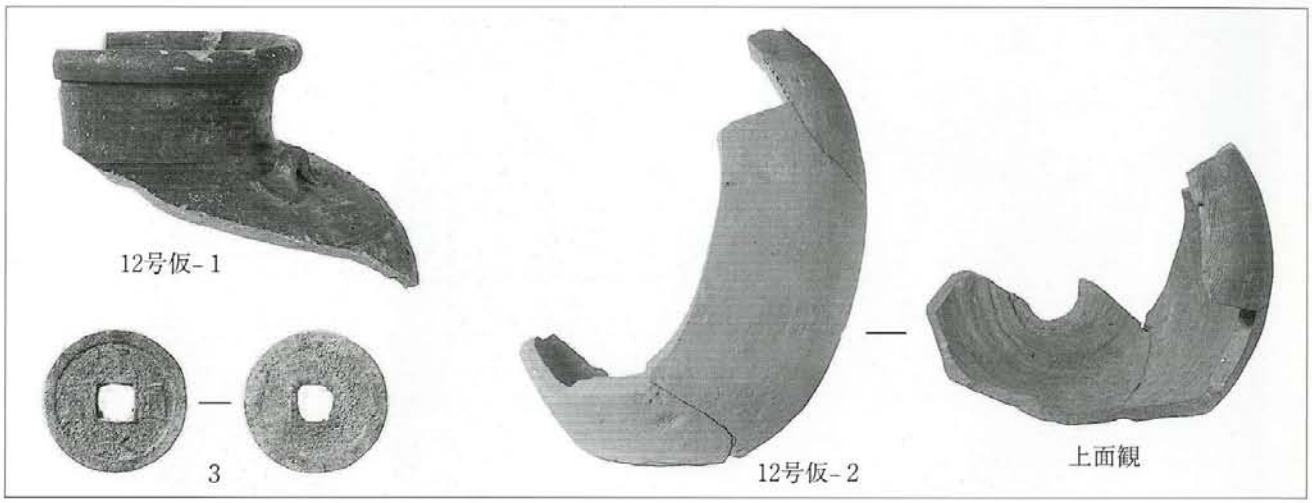
12-5

12-6

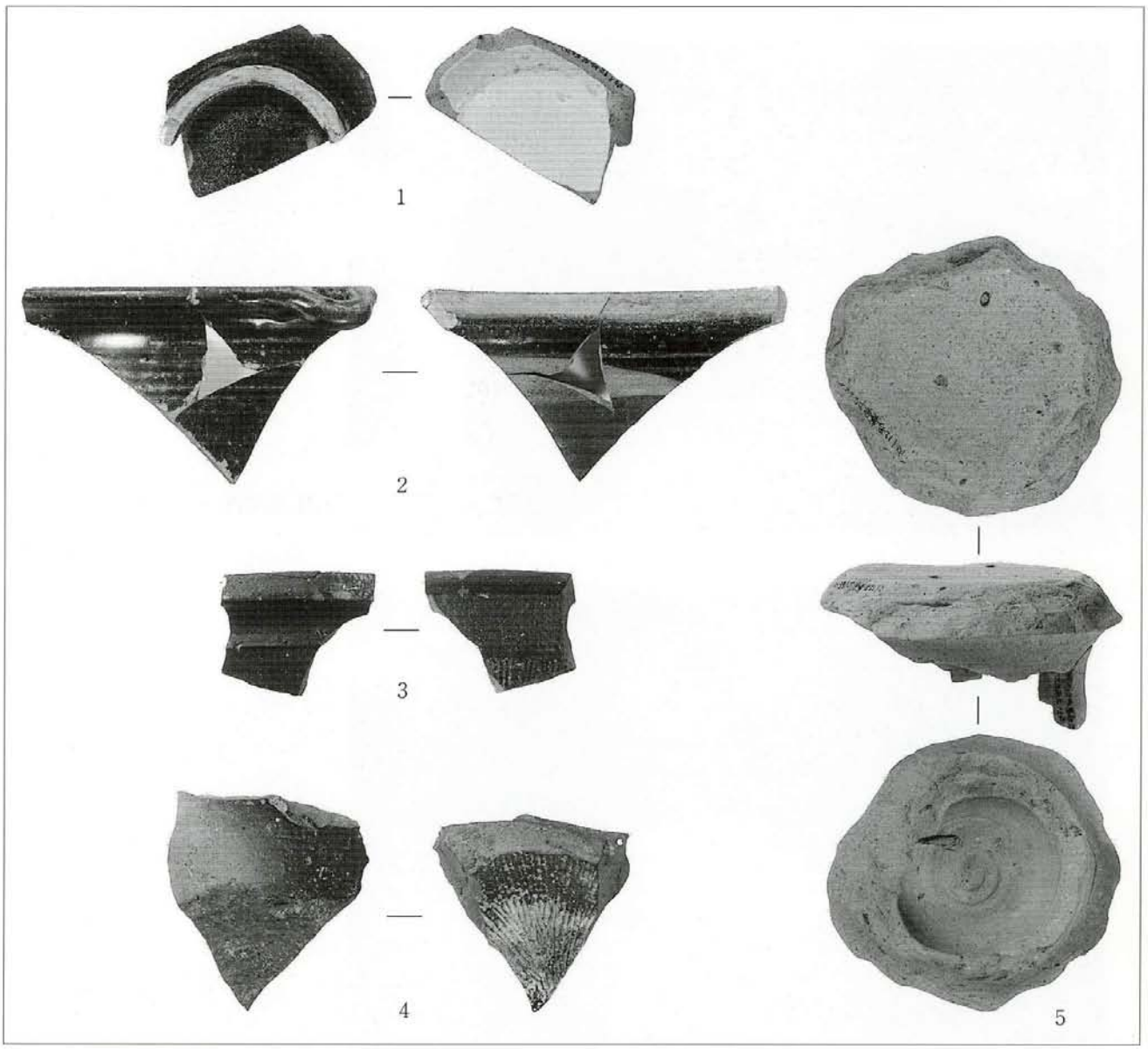
12-7

12-8

図版6　12号墓蔵骨器



▲ 12号墓仮墓出土遺物



▲ 墓庭二次堆積土出土遺物

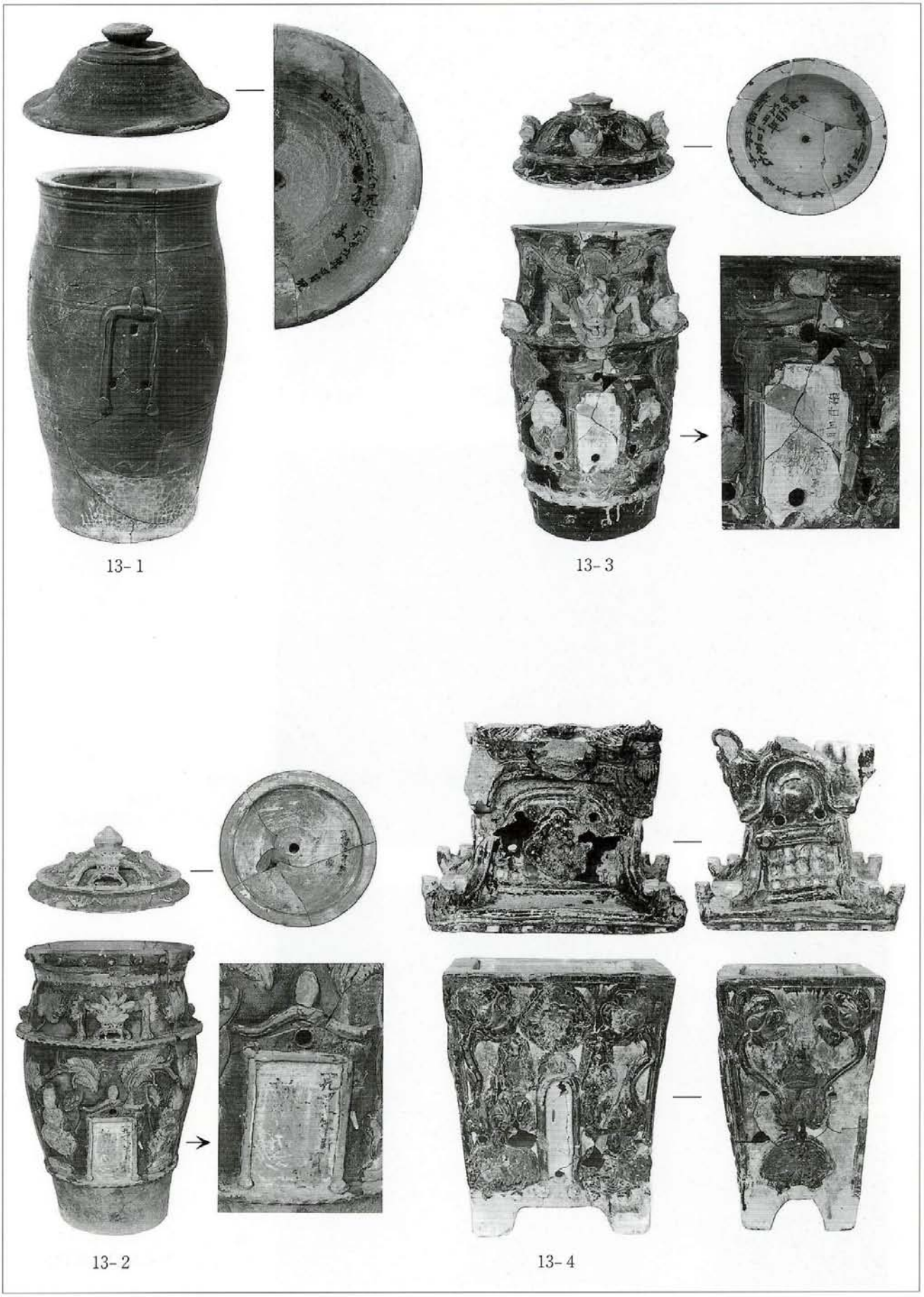
図版 7　12号墓

◀ 正面（写真の左端は12号墓）

◀ 墓庭囲い（東側）

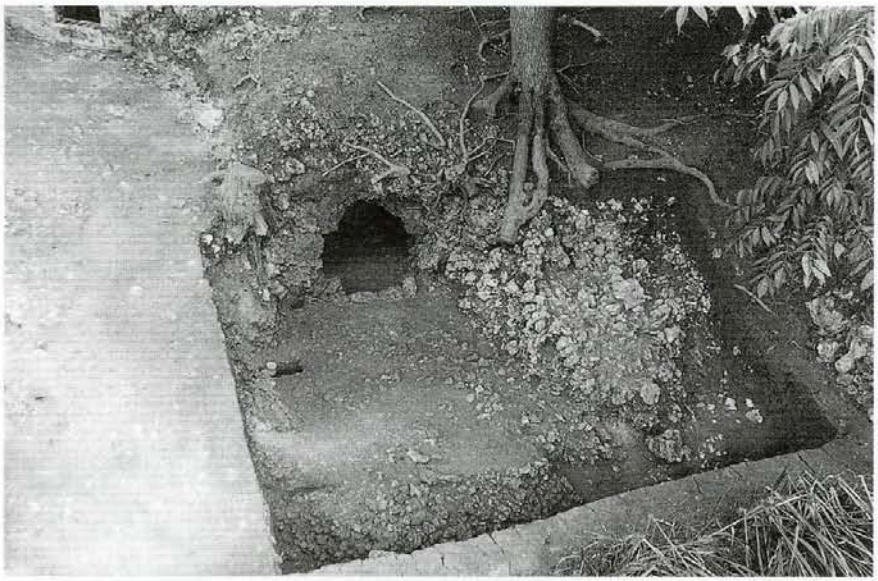
◀ 墓室内（蔵骨器の出土状況）

図版８　13号墓



図版９　13号墓蔵骨器

◀ 正面（発掘前）
写真左上は13号墓



◀ 全景（発掘後）
写真左端は13号墓墓道

◀ 正面
写真左下は墓庭に埋納された小壷

図版10　14号墓

◀ 東側の墓庭囲い（岩盤）と
二次堆積土（13号墓道）の断面
写真右端は墓口

◀ 墓室内の円形石台と
鉄釉瓶の出土状況

▲ 蔵骨器出土状況（二次堆積土＝13号墓墓道造成土）

▲ 墓庭に埋納された小壷

図版11　14号墓

14-1

14-2

14-3

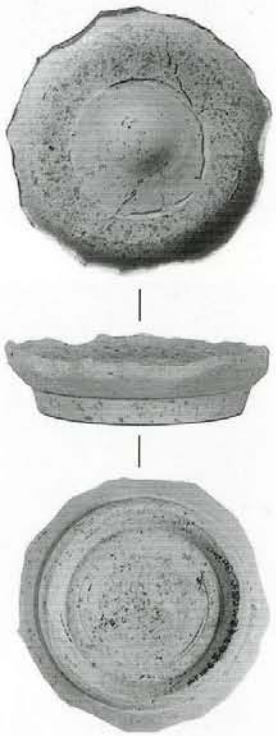
14-4

▲ 蔵骨器

1

▲ 墓室内出土

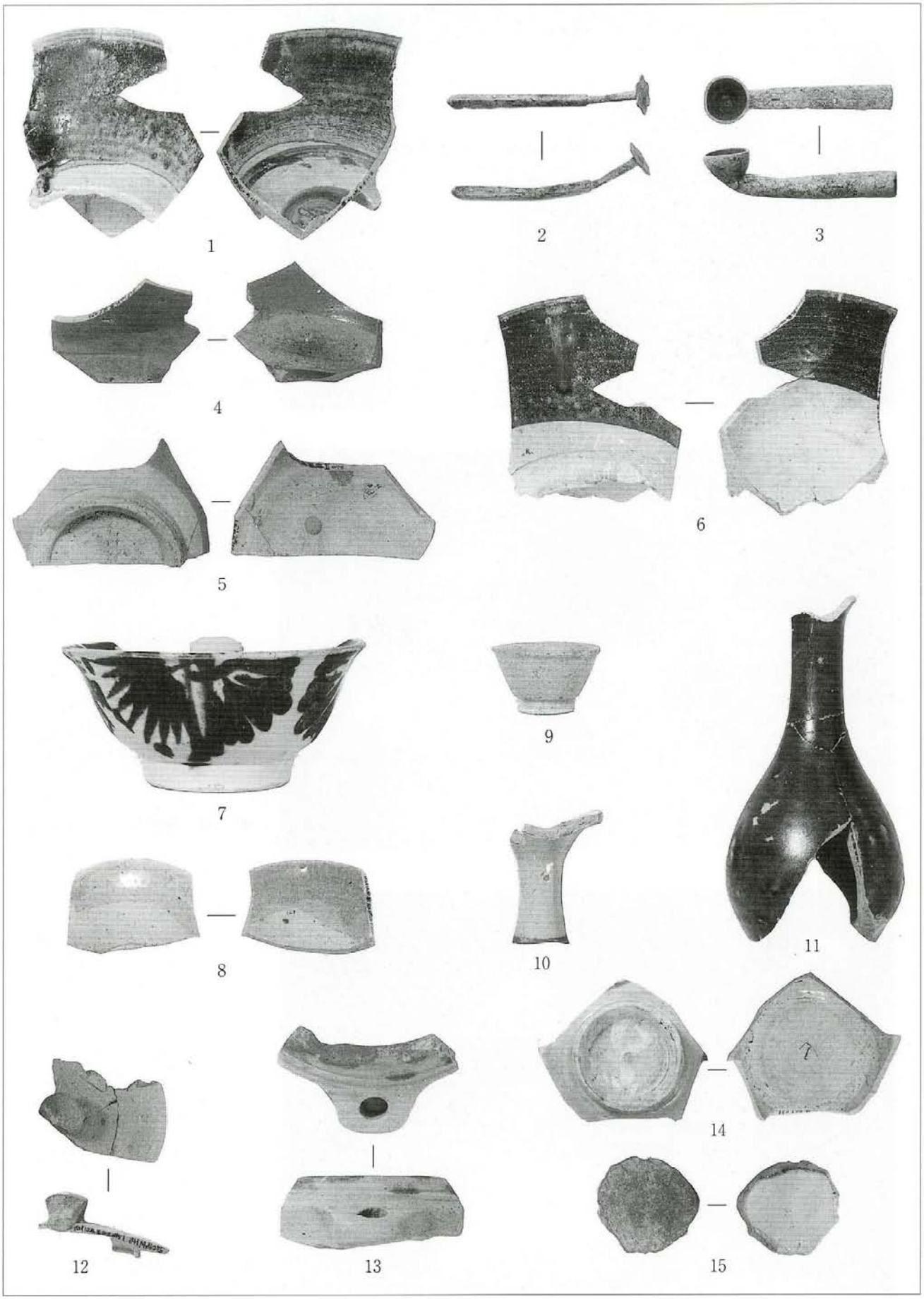
2



3

▲ 墓庭埋納

図版12　14号墓



図版13　14号墓

◀ 発掘前

◀ 正面（発掘後）

◀ 北側の墓庭囲いと墓庭入口

図版14　15号墓

◀ 墓庭に散乱した蔵骨器
（発掘前）

◀ 墓室内
壺（写真左）の出土状況と床面の円形くぼみ（写真中央）

◀ 徳利と猪口の出土状況
（墓庭入口）

図版15　15号墓

15-1

15-4

15-5

15-2

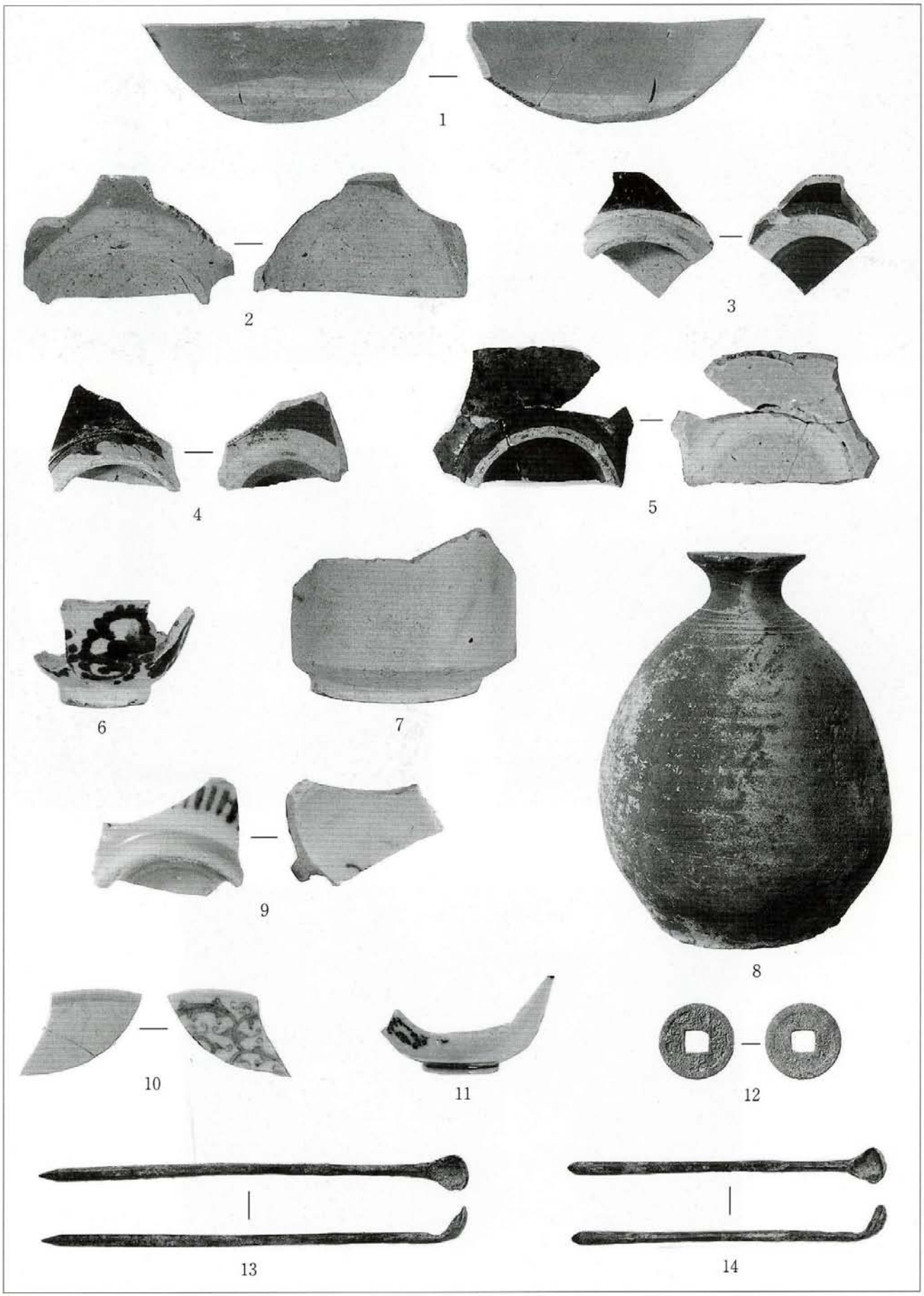
15-6

15-3

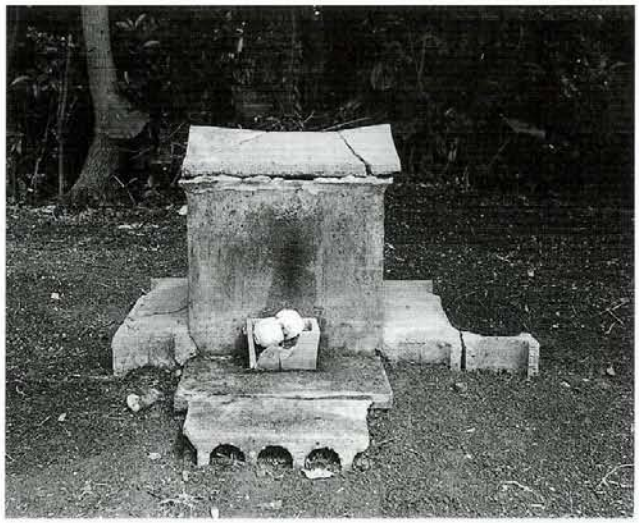
▲ 蔵骨器

墓庭床面直上出土 ▶

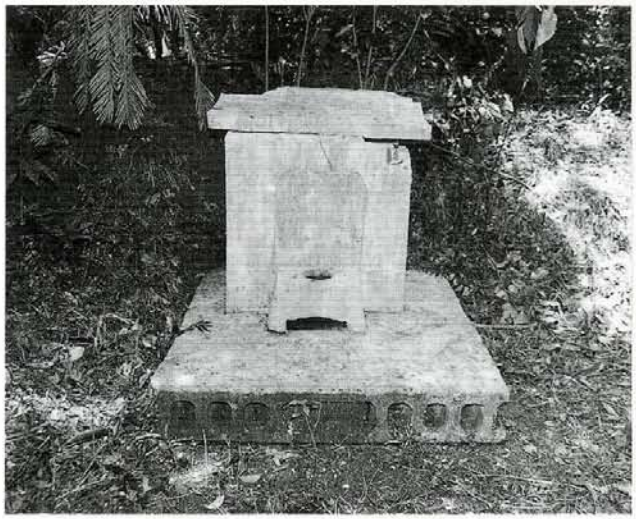
図版16　15号墓



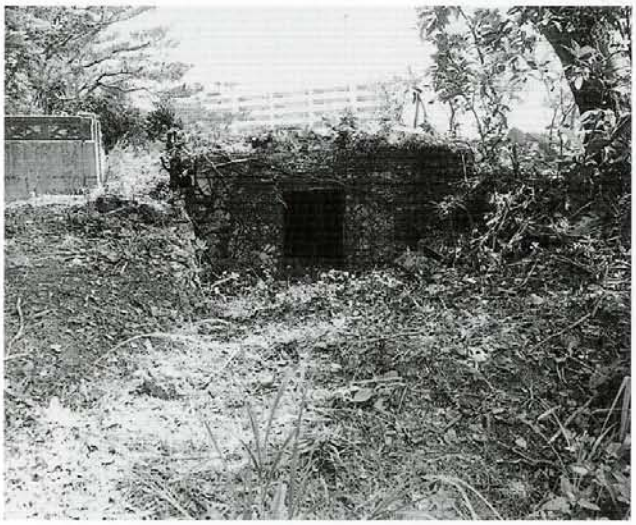
図版17　15号墓



▲ 16号墓



▲ 17号墓



▲ 18号墓

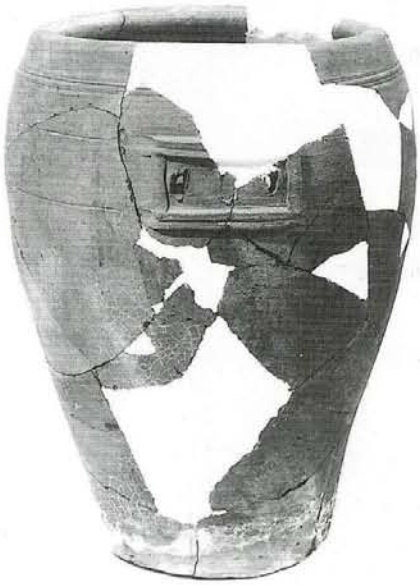
▲ 19号墓

▲ 20号墓

図版18　近代以降の墓

墓道-1

墓道-3



墓道-2

表採

表採厨子甕の中から出土したかんざし

図版19　墓道・表採　蔵骨器

浦添市文化財調査研究報告書 第30集

内間西原（イリバル）古墓群Ⅱ

－浦添市消防内間出張所及び都市計画道路勢理客線造成工事に伴う緊急発掘調査－

発行日　１９９９年（平成11年）３月30日

発行所　浦添市教育委員会
〒901-9501　浦添市安波茶１丁目１番１号
TEL 098-876-1234（内6213・6214）
FAX 098-878-1487

印　刷　㈱ちとせ印刷